

Kami tuki guma
上月隈遺跡

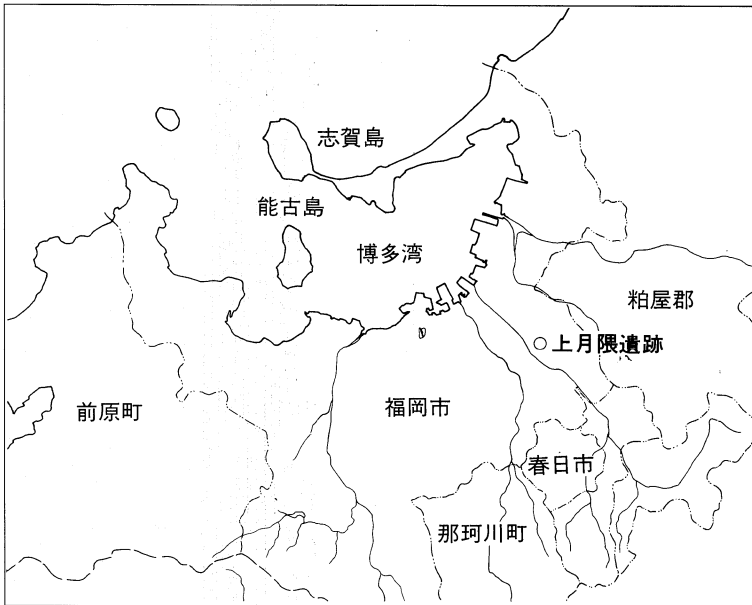
福岡市埋蔵文化財調査報告書第257集

1991

福岡市教育委員会

Kami tuki guma

上月隈遺跡



遺跡略号 KTG

遺跡調査番号 8958

1 9 9 1

福岡市教育委員会

序

福岡市東部の金隈から月隈へ続く丘陵地帯は、弥生時代から古墳時代にかけての一大墳墓群として著名なところであり、各支脈には甕棺墓群をはじめとする多くの遺跡があります。なかでも、弥生時代前期から後期にわたって甕棺群が営まれた金隈遺跡や内行花文鏡が出土した宝満尾遺跡は著名で、様々の貴重な成果が報告されています。

今回発掘調査した上月隈遺跡では、甕棺墓等からなる弥生時代の墳墓群と多数の近世墓が検出されました。甕棺墓は、弥生時代の墳墓域の広がりや密度の濃さを示すものです。また、近世墓からは多数の人骨や副葬遺物が出土しました。これらは、弥生時代や江戸時代の習俗や社会構造を究明するうえで貴重な資料になるものと考えます。

本書はこれらの発掘調査成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究に活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間にはご指導・ご助言をいただいた諸先生をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。殊に開発に当たられた三徳商事株式会社の方々には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

れいげん

1. 本書は、1989年度に福岡市教育委員会が福岡市博多区上月隈において緊急発掘調査した上月隈遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて磁北方位であり、真北からの偏差は西偏 $6^{\circ}21'$ である。
3. 遺構は呼称を記号化し、甕棺墓をST、土墳墓をSR、土塼をSK、近世墓をSXと記号化して呼称し、各遺構ごとのナンバーをその後に続けた。
4. 本書に掲載した遺構の実測・製図は小林義彦・田崎真理・梶村嘉長が行なった。
5. 遺物の整理実測・製図は小林・田崎が行なった。
6. 本書に掲載した写真は遺構・遺物ともに小林が撮影した。
7. 本書の執筆は、III-2-(4)の副葬遺物を田崎が執筆したほかは小林が担当した。
なお、弥生時代甕棺墓および近世墓出土の人骨については、中橋孝博先生（九州大学第2解剖学教室）の玉稿をいただき内容の充実を図った。
8. 本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財センターに保管している。
9. 本書編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：8958	遺跡略号：KTG	分布地図番号：10-A-7
調査地籍：福岡市博多区大字上月隈字山浦170番1		
工事面積：1,481㎡	調査対象面積：1,481㎡	調査実施面積：1,049㎡
調査期間：1989年11月20日～12月22日		

本文目次

序

I. はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	1
II. 立地と歴史的環境	5
1. 立地と歴史的環境	5
2. これまでの調査	7
III. 調査の記録	8
1. 調査の概要	8
2. 調査の記録	10
1). 甕棺墓	10
2). 土壙墓	28
3). 土壙	31
4). 近世墓	34
3. 小結	42
付論 『福岡市上月隈遺跡出土人骨（弥生・近世）』 中橋孝博	43

挿図目次

Fig. 1. 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
Fig. 2. 上月隈遺跡位置図 (1/5,000)	3
Fig. 3. 上月隈遺跡周辺地形図 (昭和初期頃) (1/5,000)	4
Fig. 4. 上月隈遺跡周辺現況図 (1/600)	6
Fig. 5. 上月隈遺跡遺構配置図 (1/200)	8 ~ 9
Fig. 6. ST-01・02実測図 (1/30)	11
Fig. 7. ST-03~08実測図 (1/30)	13
Fig. 8. ST-01~03甕棺実測図 (1/12)	14
Fig. 9. ST-04~07甕棺実測図 (1/12)	16
Fig. 10. ST-09・10実測図 (1/30)	17
Fig. 11. ST-08~10甕棺実測図 (1/12)	18
Fig. 12. ST-11~14実測図 (1/30)	20
Fig. 13. ST-11・13甕棺実測図 (1/6)	21
Fig. 14. ST-15・16実測図 (1/30)	22
Fig. 15. ST-12・14~16甕棺実測図 (1/12)	23
Fig. 16. ST-17~20実測図 (1/30)	25
Fig. 17. ST-17・18甕棺実測図 (1/12)	26
Fig. 18. ST-19・20甕棺実測図 (1/12)	27
Fig. 19. SR-01~03実測図 (1/45)	29

Fig. 20. SR-04~06実測図 (1/45)	30
Fig. 21. SK-01実測図 (1/30)	31
Fig. 22. SK-02・03実測図 (1/30)	32
Fig. 23. SK-01・02出土甕棺実測図 (1/12)	33
Fig. 24. 近世甕棺実測図 (1/8)	35
Fig. 25. 近世墓供献土器実測図(1) (1/3)	36
Fig. 26. 近世墓供献土器実測図(2) (1/3)	37
Fig. 27. 近世墓供献銅銭拓影 (2/3)	38

図 版 目 次

PL. 1. (1). 調査区全景 (西から)	(2). 調査区全景 (東から)
PL. 2. (1). 調査区西部甕棺墓群 (東から)	(2). ST-01・02 (東から)
(3). ST-01~06 (西から)	
PL. 3. (1). ST-07・15 (西から)	(2). ST-09~11・SR-01 (東から)
(3). ST-09・SR-01 (北から)	
PL. 4. (1). 調査区西南部甕棺墓群 (北から)	(2). SR-02・03 (北から)
(3). ST-12・13 (北から)	
PL. 5. (1). 調査区西南部甕棺墓群 (北東から)	(2). ST-16・SK-01 (北から)
(3). ST-18~20 (東から)	
PL. 6. (1). ST-01 (東から)	(2). ST-10納棺状況 (東から)
(3). ST-19 (北から)	
PL. 7. (1). SR-01 (東から)	(2). SR-02・03 (東から)
(3). SR-06 (東から)	
PL. 8. (1). SR-02 (西から)	(2). SR-03 (北から)
(3). SR-05 (西から)	
PL. 9. (1). SX-05 (南から)	(2). SX-134・135 (西から)
(3). SX-73 (北から)	
PL. 10. (1). SX-147 (北から)	(2). SX-103 (南から)
(3). SX-104 (西から)	
PL. 11. 出土甕棺	
PL. 12. 出土甕棺・近世墓副葬遺物	

表 目 次

Tab. 1. 甕棺墓(ST)一覧表	10
Tab. 2. 土壙墓(SR)一覧表	28
Tab. 3. 近世墓(SX)一覧表(1)	39
Tab. 4. 近世墓(SX)一覧表(2)	40
Tab. 5. 近世墓(SX)一覧表(3)	41

I. はじめに

1. 調査にいたるまで

上月隈遺跡は、福岡市東部に広がる月隈丘陵西麓の丘陵上にあり、昭和初期までは御笠川右岸の水田地帯に面したのどかな農村であった。しかし、敗戦後の米軍板付基地整備拡張に伴って水田は滑走路と化し、丘陵は弾薬庫や射撃場になっていたために地形は変貌している。また、福岡空港の騒音による人口の減少化が進み、遺跡周辺はその姿を変えつつある。

当該地は、上月隈遺跡ののる丘陵の中央最頂部に位置し、江戸時代後期以降近年に至るまで共同墓地として利用されてきた。そのために昭和30年代より始まる丘陵の地下げから免れ、今は南側斜面を除く三面が約10mの崖肌を見せた残丘になっている。この共同墓地も経営廃止が決まり、昭和63年初めに改葬されたのち年末に財産管理者より売却された。その後平成元年10月に地権者の三徳商事株式会社より早期着工をめざした当該地の造成計画が提出され、埋蔵文化財課で現地踏査を実施した。その結果、丘陵上で弥生時代の甕棺墓数基を確認し、墓域の拡がり予想されるために発掘調査の必要性が生じた。

このように経過から、早急な対応を迫られた埋蔵文化財課では協議を重ねた末、年内終了をめざして直ちに発掘調査を実施した。発掘調査は1989年（平成1年）11月20日に開始し、同年12月22日にとどこおりなく終了した。

なお、発掘調査では未改葬の近世墓が多数出土したために数々の問題が生じた。その解決にあたっては三徳商事株式会社の諸氏や福岡市衛生局の職員の方々をはじめとして、多くの人々から物心両面にわたるご理解とご協力をたまわった。殊に、臭気の強い近世墓の人骨の発掘、取り上げにあたっては、作業員の方々の労苦は並々ならぬものであった。末筆ながら記して謝意を表します。

2. 発掘調査の組織

調査委託	三徳商事株式会社
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係
庶務担当	第2係長 柳沢一男 松延好文
調査担当	小林義彦
補助員	梶村嘉長 田崎真理
調査・整理作業	出雲義住 岩隈史郎 尾園 晃 篠崎伝三郎 安部国恵 池見恭子 岩



Fig. 1. 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

本朝子 内山和子 大瀬良清子 奥田弘子 木村良子 久良木シズエ 近藤
 澄江 酒井紀子 佐々木幸子 坂田美佐子 土斐崎孝子 橋本恵美子 馬場
 イツ子 松本藤子 光安利津江 村上エミカ 村上エミ子 村田敬子

また、発掘調査・整理報告にあたっては、中橋孝博(九州大学)、櫻木晋一(九州帝京短期大学)、山口譲治、大庭康時(福岡市教育委員会)の諸先生方には色々貴重なご助言、ご指導を賜わった。



Fig. 2. 上月限遺跡位置図 (1/5,000)

1. 上月限遺跡
2. 板付遺跡群
3. 席田久保園遺跡
4. 席田赤穂浦遺跡
5. 席田大谷遺跡
6. 宝満尾遺跡
7. 宝満尾東遺跡
8. 下月限天神森遺跡
9. 下月限宮ノ後遺跡
10. 浦田遺跡
11. 金隈遺跡
12. 諸岡遺跡
13. 仲島遺跡

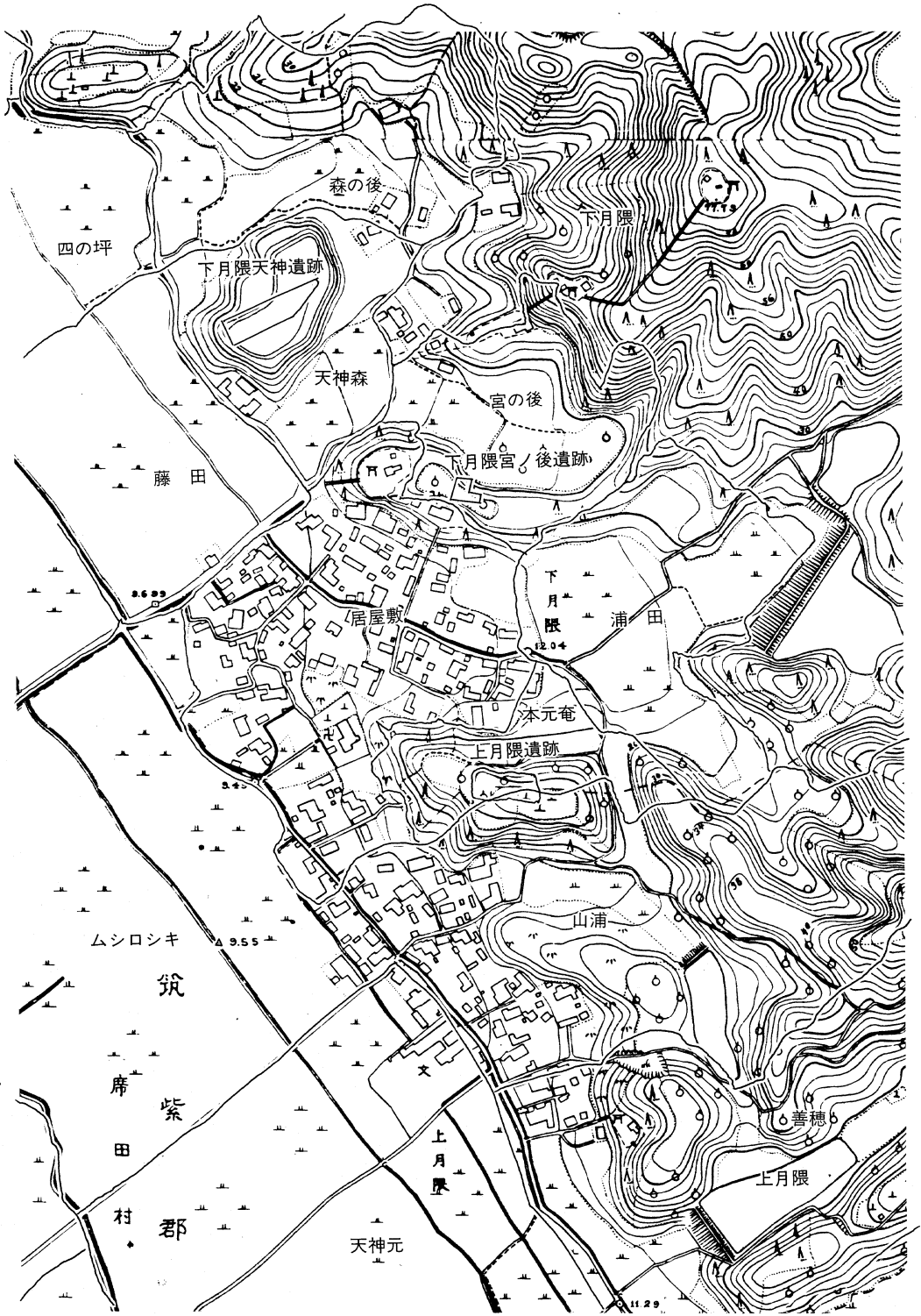


Fig. 3. 上月隈遺跡周辺地形図 (昭和初期頃) (1/5,000)

II. 立地と歴史的環境

1. 立地と歴史的環境

福岡平野はその背後を三郡山系や背振山地・油山等の山塊によって囲まれ、これらの山塊を源流とする御笠川と那珂川が平野を貫流して博多湾に注いでいる。その福岡平野の東には、三郡山地から派生した大城山（四王寺山）の山麓に、古第三紀層よりなる月隈丘陵が南東から北西へと長くのび、粕屋平野との境をなしている。

この南北に長い月隈丘陵からは西へのびる舌状丘陵が幾筋も派生し、その丘陵上には甕棺墓群をはじめとする弥生時代の遺跡が拡がる。これらの丘陵と丘陵との間には狭い谷水田があり、丘陵上に展開する弥生時代遺跡が、その谷水田を主たる生産活動の場としていたろうことは容易に推定できよう。

上月隈遺跡は、福岡市文化財分布地図「東部Ⅰ、下月隈10」で周知化された遺跡で、福岡市博多区大字上月隈字山浦170番1にあるが、字図(Fig. 2)によると遺跡ののる丘陵は大字上月隈字山浦と大字下月隈本元庵にまたがり、丘陵尾根が字境となっている。上月隈遺跡は月隈丘陵西麓の支丘上に立地するが、昭和初期の古地図(Fig. 3)をみると、東側に開析された狭い谷がのび、一見独立丘陵状をなす。北約400mに位置する天神森遺跡と立地的共通性をもつ。

上月隈遺跡のある月隈丘陵西麓の丘陵上に展開する弥生時代の墳墓群をみると、北方へ谷を挟んだ舌状丘陵には下月隈B遺跡(下月隈宮ノ森遺跡：註1)、天神森遺跡(註2)、宝満尾遺跡(註3)、宝満尾東遺跡(註4)、久保園遺跡(註5)、中尾遺跡(註6)、青木遺跡(註7)、下白井遺跡(註8)等の遺跡群がつづく。一方、目を南に転ずれば金隈遺跡(註9)があり、さらに南には中・寺尾遺跡(註10)、森園遺跡(註11)がある。

福岡平野東縁の月隈丘陵上に立地する遺跡群に対し、御笠川を挟んだ平野のただ中の低丘陵上には板付遺跡(註12)、諸岡遺跡(註13)があり、さらに南には奴国の中心とされる須玖岡本遺跡(註14)や門田遺跡(註15)等をのせる春日丘陵が対峙している。これらの遺跡からは、銅鏡や青銅利器、鉄器、ゴホウラ製貝輪等を副葬する甕棺墓が多く、周辺部を圧倒する。肥沃な平野を背景とする生産力に起因するものであろう。

月隈丘陵で弥生人の活動が開始されるのはやや遅れ、弥生時代前期末でこれをさかのぼる遺跡は今のところ明確でなく、大規模な集落の展開は想定できない。ただ、上月隈遺跡南方の影ヶ浦遺跡(註16)では前期後半に遡る57基の貯蔵穴群が丘陵尾根に沿って展開し、丘陵ひとつ隔てた金隈遺跡の甕棺墓群の開始時期と合致する。中期になると、量的に圧倒的な増加をみせ、後期へと継承発展させる。月隈丘陵に展開する甕棺墓群の多くはこの時期のものである。その中で、宝満尾遺跡B地点の土壙墓群や同じ月隈から銅鏡、銅矛等が共伴して出土したとの報告(註

(註1)「下月隈宮ノ森遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第61集 1980
 (註2)「下月隈天神森遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第76集 1981
 (註3)「宝満尾遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集 1974

(註4) (註3)に同じ
 (註5)「久保園遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集 1983
 (註6)「中尾遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第109集 1984

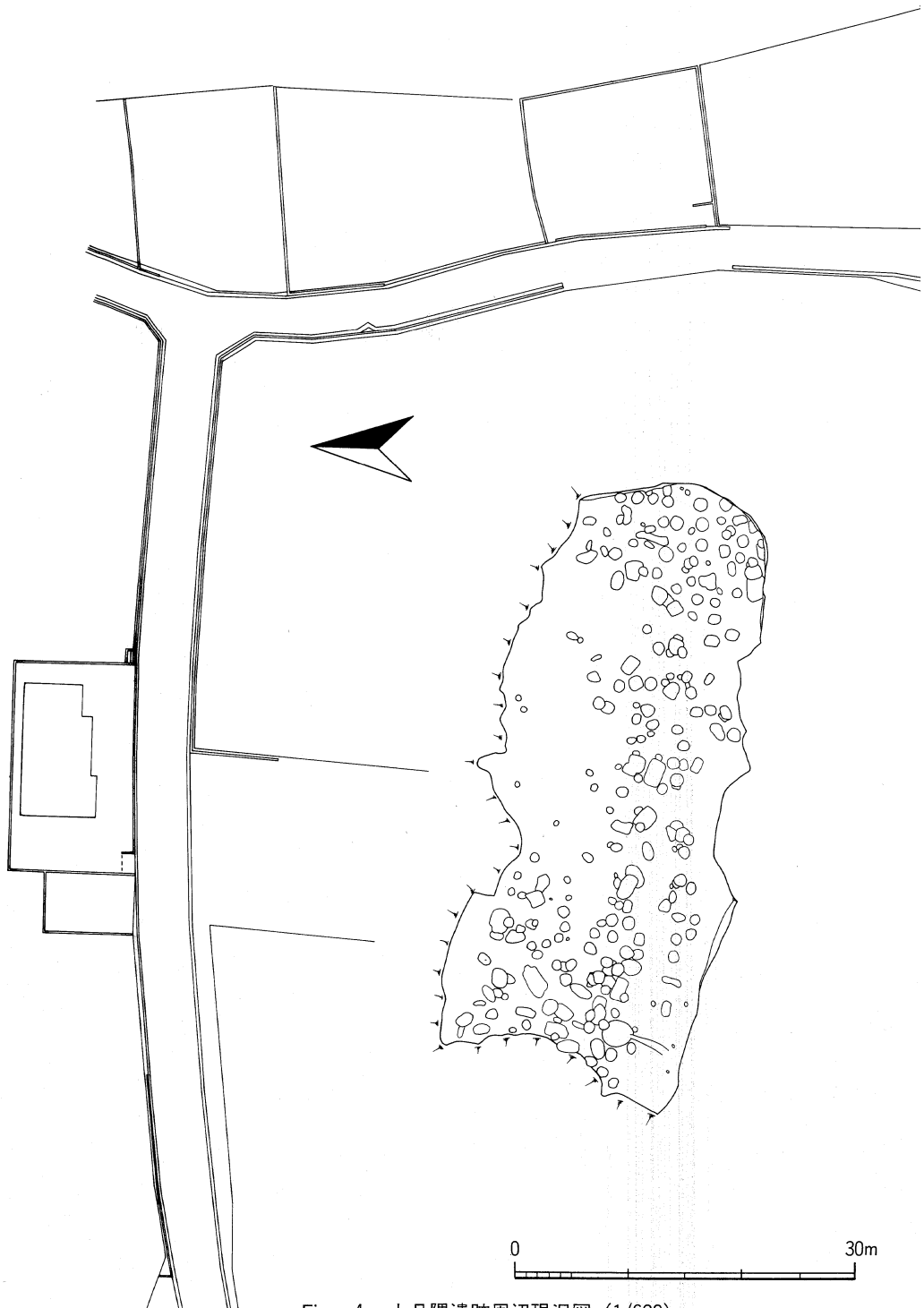


Fig. 4. 上月隈遺跡周辺現況図 (1/600)

(註7) (註3)に同じ

(註8) (註3)に同じ

(註9) 「金隈遺跡・第一次調査報告」
福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集 1970外

(註10) 「中・寺尾遺跡」 大野町の文化財 第3集 1971外

(註11) 「中・西コモリ遺跡」 大野城市埋蔵文化財調査報告書第2集 1978

(註12) 「板付」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 1976

(註13) 「板付周辺遺跡調査報告書1」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集 1974

(註14) 「筑前須玖史前遺跡の研究」 京都帝国大学文学部考古学研究报告第11集 1930

(註15) 「門田遺跡」 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第9集 1978

17)は、その流れを物語るものであろう。いずれにしても月隈丘陵の甕棺墓群の消長は北部九州における弥生時代遺跡の拡張、隆盛、衰退期と一致し、その中で捉えられる。

2. これまでの調査

上月隈遺跡のある月隈丘陵は、弾薬庫等の米軍基地があったことや採石場、果樹園等が多いことから長い間遺跡の空白地帯であった。わずかに金隈遺跡や宝満尾遺跡が発掘調査された外は、土採り中に発見された甕棺墓例がある位であった。しかし、これらはいずれも甕棺墓遺跡で、集落跡や水田跡等の生産活動に係わる遺構が明らかでなく、その地域相は必ずしも明らかではなかった。

1972年（昭和47年）の米軍基地返還後は、分布調査が実施され、1975年（昭和50年）からは席田総合運動公園の建設に先立って8次に亘る発掘調査が実施された。その結果、丘陵上からは弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡や墳墓群が検出され、次第にその様相が明らかになりつつある。ここでは弥生時代の墳墓遺跡について概略を整理してみた。

金隈遺跡 1969・70年、80～82年（昭和44・45年、昭和55～57年）の5ヶ年に亘って発掘調査が実施された。甕棺墓348基、土壙墓119基、石棺墓2基からなる弥生時代前期末から後期初めの一大墳墓遺跡で、1972年（昭和47年）に国史跡に指定された。ゴホウラ製貝輪や磨製石鏃、石剣、丸玉を副葬した甕棺墓がある。

下月隈B遺跡（宮ノ後遺跡） 上月隈遺跡の北に位置し、1979～80年（昭和54～55年）、土採り中に発見された。中期後半～後期初頭の甕棺墓21基、土壙墓9基からなる。

天神森遺跡 下月隈B（宮ノ後）遺跡北の独立丘陵状に位置する。1980年（昭和55年）に調査。中期から後期の土壙墓19基を検出した。

宝満尾遺跡 1972年（昭和47年）に調査。甕棺墓6基、石棺墓1基、土壙墓13基、石蓋土壙墓3基を検出し、4号土壙墓には漢式（内行花文明光）鏡が副葬されていた。

宝満尾東遺跡 宝満尾遺跡の丘陵先端に位置する。米軍の工事により破壊。大石の下より多くの甕棺が出土したとあり、支石墓の可能性もある。

久保園遺跡 宝満尾遺跡の北にあり、1977年（昭和52年）に調査。石棺墓1基を検出。銅鐸の鑄型を出土した赤穂ノ浦遺跡が南に隣接する。

席田林崎遺跡（註18） 久保園遺跡ののる丘陵の西先端にある。土採り工事中に多数の甕棺が出土したという。現在は完全に消滅し、詳細は不明である。

中尾遺跡 1978～80年（昭和53～55年）に調査。調査区北端で中期後半の甕棺墓1基を検出した。墓域は拡大が予想される。

青木遺跡 中期中葉～後葉の甕棺墓からなる。土採り工事中に発見され、未調査のまま消滅。

下臼井遺跡 月隈丘陵の先端部に位置する。土採り工事中に中期の甕棺墓が検出された。

（註16）「影ヶ浦古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第266集 1991

（註17）「銅矛、銅剣の研究」 高橋建自 1925

（註18）福岡市埋蔵文化財センターの力武卓治氏のご教示による

III. 調査の記録

1. 調査の概要

上月隈遺跡は月隈丘陵の西麓にあり、昭和初期の地形図によれば東西200m、南北100mで東側に狭い谷が入り、独立丘陵の感をなす。この丘陵は昭和30年頃には、西側を迂回する道路から崖面上の甕棺が望まれたとのことである。その後、中央部から地下げが繰り返され、今は丘陵の西側先端部と本調査区を残すのみになっている。

本調査区は、丘陵の東南部にあたり、旧状を留めるのは南側斜面のみで、他の三方は切り立った崖面になっている。加えて、丘陵頂部は江戸時代以降、村の共同墓地として利用されていたために旧状の削平がはなはだしい。改葬前の現況図によれば、中央部はさらに1段高い墓地になっており、削平は1m以上に及ぶものであろう。

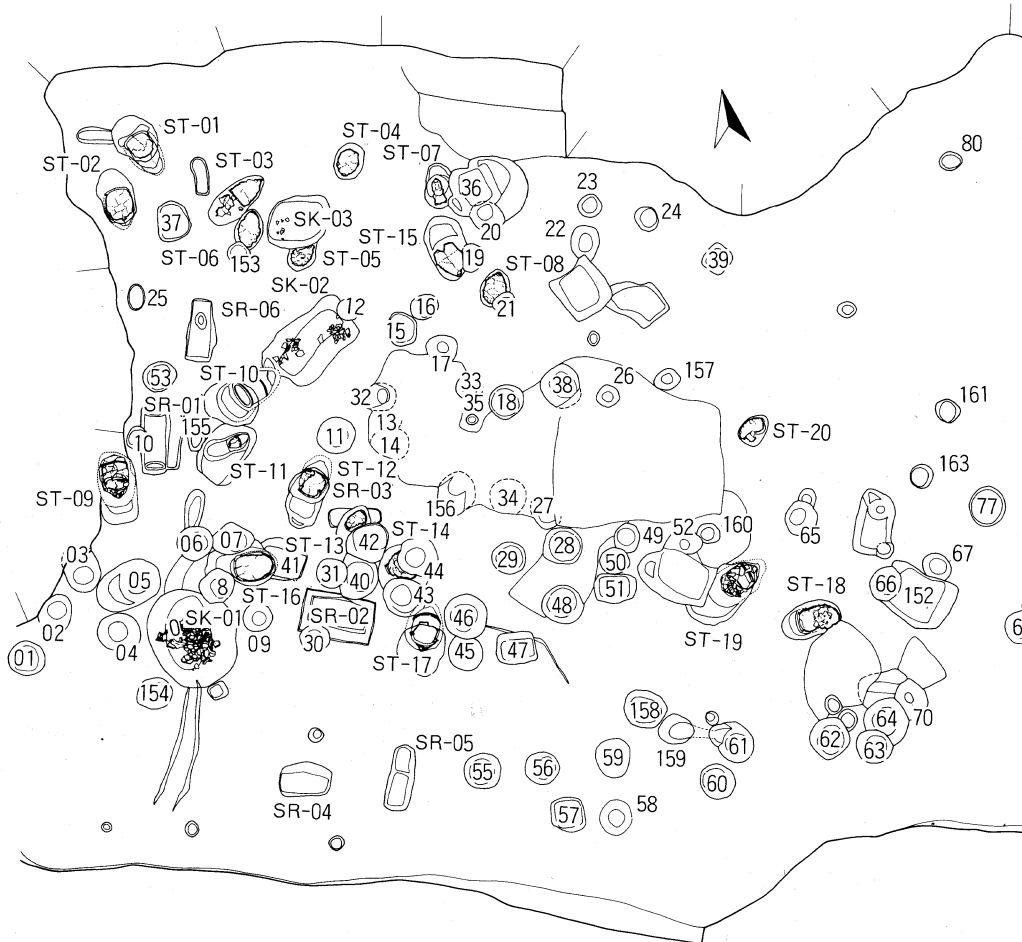
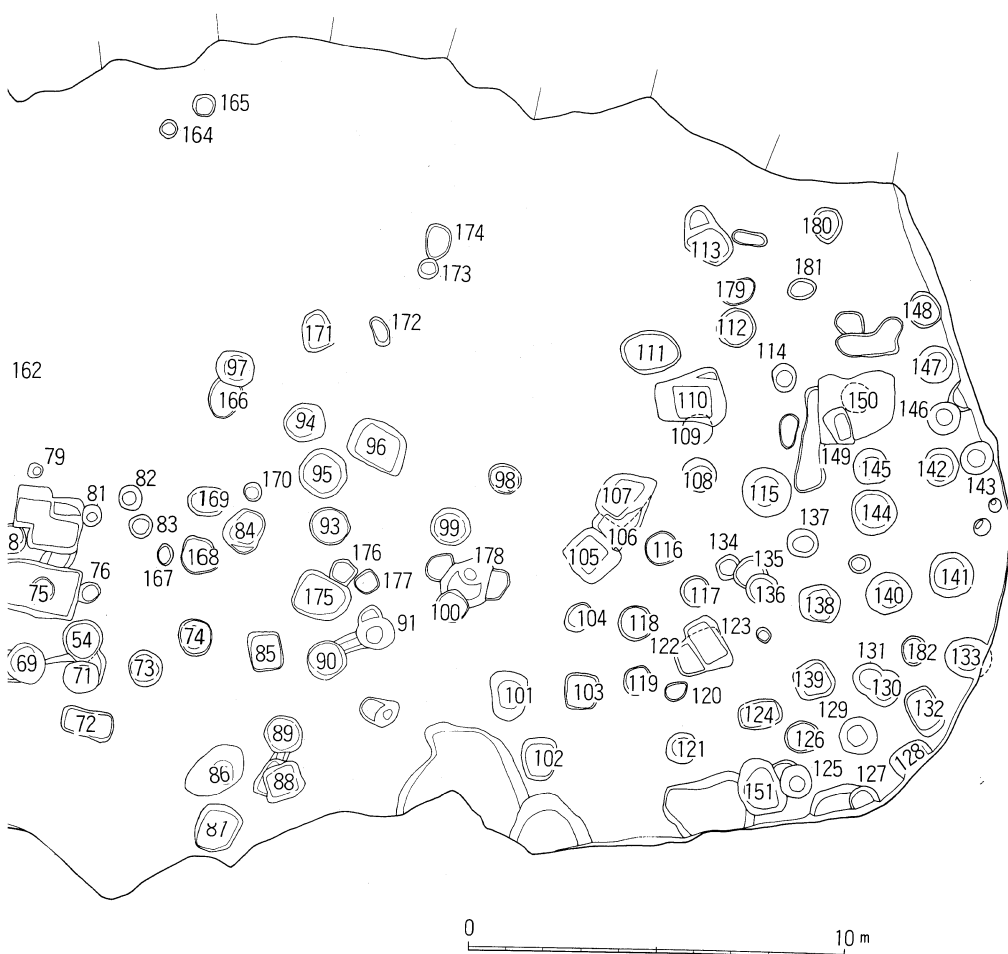


Fig. 5. 上月隈遺跡遺構配置図 (1/200)

調査前の所見によれば、調査区の北西部で4～5基の甕棺墓が確認される外は近世甕片と人骨片が散乱しており、改葬前の現況を勘考すると甕棺墓は調査区の西によって拡がることが予想された。これにより、発掘調査は西側の甕棺墓検出と墓域の確認を主眼として遺構の検出に努めた。

発掘調査にあたって近世墓は、時間的制約と改葬済みの故をもって手をつけずとの立場をとったが、甕棺墓との重複が著しく、甕棺墓に先行して近世墓の調査が必要となった。その結果、弥生時代中期から後期の甕棺墓20基、土壙墓6基、土壇3基と182基の近世墓を検出した。弥生時代の甕棺墓群は調査区西寄りに分布し、南斜面ほど遺存状況が良好であった。調査区中央部には改葬時の攪乱抗が幾つもあり、この中から甕棺片が出土していることから、改葬による甕棺墓の消失が考えられる。一方、近世墓は、改葬前の現況を裏付けるように全域に拡がる。検出した近世墓のうち半数以上が未改葬であり、人骨とともに六道銭、数珠、煙管等の副葬品が多数出土した。



2. 調査の記録

1). 甕棺墓 (ST)

甕棺墓は総てで20基を検出したが、攪乱抗から大型甕片が出土していることを勘案すれば、さらに数基の甕棺墓があったものと推定される。検出した20基の甕棺墓のうち、成人墓は18基、小児墓は2基で圧倒的に小児墓が少ない。甕棺の遺存状況も西隅と南側斜面は良好であるが、中央によるほど悪くなる。これは近世墓による丘陵の削平に起因するものであろう。甕棺墓群は調査区やや西寄りに分布するが、中央部が改葬に際して大きく削平されていることを勘案すれば、さらに東から北へ拡がるものと推定される。

しかし、本調査区は丘陵の東南域にすぎず、昭和30年頃の所見をもとにすれば、甕棺墓は丘陵の尾根に沿って全体に拡がっていたと思われる。

また、7基の甕棺墓からは人骨が検出されたが、副葬品をもつものはなかった。

ST-01 (Fig. 6・8, PL. 2・11)

調査区の北西隅で検出した単口式の成人用甕棺墓で、ST-02の北に隣接して位置する。墓壇は上面形が137×111cmの楕円形プランで、北から南へ32°の角度で長さ150cm程の斜抗を掘り、40°の傾斜をもって甕を埋置している。甕の口縁部に沿って深さ約10cmの段がつき、木蓋をした痕跡が明瞭に残るが、粘土等で目隠りをした跡はない。甕棺と墓壇底の隙間には、掘り出した真砂土を固く敷詰めて安定を保っている。甕棺はN-24.5°-Wに主軸方位をとる。

No.	方位	傾斜	形状		墓壇		時期	備考
			合口形式	器形	規模	形状		
1	N-24.5°-W	40°	木蓋単口	甕	137×111		中期後葉	
2	N-1°-W	29°	木蓋単口	甕	158×87	楕円形 二段掘り	中期後葉	
3	N-61.5°-E	ほぼ水平	呑口	甕+甕	179×81	楕円形	中期中葉	
4	N-25.5°-E	41°	合口	甕+甕	101×70		中期後葉	
5	N-38°-E	42°		甕	68(+⊙)×72		中期後葉	頭蓋骨、大腿骨片 ST-05→SK-03
6	N-26.5°-E	24°		甕	114×75	楕円形	中期後葉	大腿骨片 ST-06→SK-157
7	N-8.5°-E	44°		甕	120×64(+⊙)	楕円形	中期後葉	ST-07→SK-36
8	N-25.5°-E	36°		甕	102×77	楕円形	中期後葉	ST-08→SX-21
9	N-2.5°-E	43°	覆口	甕+甕	192×100	楕円形 二段掘り	中期後葉	頭蓋骨、大腿骨片
10	N-62°-E	29°	木蓋単口	甕	218×132	楕円形 二段掘り	中期後葉	ST-10→ST-11
11	N-71.5°-E	39°	接口	甕+甕	110×180	楕円形 二段掘り	中期末	ST-11→SX-155
12	N-34°-E	37°	単口	甕	207(167)×96	楕円形 二段掘り	中期後葉	
13	N-44°-E	16°	単口	甕	112×75	二段掘り	後期初頭	ST-13→SR-03→SX-42
14	N-63°-E	40°		甕			中期後葉	ST-14→SX-40・43・44
15	N-19°-W	43°		甕	176×103	二段掘り	中期後葉	ST-15→SX-19
16	N-90°-W	34°	単口	甕	192×105	二段掘り	中期後葉	大腿骨片? ST-16→SX-07・08
17	N-22.5°-E	32°	覆口	甕+甕	125×130	円形 二段掘り	中期後葉	ST-17→SX-43
18	N-85°-E	27.5°	木蓋単口	甕	160×93	楕円形 二段掘り	中期後葉	
19	N-69°-E	31°	接口	鉢+甕	244×115	楕円形 二段掘り	中期後葉	頭蓋骨、大腿骨片
20	N-62°-E	22.5°		甕	90×68		中期後葉	

Tab. 1. 甕棺墓(ST)一覧表

甕（1）は、口径72.8cm、底径12.2cm、器高104cmを測る甕形土器である。逆「L」字状の口縁端部は内唇の張り出しが強い。胴部は砲弾状をなし、口縁部下に1条、胴部に2条の「コ」字凸帯が巡る。内外面全体に煤様の黒色顔料が塗布されている。調整は、口縁部と凸帯部がヨコナデのほかは内外面ともナデ。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。色調はにぶい赤褐色。

ST-02 (Fig. 6・8, PL. 2・11)

調査区の北西隅で検出した単口式の成人用甕棺墓で、ST-01のすぐ南に隣接する。墓壙は上部が40~50cm程削平されているが、一旦竪穴を掘った後に斜抗を掘る2段掘りの構造で、棺は27°の傾斜をもって埋置している。甕棺はN-1°-Wの主軸方位で埋置される。甕の口縁部に沿って浅い溝状の段がつき、木蓋で密封したものと考えられるが、粘土等で目貼りをした痕跡は認められない。時期は中期後葉であろう。

甕（2）は、口径70.2cm、底径12.2cm、器高101.1cmを測る甕形土器である。口縁端部は逆「L」字状を呈し、「コ」字凸帯が口縁部下に1条、胴部に2条巡る。胴部は倒卵形をなし、口縁部下は小さく内傾する。内外面全体に煤様の黒色顔料が塗布されている。調整は、口縁部と凸帯部がヨコナデのほかは内外面ともナデで仕上げるが、胴部外面上半には粗いハケ目が残る。胎土は砂粒と雲母を多く含み、焼成は良好。色調は明橙褐色。

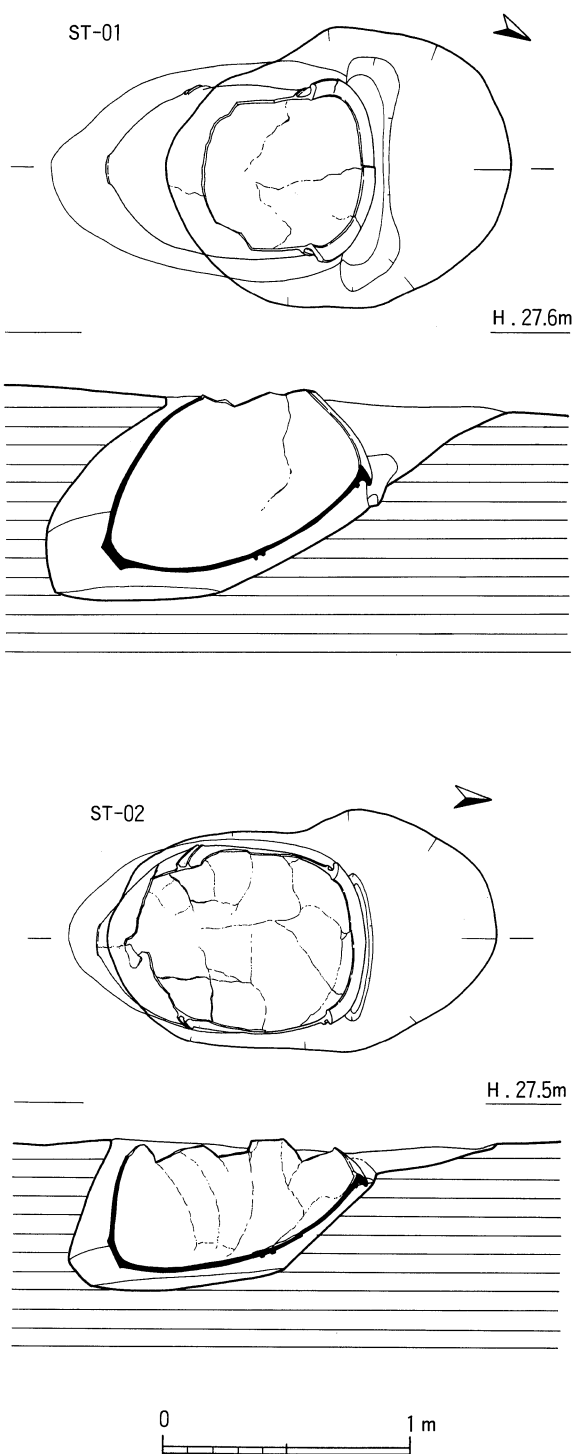


Fig. 6. ST-01・02実測図 (1/30)

ST-03 (Fig. 7・8, PL.2・11)

調査区の北西部で検出した呑口式成人用甕棺墓で、ST-02の東3mの距離に位置する。墓壇の南側はST-06と重複し、これよりも新しい。甕棺は上面の削平が著しく、棺底面を残すのみで、棺内には甕片のほか鉄と陶器の急須が乱雑に投棄されていた。墓壇は甕棺の大きさに合わせて楕円形に掘り、ほぼ水平に埋置している。上下甕はともに甕型土器を用い、口縁部を打ち欠いた上甕を下甕に挿入した形状を示す。甕の接合部には粘土等による目貼りはない。甕棺はN-61.5°-Eの主軸方位で埋置される。時期は中期中葉であろう。

上甕(3)は、口径72.0cm、底径12.4cm、器高94.8cmを測る甕形土器である。口縁部は「T」字状を呈し、砲弾形をなす胴部は上半がストレートに立ち上がる。口縁部下と胴部に小さめの三角凸帯が各1条巡る。外面と口縁内唇に煤様の黒色顔料があり、全体に塗布されていたものであろう。調整は口縁部と凸帯までがヨコナデのほかはナデ。胎土は砂粒と雲母を多く含み、焼成は良好。色調は淡褐色～淡灰黒色。

下甕(4)は、口径66.0cm、底径10.0cm、器高82.0cmを測る甕形土器である。「T」字状の口縁部は小さく内傾する。胴部は砲弾形をなすが、上半はストレートに立ち上がり、下半に小さめの三角凸帯が1条巡る。胴上部内外に煤様の黒色顔料が観察され、甕全体に塗布されていたものだろう。口縁部と凸帯部がヨコナデのほかはナデ調整。胎土は石英砂を多く含み、焼成は良好。色調は明赤橙褐色～淡黄褐色。

ST-04 (Fig. 7・9, PL.2)

調査区の西北部で検出した成人用甕棺墓で、ST-03より東へ2mの距離にある。削平による消失が著しく、下甕下半を残すのみであるが、整理復原中に別個体の甕胴部片があり、本来は合口式の甕棺墓であったろうと思われる。墓壇は、浅く竖穴を掘った後に斜抗を穿つものであろう。甕棺は主軸方位をN-25.5°-Eにとり、41°の傾斜をもって埋置している。棺内からは成人女性の人骨片が出土した。時期は中期後葉であろう。

上甕(5)は、現存高26.6cmを測る甕型土器で、胴部上半と底部を欠く。卵形の胴部には2条の「コ」字凸帯が巡り、凸帯下は半球形に膨らんで窄まる。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は淡褐色。

下甕(6)は、底径11.4cm、器高66.8cmを測る甕形土器で、口縁部を欠く。倒卵形の胴部は凸帯部で最大径56.2cmを測り、上半は内弯して立ち上がる。器壁は厚く、最大径部に2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は凸帯部がヨコナデで内外面にはハケ目が残る。胎土は石英砂と雲母を多く含み、焼成は良好。色調は明赤褐色。

ST-05 (Fig. 7・9, PL.2)

調査区の西北部で検出した甕形土器を用いた成人用甕棺墓で、ST-06のすぐ東に位置する。甕棺墓は削平が著しく、棺底面を浅く残すのみで、北側はSK-03によって切られる。甕棺内に

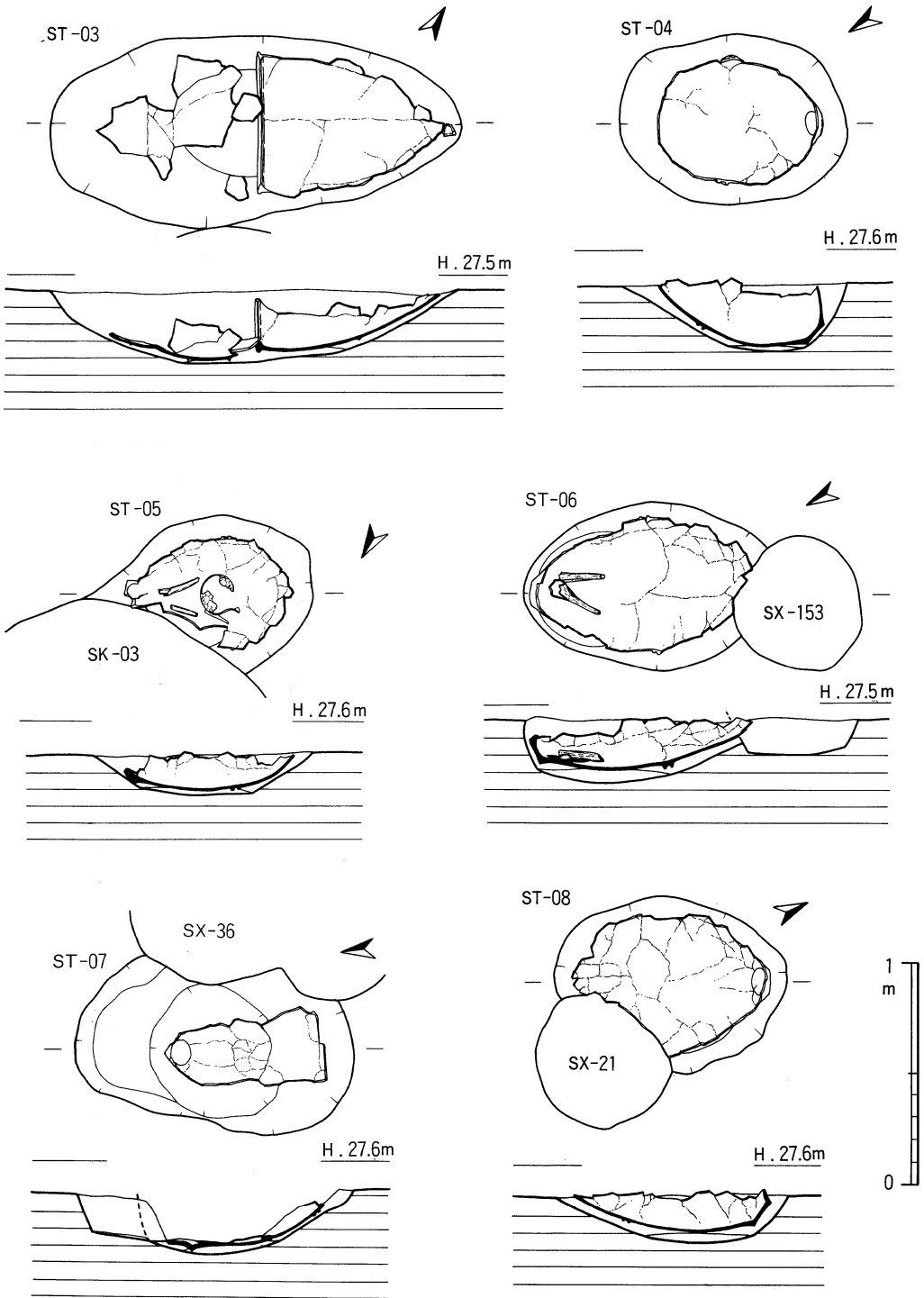


Fig. 7. ST-03~08実測図 (1/30)

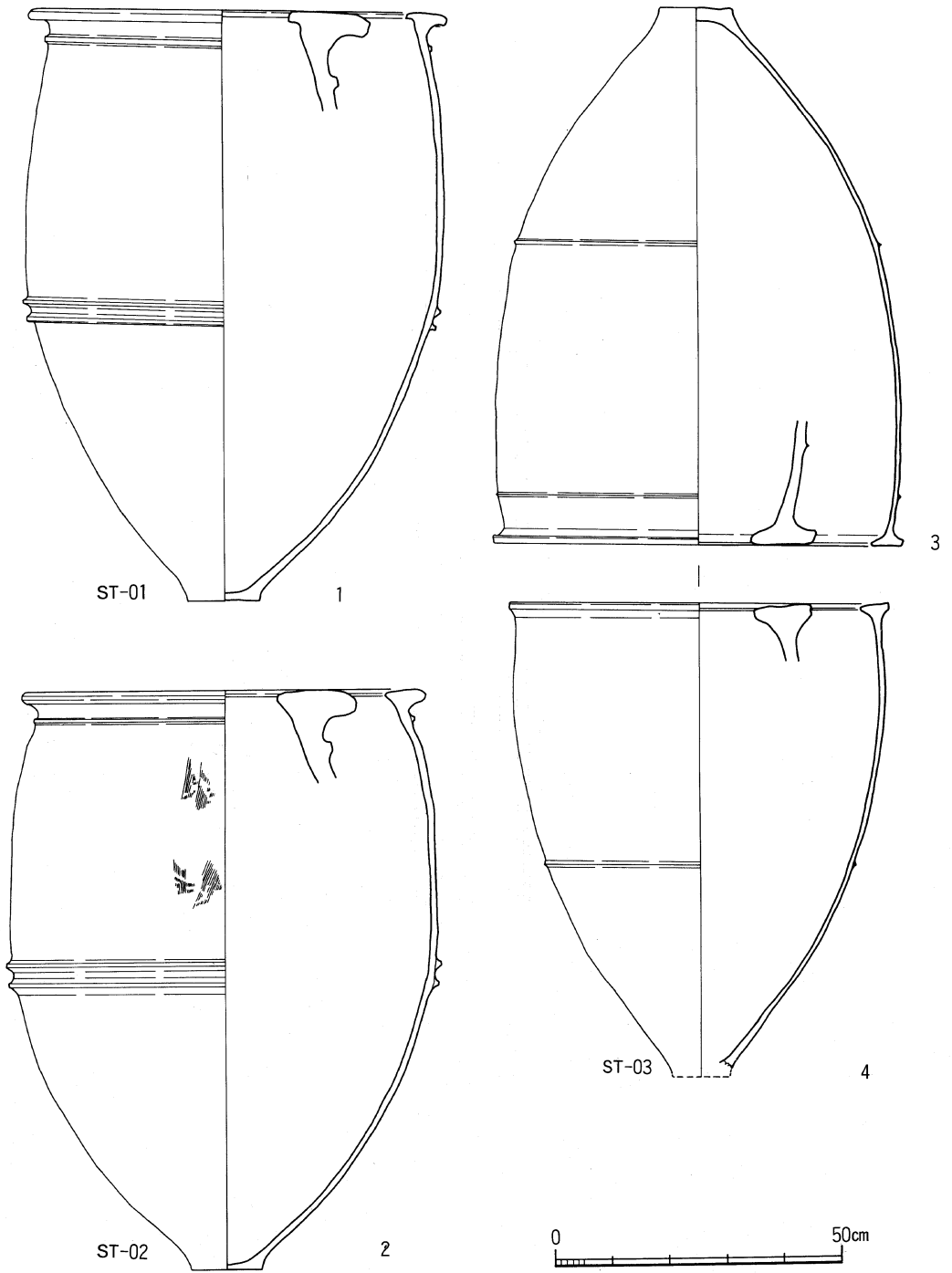


Fig. 8. ST-01~03 甕棺実測図 (1/12)

は頭骨と大腿骨の一部が遺存していた。甕底部を足位とした仰臥屈葬と推定される。被葬者は熟年女性である。墓壙は甕棺墓よりやや大きめの楕円形プランを呈しよう。甕棺は主軸方位をN-38°-Eにとり、42°の傾斜をもって埋置される。時期は中期後葉であろう。

甕(7)は、口縁部を欠く甕型土器で、底径11.0cm、現高62.0cmを測る。倒卵形の胴部は上位で最大径66.8cmを測り、口縁部へむかって内湾ぎみに窄まる。胴部下半にはシャープな「コ」字凸帯が2条巡る。調整は凸帯部がヨコナデのほかはナデ。内面には煤様の黒色顔料が付着している。胎土は小砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は内面が淡褐色、外面が明赤褐色。

ST-06 (Fig. 7・9, PL. 2)

調査区の西北部で検出した成人用甕棺墓で、北側はST-03に切られる。甕棺墓は削平が著しく、棺底面を残すのみで、上半部はSX-153に切られて消失している。墓壙は楕円形プランを呈する。甕棺はN-26.5°-Eに主軸方位をとり、24°の傾斜をもって埋置される。甕底部には成人女性の大腿骨の一部が遺存していた。時期は中期後葉であろう。

甕(8)は、底径12.4cm、現高88.0cmを測る甕形土器で口縁部を欠く。胴部はスマートな砲弾形をなし、平底の底部がつく。胴部中位にはシャープな「コ」字凸帯が2条巡る。外面には煤様の黒色顔料が一部に残る。調整は凸帯がヨコナデのほかはナデ。胎土は石英砂を多く含み、焼成は良好。色調は明赤橙褐色。

ST-07 (Fig. 7・9, PL. 3)

調査区の西北部で検出した成人用甕棺墓で、ST-15のすぐ北に位置する。削平が著しく、棺底面を浅く残すのみで、東側は近世墓SX-36によって切られている。墓壙は楕円形プランを呈し、墓壙底は浅い凹レンズ状をなす。甕棺は主軸方位をN-8.5°-Eにとり、44°の傾斜をもって埋置している。時期は中期後葉に属する。

甕(9)は、甕形土器で底径13.0cm、現高54.0cmを測る。胴部は下半にシャープな2条の「コ」字凸帯がつく砲弾形をなすものであろう。器壁は薄く、平底の底部がつく。調整は凸帯部がヨコナデ、内面はナデで仕上げるが、突帯下にはハケ目が残る。胎土は石英砂と雲母を多く含み、焼成は良好。色調は淡明褐色。

ST-08 (Fig. 7・11)

調査区の西北部で検出した成人用甕棺墓で、ST-15すぐ南に位置する。南側は近世墓SX-21と重複する。甕棺の上半部は著しい削平を受けて消失しており、棺底面を残すのみである。墓壙は楕円形プランを呈し、壙底は浅い凹レンズ状をなす。甕棺はN-25.5°-Eに主軸方位をとり、36°の傾斜で埋置している。時期は中期後葉であろう。

甕(10)は、底径12.4cm、現高73.1cmの甕形土器で口縁部を欠く。倒卵形の胴部は凸帯上位で最大径74.2cmを測り、口縁部にむかって内湾ぎみに窄まる。凸帯はシャープな三角凸帯が2条巡るが、上方の凸帯は小さく摘み出し一見「コ」字状をなす。胴部下半に煤様の黒色顔料が

残り、全体に塗布されていたものと思われる。調整は凸帯がヨコナデのほかは丁寧にナデて仕上げている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は明赤褐色。

ST-09 (Fig.10・11, PL.3・11)

調査区の西端の崖面上で検出した甕+甕の覆口式成人用甕棺墓で、SR-01のすぐ西に位置する。上甕には口縁部から胴部上半を打ち欠いた甕形土器を用いている。墓壙は南から北へ60°の急傾斜で掘り、小さな平坦面をつくった後さらに浅く掘り込む2段掘りの構造をもつ。上甕と

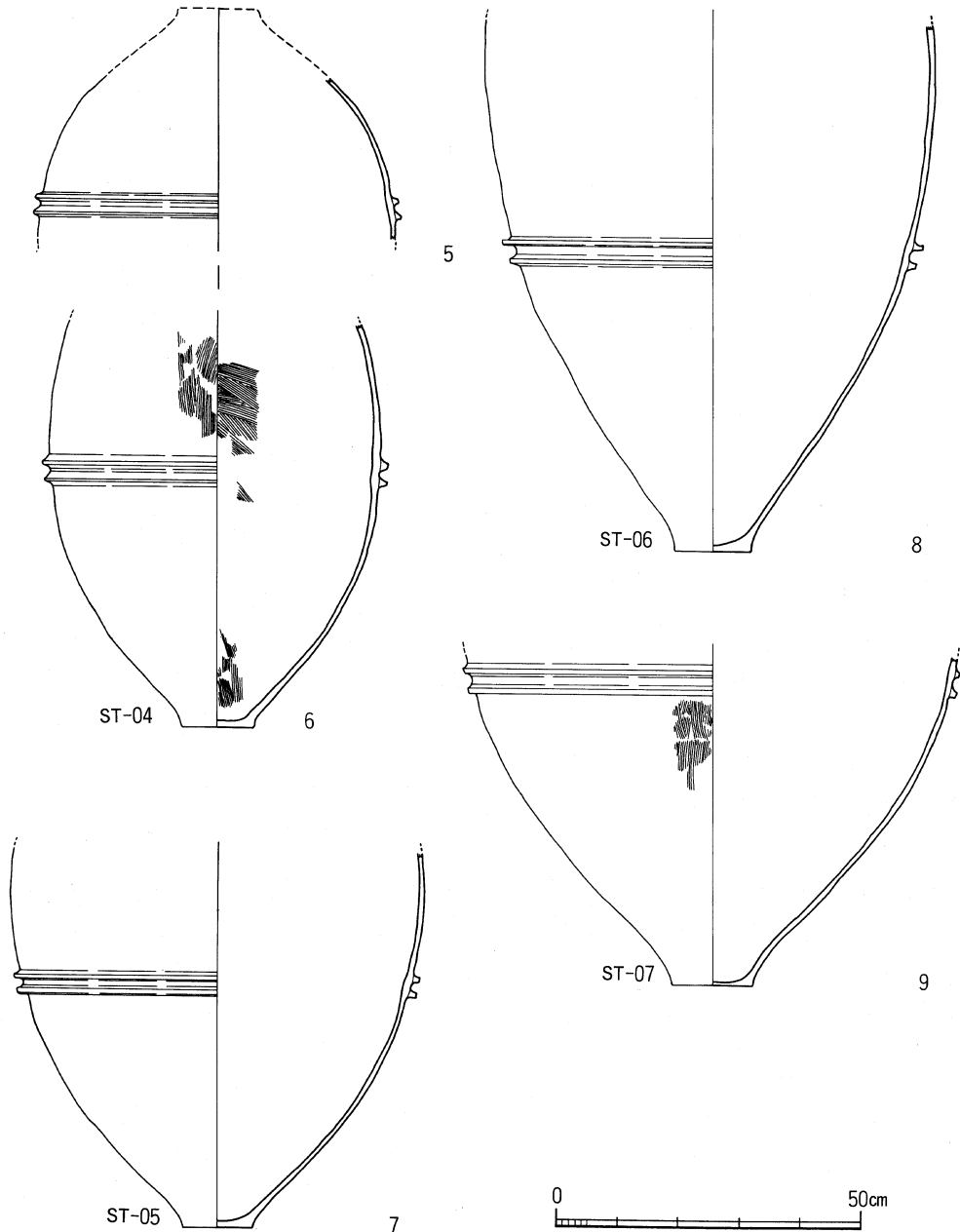


Fig. 9. ST-04~07甕棺実測図 (1/12)

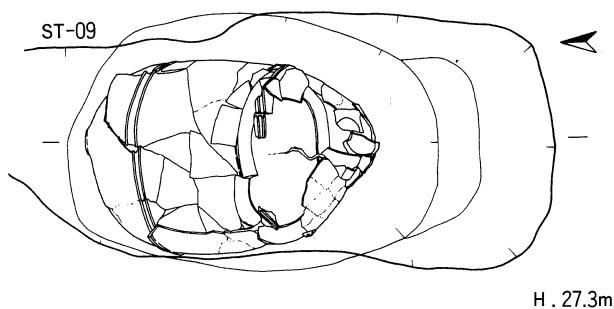
墓壙底の間は隙間が大きいために真砂土を固く敷きつめている。甕棺は43°の傾斜をもって埋置され、主軸方位はN-2.5°-Eを示す。下甕底面には折り曲げた状態の大腿骨が遺存し、下甕に足位を置く仰臥屈葬であろう。被葬者は成人で、性別は女性である。時期は中期後葉であろう。

上甕(11)は、口縁部を打ち欠いた甕形土器で、底径11.8cm、現高56.4cmを測る。胴部はスマートな砲弾形をなし、中位にシャープな「コ」字凸帯が2条巡る。内面には煤様の黒色顔料がみられ、全体に塗布されていたものであろう。調整は凸帯がヨコナデのほかは内外ともナデで仕上げる。胎土は石英砂を多く含み、焼成は良好。色調は外面が明赤橙褐色、内面は淡褐色。

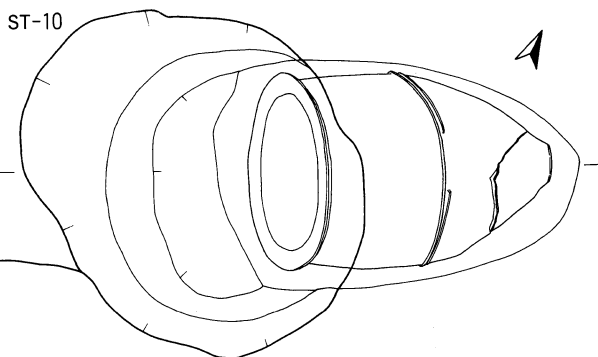
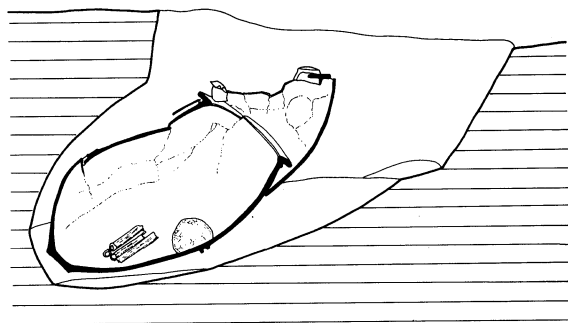
下甕(12)は、口径64.0cm、底径16.0cm、器高105.5cmを測る甕形土器である。口縁部は「T」字状を呈し、直下には「M」字凸帯が1条巡る。胴部は砲弾形を呈し、中位に2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は内外ともナデ。胎土・焼成とも良好で色調は内面が灰白色、外面はにぶい黄橙色。

ST-10 (Fig.10・11. PL.3・6・12)

調査区の西側で検出した単口式成人用甕棺墓で、南側はST-11と重複し、新しい。甕の口縁に沿って小さな段がはしり、木蓋を充てたものと推定される。墓壙は一旦132×218cmの楕円形の縦穴を掘った後、東へ30°傾斜させて横



H. 27.3m



H. 27.5m

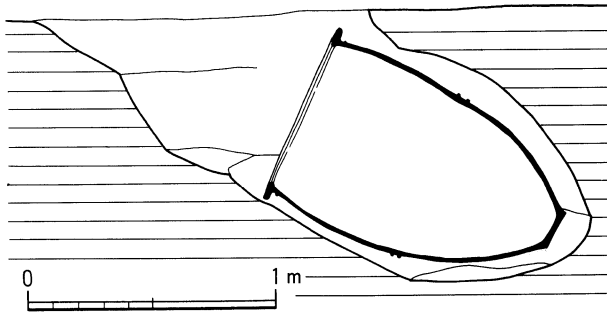


Fig. 10. ST-09・10実測図 (1/30)

穴を穿つ2段掘り構造をなす。甕棺は、この墓壙とほぼ同じの29°の傾斜をもち、主軸方位をN-62°-Eにとって埋置される。時期は中期後葉であろう。

甕 (13) は、口径75.8cmを、底径16cm、器高109.6cmを測る。逆「L」字状の口縁部は外唇が肥厚し、その直下には1条の三角凸帯が巡る。胴部は砲弾型を呈し、中位にはシャープな「コ」字凸帯が2条巡る。底部は上げ底ぎみになる。調整は内外面ともにナデで仕上げているが、外面にはハケ目が残る。内面には煤様の黒色顔料痕がわずかに残り、全体に塗布されていた可能

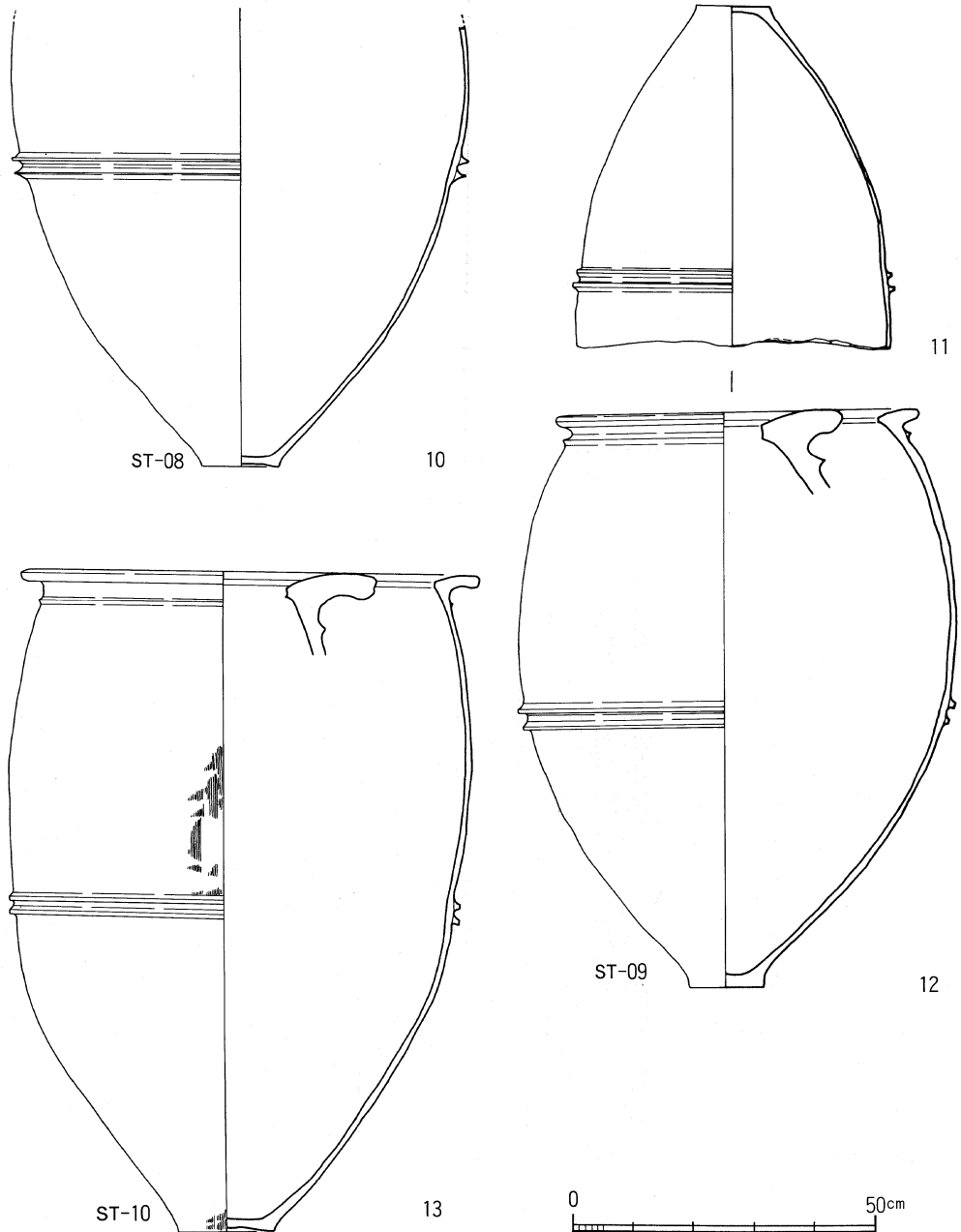


Fig. 11. ST-08~10甕棺実測図 (1/12)

性が強い。胎土は中～粗砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は明橙褐色を呈する。

ST-11 (Fig.12・13. PL.3・11)

調査区の西側で検出した接口式小児用甕棺墓である。SR-01のすぐ東に位置し、北側はST-10に切られる。上・下甕ともに小型の甕形土器を用いている。墓壙は一旦110×180cmの楕円形に掘った後、北隅に沿って55×130cmの楕円形に掘り、さらにその西隅に横穴を穿ち、39°の傾斜をもって甕を埋納している。主軸方位はN-71.5°-Eにとる。時期は中期末であろう。

上甕(14)は、口径40.8cm、底径11.6cm、器高52.2cmを測る甕形土器である。「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、口縁直下に三角凸帯が1条巡る。調整は外面が粗いハケ目、内面はナデ。胎土は精良で、焼成は良好。

下甕(15)は、口径28.6cm、底径8.0cm、器高35.9cmの甕形土器である。「く」字状の口縁部は端部を上方に小さく跳ね上げている。調整は内外ともハケ目後にナデ、胎土は小砂粒を少量含む。

ST-12 (Fig.12・15. PL.4・12)

調査区の西部で検出した単口式成人用甕棺墓で、ST-13のすぐ北東に位置する。墓壙は一旦楕円形の縦穴を掘った後に、西から東へ25°の傾斜をもって斜抗を穿つ2段掘りの構造をもつ。甕棺は、主軸方位をN-34°-Eにとり、37°の傾斜をもって埋置している。甕の口縁部に沿って壙底に小さな段がつき、木蓋を充てたものと考えられる。時期は中期後葉であろう。棺内より頭骨片が出土したが、性別年齢等は不明。

甕(18)は、口径65cm、底径13cm、器高98cmの甕形土器である。逆「L」字状の口縁部はわずかに内傾し、内唇は小さく摘み出すように張り出す。倒卵形の胴部は凸帯から直口して立ち上がったのち、急速に内傾する。口縁部直下には三角凸帯が1条、胴部中位に「コ」字凸帯が2条巡る。調整は口縁部と凸帯がヨコナデのほかは内外ともナデ。口縁部と内面に煤様の黒色顔料が残り、全体に塗布されていたものと思われる。胎土は小砂粒を少量含む。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は明赤褐色。

ST-13 (Fig.12・13. PL.4)

調査区の西部で検出した小児用甕棺墓で、ST-12の南東1mの距離に位置し、SR-03の上面を切って埋置している。甕棺は著しい削平によって胴部上半は消失しているが、墓壙内には別個体の甕片があり、合口式甕棺と推定される。墓壙は75×115cmの楕円形プランを呈するが、南側に浅いフラット面が残り2段掘り構造のものであろう。甕棺は、主軸方位をN-44°-Eにとり、16°の傾斜をもって埋置している。時期は後期初頭であろう。

上甕(16)は、口径45.4cm、現高19.8cmの甕形土器である。「く」字状の口縁部は内弯気味に短く立ち上がり、直下にシャープな三角凸帯が1条巡る。胴部は倒卵形になろう。調整は外面が粗いハケ目、内面はナデ。内面には煤様の黒色顔料が残る。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。色調はくすんだ淡褐色。

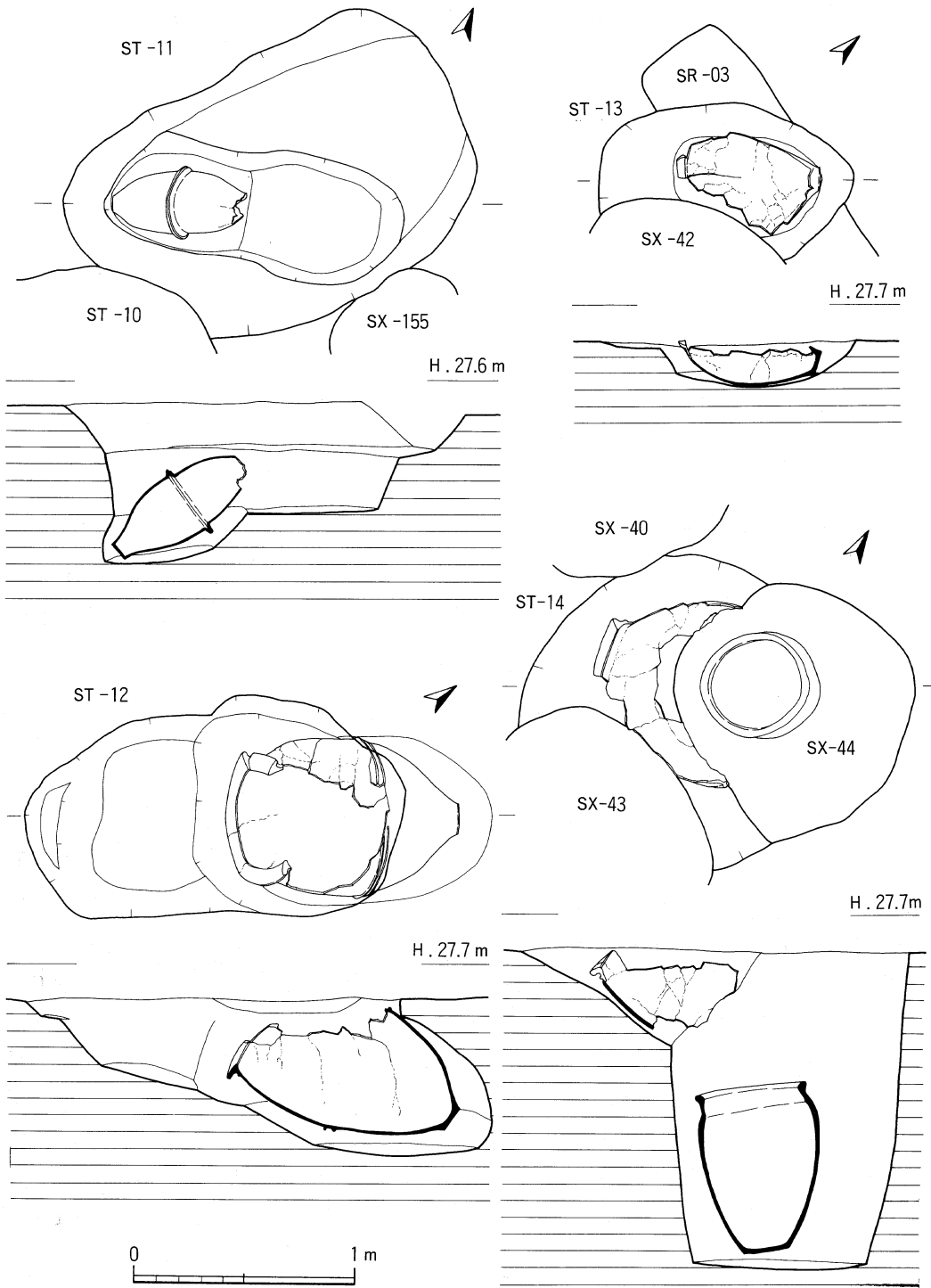


Fig. 12. ST-11~14実測図 (1/30)

下甕 (17) は、口径40cm、底径10.4cm、器高60cmの甕形土器である。「く」字状の口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は小さく直口する。胴部は倒卵形をなし、口縁直下にはシャープな三角凸帯が1条巡る。調整は口縁部がヨコナデのほかは内外面とも粗いハケ目。内外面には煤様の黒色顔料が残り、全体が黒く塗られていたものと思われる。胎土に砂粒と雲母を多く含み焼成は良好。色調は淡明褐色。

ST-14 (Fig.12・15)

調査区の西南部で検出した成人用甕棺墓で、ST-17のすぐ北に位置する。近世墓SX-43・44による削平が著しく、遺存状況は悪い。甕棺は西から東へ約35°傾斜させて掘り込んだ楕円形プランの墓壇内に主軸方位をN-63°-Eにとって埋置されている。時期は中期後葉であろう。

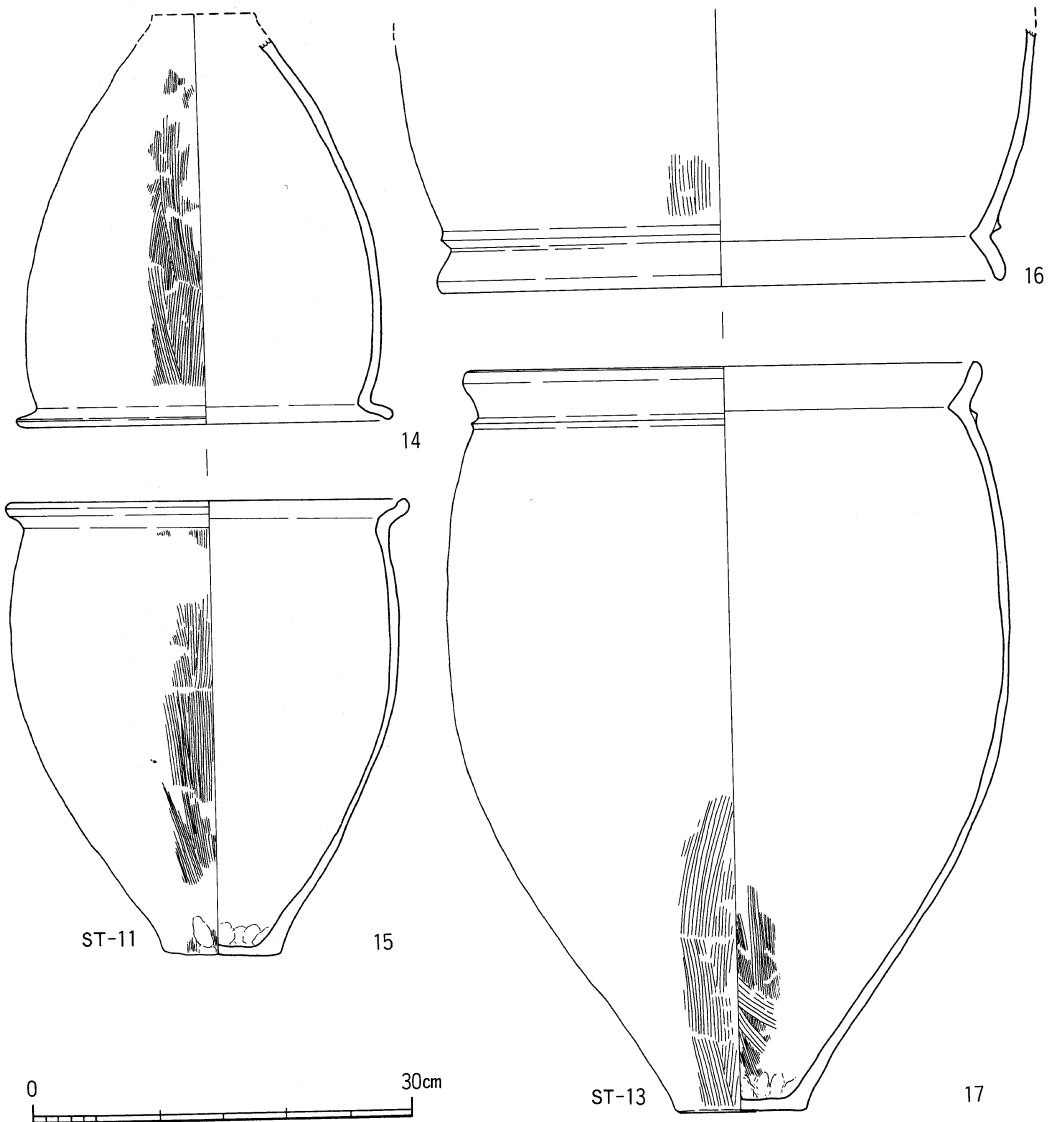


Fig. 13. ST-11・13甕棺実測図 (1/6)

甕 (19) は、口径68cm、底径13cm、復原器高108cmの大型の甕形土器である。逆「L」字状の口縁部は内唇を小さく摘み出す。砲弾形の胴部は上半が小さく内傾し、口縁下に1条、中位に2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は内外面とも押圧ナデ。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は赤褐色。

ST-15 (Fig.14・15. PL.3)

調査区の北西部で検出した甕形土器を用いた成人用甕棺墓で、ST-07のすぐ南に位置する。東側は墓壙の一部を近世墓SX-19によって切られる。墓壙は北側に平坦面をつくった後、約30°傾斜させて掘り込むいわゆる2段掘りの構造をもつ。甕棺は主軸方位をN-19°-Eにとり、43°の傾きをもって埋置している。時期は中期後葉であろう。

甕 (20) は、底径13.2cm、現存高79.4cmの甕形土器である。砲弾形の胴部は上半が内傾ぎみに立ち上がり、2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は凸帯がヨコナデのほかはナデ。胎土は粗砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は明赤褐色。

ST-16 (Fig.14・15. PL.5・12)

調査区の南西端で検出した単口式の成人用甕棺墓で、ST-11の南2mの距離に位置する。近世墓SX-07・08・41と重複し、甕の消失が著しい。墓壙は、縦穴を掘った後に30°の傾斜をもって横穴を穿つ2段掘りのものである。上甕はなく、木蓋を用いたものと考えられる。甕棺の底部近くから折り重なった大腿骨片が検出

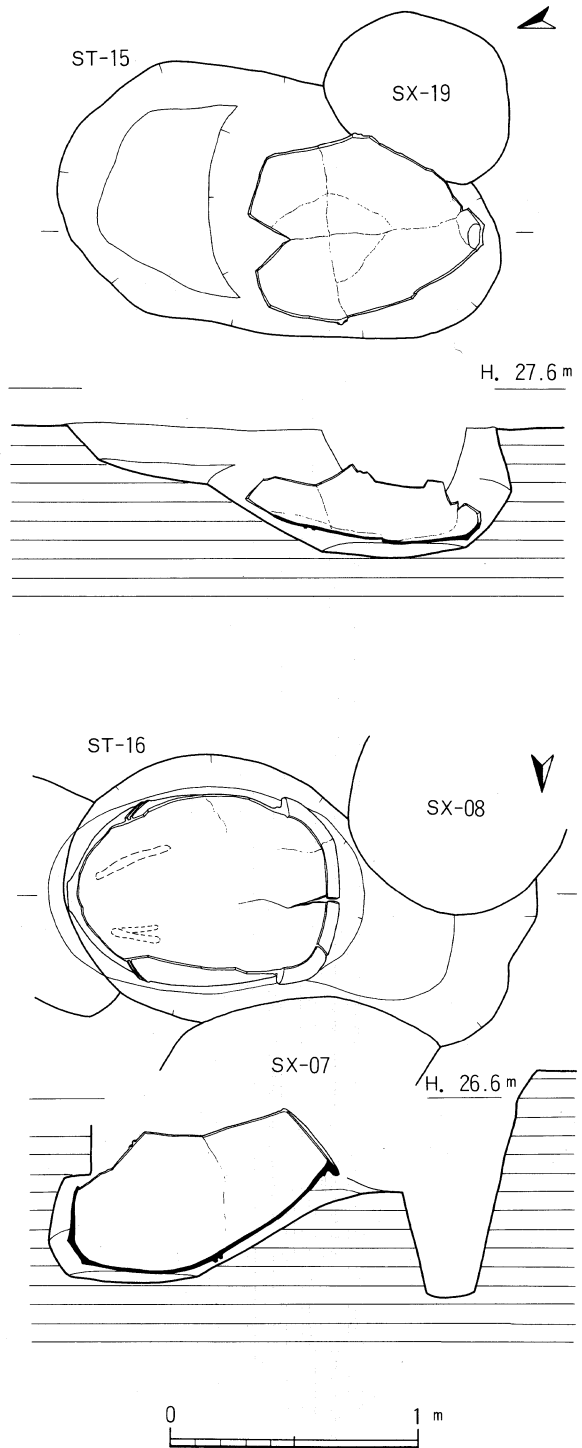


Fig. 14. ST-15・16実測図 (1/30)

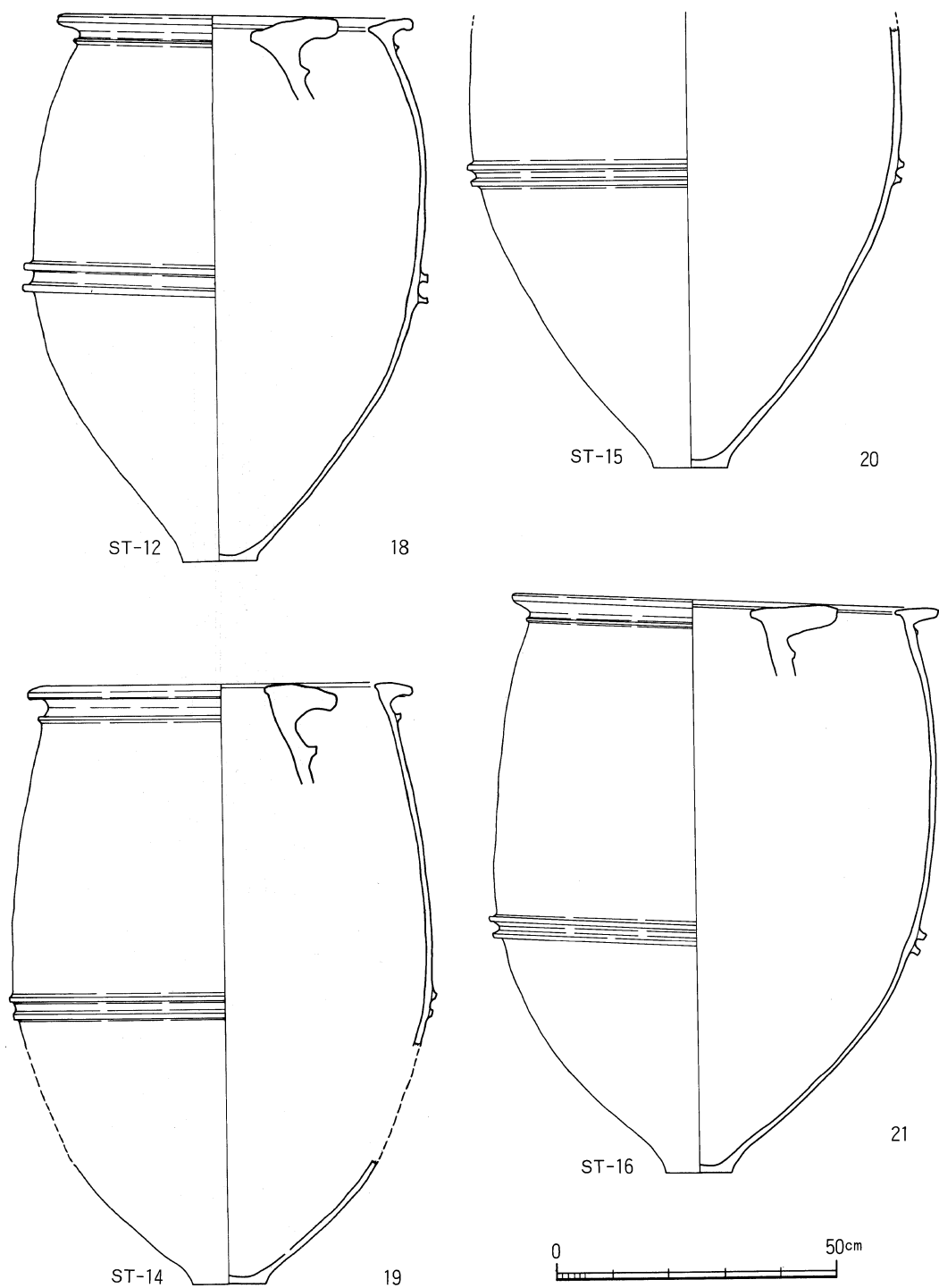


Fig. 15. ST-12・14~16 甕棺実測図 (1/12)

されたが、遺存状況が悪く取り上げられることはできなかった。甕底部を足位とする仰臥屈葬であろう。甕棺は主軸方位をほぼ東西にとり、34°の傾斜をもって埋置されている。時期は中期後葉であろう。

甕(21)は、口径75cm、底径11.6cm、器高103.7cmを測る大型の甕形土器である。肥厚した逆「L」字状の口縁部は内唇が小さく張り出す。胴部は砲弾形をなし、小さめの底部がつく。凸帯は、口縁部下に三角凸帯が1条、胴部中位には2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は口縁部と凸帯部がヨコナデのほかは内外面ともナデで仕上げている。内面には煤様の黒色顔料が塗布されており、内面全体が黒く塗られていたのだろう。胎土には多くの砂粒と雲母を含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

ST-17 (Fig.16・17. PL.11)

調査区の南西部の緩斜面上で検出した覆口式成人用甕棺墓で、甕棺墓域の最南端に位置する。ST-14のすぐ南にあり、墓壙の北側は近世墓SX-43と重複する。上・下甕ともに大型の甕形土器を用いるが、上甕は口縁部から胴部凸帯までを丁寧に打ち欠いている。墓壙は、上面形が125~130cmの円形を呈する縦穴を浅く掘り、その後に南から北へ32°の傾きで横穴を穿つ。甕棺は主軸方位をN-22.5°-Eにとり、墓壙と同じ32°の傾斜をもって埋置されている。時期は中期後葉であろう。

上甕(22)は、口縁部から胴部凸帯を打ち欠いた甕形土器で、底径12.4cm、現高45.0cmを測る。胴部は砲弾形を呈するものであろう。内外面と打ち欠き面には煤様の黒色顔料が明瞭に残る。調整は内外面ともにナデ。胎土は石英砂を多く含み、焼成良好。色調は外面が淡黄褐色、内面は明赤褐色。

下甕(23)は、口径68.2cm、底径12.2cm、器高101.7cmを測る大型の甕形土器で、土圧による歪みが著しい。逆「L」字状の口縁部は小さく外傾し、端部はヨコナデにより浅く凹む。砲弾形の胴部は口縁下が内湾ぎみに立ち上がる。胴部中位には2条の「コ」字凸帯が、口縁部直下には1条の三角凸帯が巡る。口縁部と凸帯がヨコナデのほかは内外面ともにナデ調整。口縁部下と内面には煤様の黒色顔料が付着しており、全体に塗布されていたものであろう。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は橙褐色。

ST-18 (Fig.16・17. PL・11)

調査区の西側の東斜面で検出した単口式成人用甕棺墓である。ST-19の東約1mの距離にあり、甕棺墓域の最東端に位置する。墓壙は西より東へ浅く1段目を掘り込んだ後に小さなフラット面をつくり、さらに2段目の横穴を掘り込む2段掘りの構造をなす。甕棺は口縁部を2段目の横穴の肩部に置き、平坦面上に上甕片が1点もないことから木蓋を用いた可能性が考えられる。甕棺は主軸方位をN-85°-Eにとり、27.5°の傾斜をもって埋置されている。時期は中期後葉であろう。

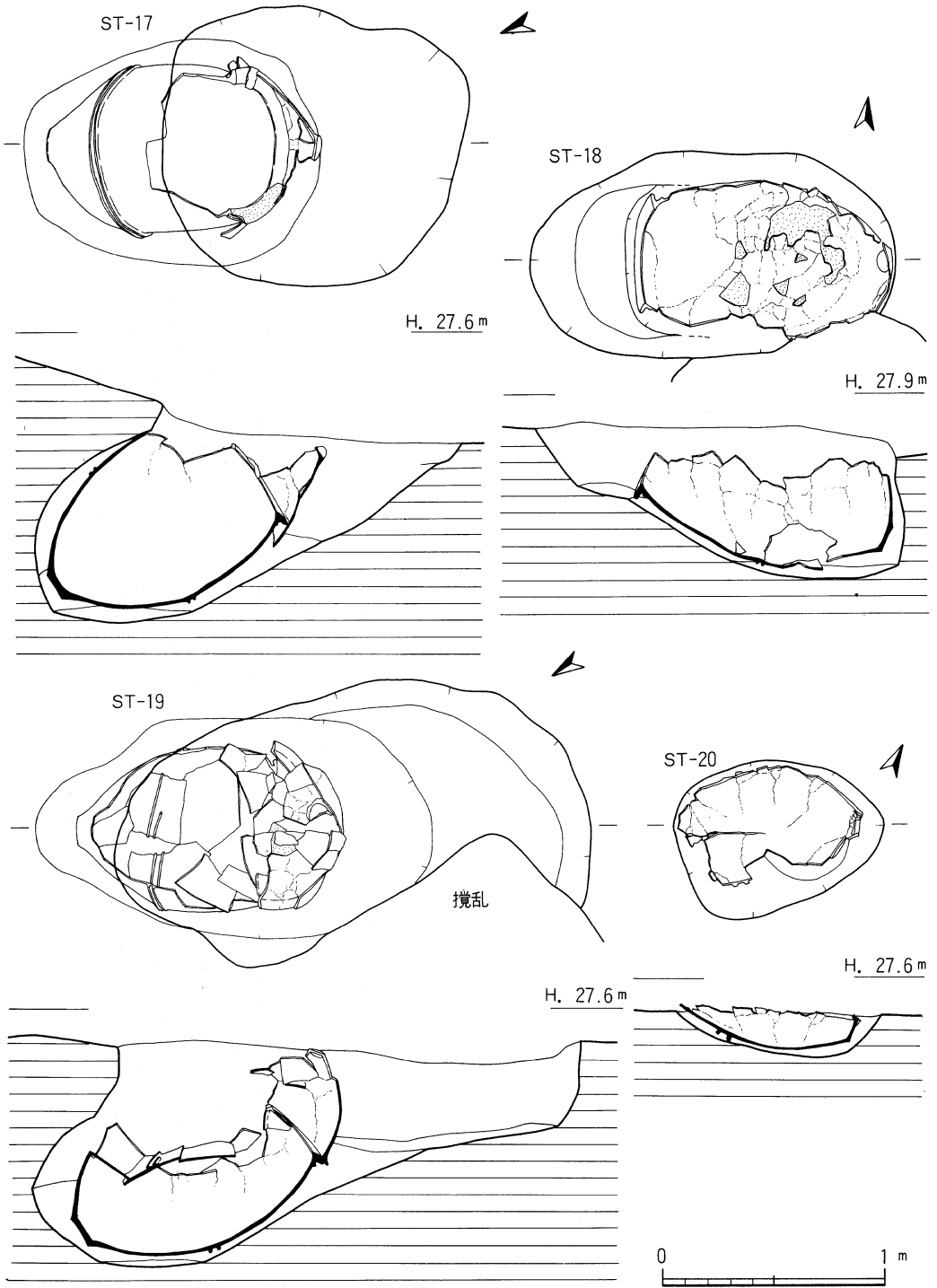


Fig. 16. ST-17~20実測図 (1/30)

甕(24)は、口径66.0cm、底径11.6cm、器高105.0cmを測る甕形土器である。肥厚した逆「L」字状の口縁部は端部が小さく外傾する。砲弾形の胴部はやや長く、上半は口縁部にむかって内湾ぎみに窄まる。凸帯は口縁部下に1条、胴部下半に2条の「コ」字凸帯が巡る。内面全体と口縁部や凸帯には煤様の黒色顔料が残り、内外面全体に黒く塗られていたものであろう。調整は口縁部と凸帯がヨコナデのほかは内外面ともに丁寧なナデ。胎土は石英砂を多く含み、焼成は良好。色調は明赤橙褐色。

ST-19 (Fig.16・18. PL.5・6・11)

調査区の西部で検出した接口式成人用甕棺墓で、ST-18より西へ1mの距離に位置する。甕棺は上甕に鉢形土器、下甕には甕形土器を用いている。墓壙は一旦楕円形プランの縦穴を掘り、その東隅に27°の傾きで斜抗を穿つ2段掘り構造をなす。棺内には口縁部下から頭蓋骨が、底部から折り曲げた膝を外方に開く大腿骨が検出された。下甕底部を足位とする成人男性の仰臥屈葬である。甕棺は主軸方位をN-69°-Eにとり、31°の傾斜をもって埋置されている。時期は中

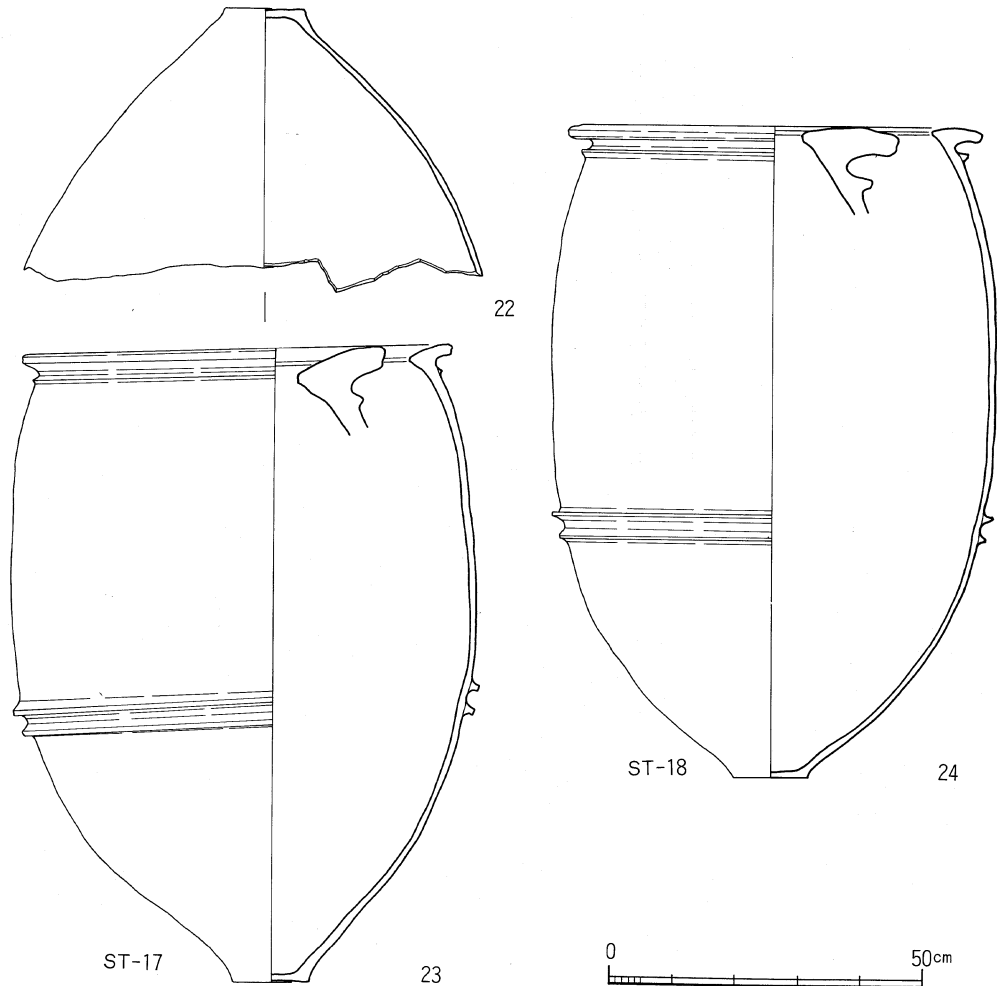


Fig. 17. ST-17・18甕棺実測図 (1/12)

期後葉である。

上甕 (25) は、口径74.4cm、底径12.8cm、器高35.6cmの大型の鉢形土器である。逆「L」字状の口縁部は短くストレートにひらく。扁平な玉葱状の胴部に平底の底部がつく。調整は口縁部がヨコナデ、外面は粗いハケ目、内面はナデ。口縁部と内面には煤様の黑色顔料が残り、全体の塗布されていたものであろう。胎土は石英砂を多く含み、焼成は良好。色調は明赤橙褐色。

下甕 (26) は、口径77cm、底径13.6cm、器高105.8cmの大型の甕形土器である。肥厚した逆「L」字状の口縁部は端部が強いヨコナデにより浅く凹み、倒卵形の胴部は口縁下が小さく内傾する。凸帯は口縁下に1条、中位に2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は内外面ともナデで仕上げる。煤様の黑色顔料が内外面にみられ、全体に塗布されていたものと思われる。胎土には砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は明橙褐色。

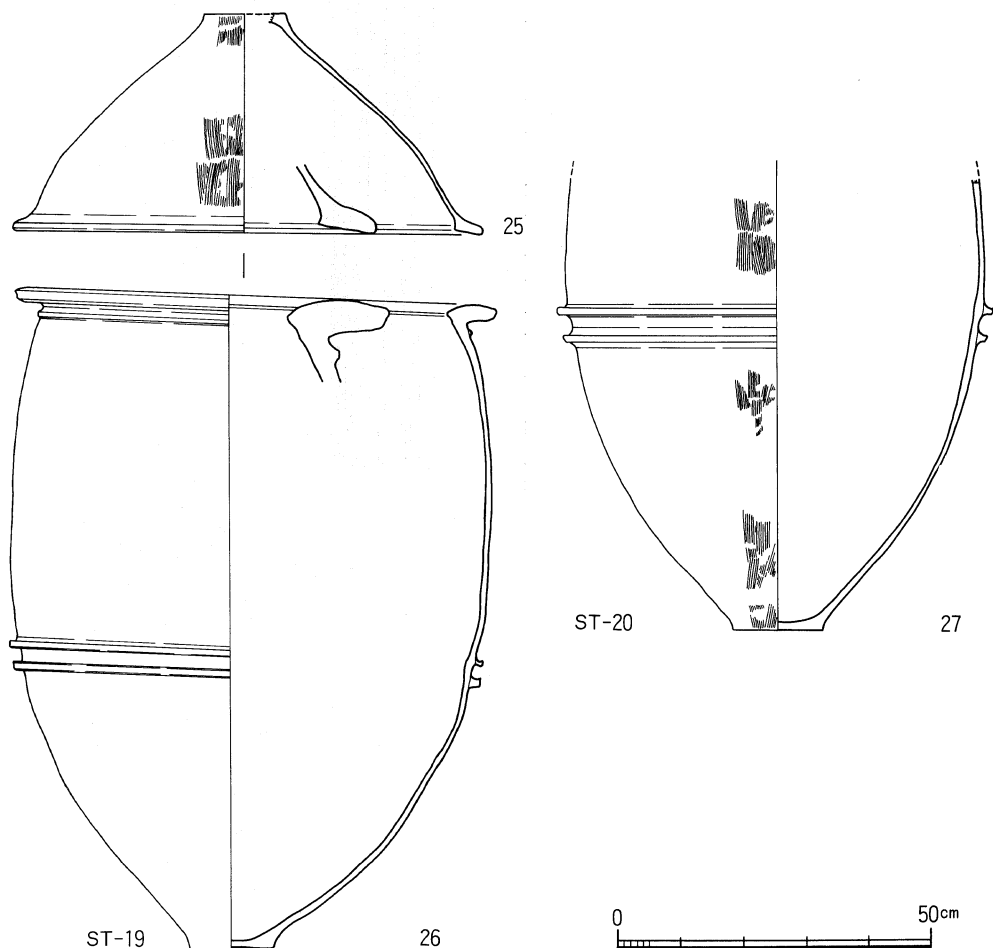


Fig. 18. ST-19・20甕棺実測図 (1/12)

ST-20 (Fig.16・18, PL.5)

調査区の中央部の西寄りで検出した成人用甕棺墓である。甕棺墓域の西端に位置し、ST-19より北へ4mの距離にある。甕棺は削平が著しく、わずかに棺底面を残すのみである。墓壇は緩い斜抗を掘り、22.5°の傾斜をもって甕を埋置している。主軸方位はN-62°-Eにとる。時期は中期後葉であろう。

甕(27)は、底径13cm、現高72.2cmの甕形土器で、口縁部を欠く。砲弾形の胸部中位にはシャープな「コ」字凸帯が2条巡る。調整は凸帯部がヨコナデ、外面は粗いハケ目、内面はナデで仕上げる。胎土は石英砂を多く含み、焼成は良好。色調は淡褐色。

2). 土壌墓 (SR)

土壌墓は、調査区の西隅に甕棺墓群と重複して分布し、総てで6基検出した。このうち、2基は木棺埋設の痕跡を確認した木棺墓である。分布的には調査区西隅にまとまり甕棺墓ほどの拡がりは見せず、2基ごとに小さくまとまるが、それが時期的な差異によるものかは明確でない。土壌墓の時期は、副葬遺物が皆無なため明確でないが、甕棺墓との重複関係でSR-03が後期初頭のST-13よりも古く、中期末はくだらないとはいえる。しかし、それ以前については即断できないが、同じ月隈丘陵に立地する天神森遺跡や宮ノ森遺跡等のあり方を勘考すると甕棺墓群にやや先行するものと推定できよう。

また、木棺の組合せ方は、小口板を両側板で挟み、側板が小口板より長くはみ出るタイプと、小口板が側板の同じ幅になるタイプがあるが、この両者が時期的、あるいは分布的差異を示すものかは少例のため定かにしがたい。

SR-01 (Fig.19, PL.3・7)

調査区西端の崖ぎわで検出した組合式の木棺墓で、ST-9とST-10の間に位置する。西側壁の上面はSX-10に切られる。墓壇は長軸188cm、短軸115cm、深さ55cmの隅丸長方形プランを呈するが、東側に幅30cm、深さ15cmのテラス面がつき、棺本体の墓壇は短軸が80cmになる。墓壇底には小口に沿って長さ50cm、幅20cm、深さ10~20cmの小口板を立てるための掘り込みがあり、外側は真砂土が固く詰められていた。内側に密着して小口板を立てたのであろう。また、南側小口溝の外側には5cm程の隙間があることから、側板で小口板を挟み込むタイプであろう。これからすると棺の内法は長軸120cm、短軸45cmに復原できる。木棺墓は主軸方位をN-4°-Eに

	主軸方位	墓壇規模 (長軸×短軸×深さ)	棺規模 (長軸×短軸×深さ)	形 状	時 期	備 考
SR-01	N-4°-E	188×115×55	140×50×40	二段掘り・木棺	中期後半	SR-01→SX-10
SR-02	N-68.5°-W	197×127×84	160×80×61	木棺		SR-02→SX-30・40
SR-03	N-75°-W	139×55×53				SR-03→ST-13→SX-42
SR-04	N-75°-W	136×89×57				
SR-05	N-21°-E	182×67×74	110×67×50	二段掘り・標石		
SR-06	N-15°-E	172×77×72				

Tab. 2. 土壌墓 (SR) 一覧表

とり、丘陵尾根に対し直交する位置になる。遺物は出土しなかった。

SR-02 (Fig.19, PL. 4・7・8)

調査区の南西部で検出した木棺墓で、ST-17のすぐ西に位置し、北2mにはSR-03が並置する。両側壁はSX-30・40によって切られる。墓壙は長軸197cm、短軸127cmの長方形プランを呈し、約10cm掘り下げたところで木棺を検出した。棺の組み合わせ方は小口板と側板が接するもので、その外側は真砂土が固く詰められていた。内法は長軸160cm、短軸80cm、深さ61cmを測る。棺底には小口坂や側板を立てる掘り込みはなく、明褐色粘土が薄く敷き詰められていたが、床板の存在は不明である。木棺墓は主軸方位をN-68.5°-Wにとる。遺物は出土しなかった。

SR-03 (Fig.19, PL. 4・7・8)

調査区の南西部で検出した素掘りの土壙墓である。ST-12のすぐ東に位置し、上面はST-13に切られている。墓壙は、長軸139cm、短軸55cm、深さ53cmの長方形プランをなし、主軸方位をN-75°-Wにとる。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、西側小口は小さく抉れ込む。床面は平坦であるが、東から西へ緩く傾斜する。

SR-04 (Fig.20)

調査区南西部の斜面上で検出した土壙墓で、SR-05の西2mに主軸を直交して位置する。墓壙は、主軸方位をN-75°-Wにとり、長軸136cm、短軸89cm、

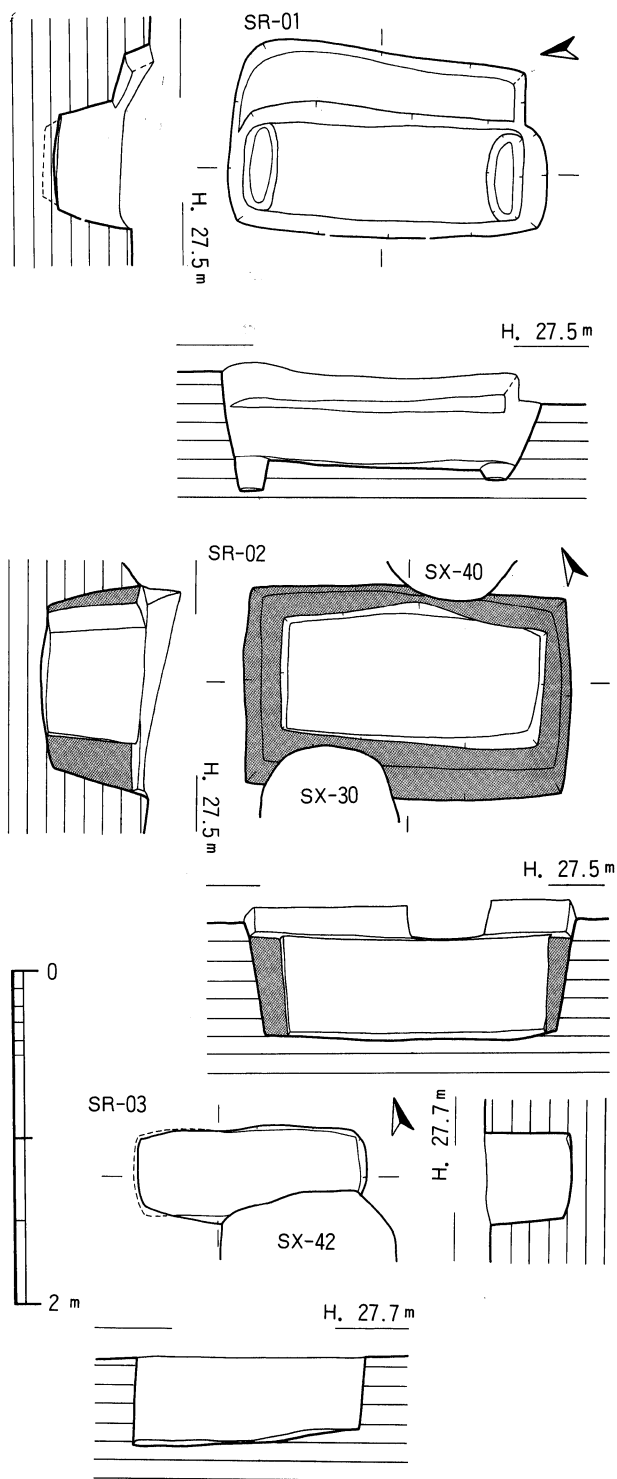


Fig. 19. SR-01~03実測図 (1/45)

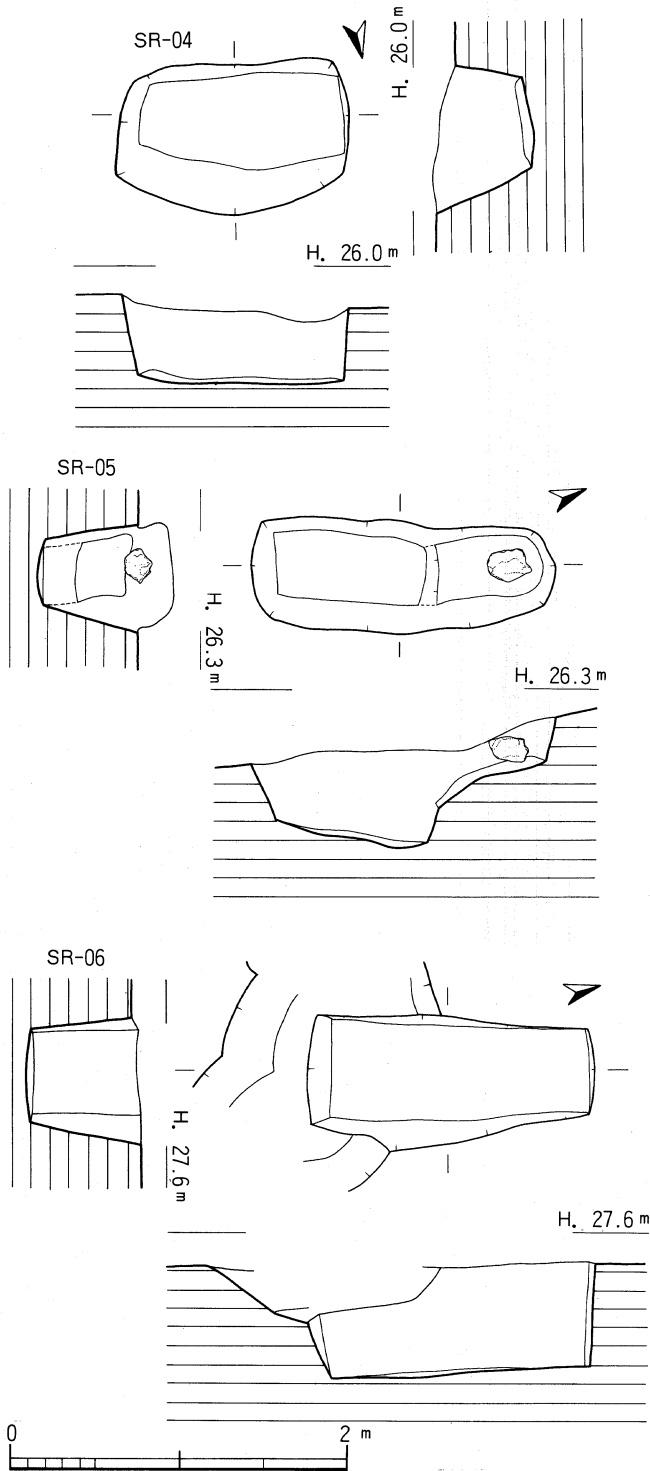


Fig. 20. SR-04~06実測図 (1/45)

深さ57cmの隅丸長方形をなす。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、斜面に並行な側壁は緩傾斜する。床面は平坦で、壁際がやや高くなる。

SR-05 (Fig.20. PL. 8)

調査区南西部の斜面上に位置する土壙墓で、SR-04の東2mにある。平面形は、長軸182cm、短軸67cm、深さ74cmの隅丸長方形をなし、主軸方位はN-21°-E。北側小口は、一旦テラス面を作り緩傾斜して壙底に至る。このテラス面中央には人頭大の花崗岩が標石状に置かれている。底面は北にむかって傾斜し、小口際は中央に比べて5~8cm凹むが、明褐色粘土を詰めて平らに保っている。

SR-06 (Fig.20. PL. 7)

調査区の北西隅で検出した土壙墓で、SR-01の北に主軸方位を同じくして位置する。墓壙は、長軸172cm、短軸77cm、深さ72cmの長方形をなし、主軸方位をN-15°-Eにとる。床面は平坦で、壁面は垂直に立ち上がるが、南側小口部は緩く傾斜する。小口と側壁の境には明瞭な稜がつく。

3). 土 壙 (SK)

土壙は、すべてで3基を検出した。調査区西隅に甕棺墓群に混じって分布し、これを越えては拡がらない。平面形は円形と隅丸方形、長方形のものがある。このうち、SK-02からは甕棺墓の上甕と思われる胴部上半を打ち欠いた大型の甕が出土している。これからすると破壊された甕棺墓の抜き跡と推定される。そのほかは性格等を推定しえない。時期的には、いずれも覆土中から甕棺片が出土しており、甕棺墓造営の範囲内におさまるものであろう。いずれにしても、その数が少ないうえに遺跡の消失が大きいことから性格等をいちづけることは難しい。

SK-01 (Fig.21. PL.5)

調査区南西隅の斜面上に立地し、ST-16のすぐ南に位置する。北側はSX-08に切られる。平面形は275×240cmの楕円形を呈し、断面形は深さ70cmの凹レンズ状になる。土壙内には底面より30~40cmの位置から甕棺用の大型甕数個体が検出された。覆土は黒色土で、他の弥生時代の遺構が真砂土+褐色土なのに比べて差異があり、何等かの事由により後世にまとめて投棄されたものと考えられる。

出土遺物(Fig.23. PL.11)

甕形土器 (28) 口径70cm、現高59.2cmを測る大型の甕形土器で、胴部下半を欠く。逆「L」字状の口縁部はわずかに内傾する。砲弾形の胴部は凸帯からストレートに立ち上がったのち、口縁下で小さく内弯する。口縁部下に1条、胴部中位に2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は口縁部と凸帯がヨコナデのほかはナデ。胎土は砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は明赤

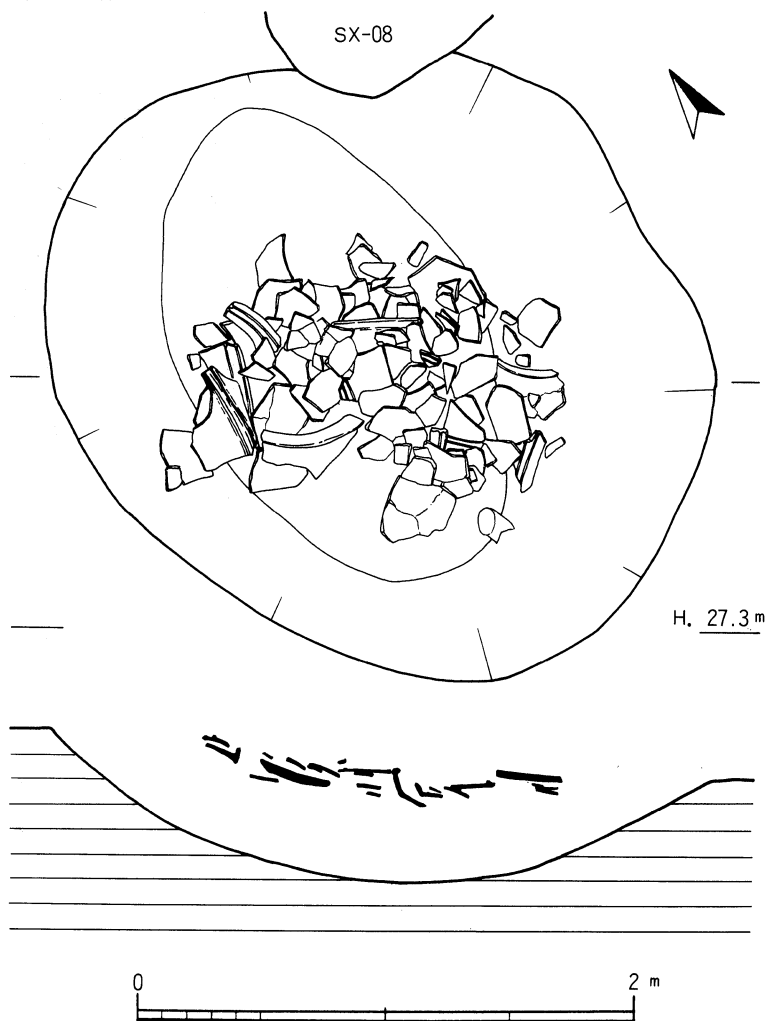


Fig. 21. SK-01実測図 (1/30)

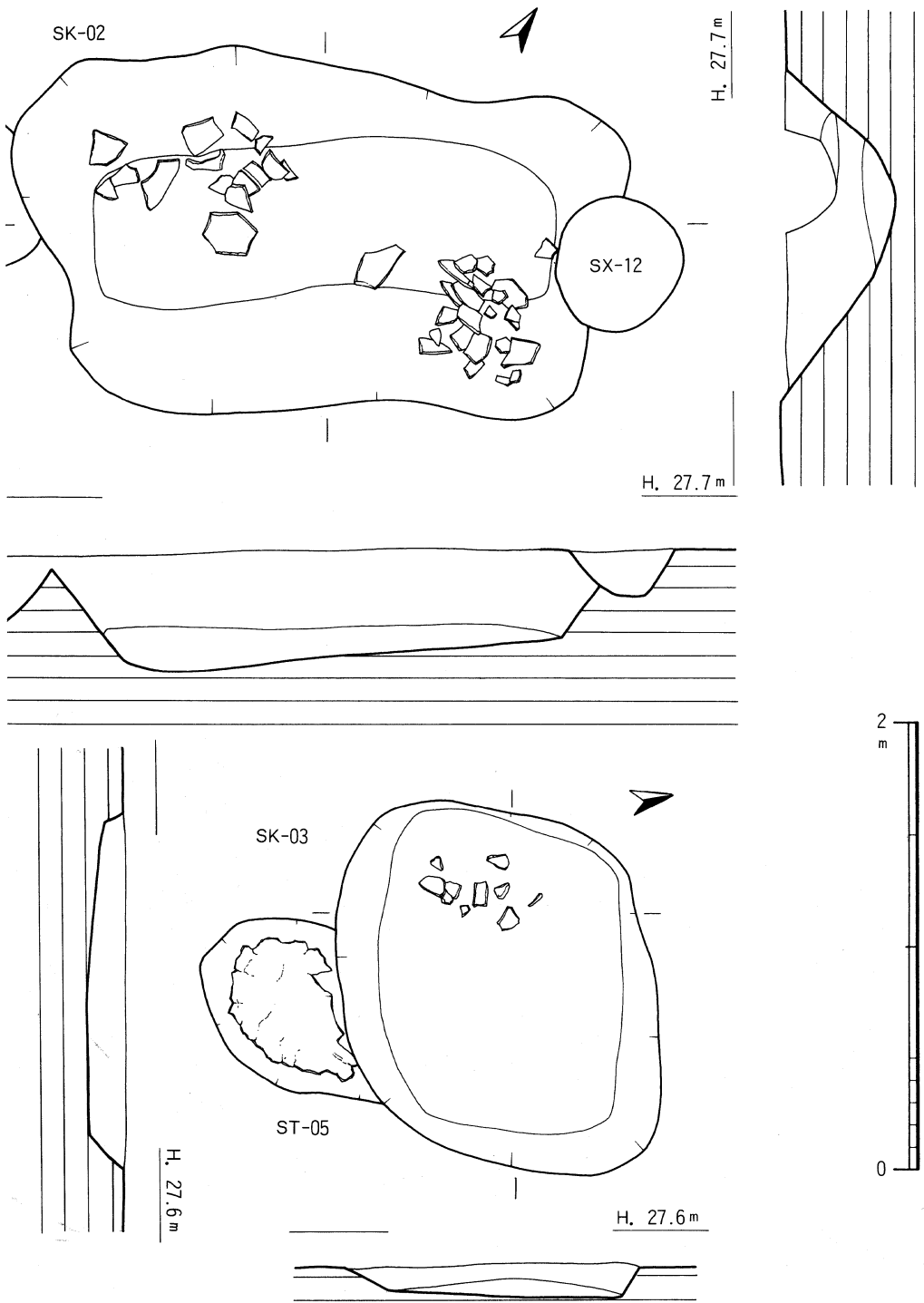


Fig. 22. SK-02・03実測図 (1/30)

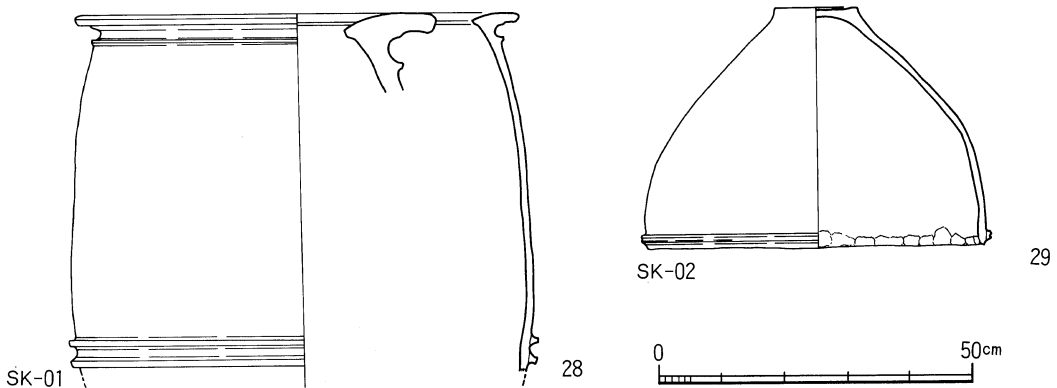


Fig. 23. SK-01・02出土甕棺実測図 (1/12)

褐色を呈する。

SK-02 (Fig.22)

調査区の北西部にあり、SR-06の東2mの距離に位置する。北東側はSX-12に切られている。平面形は長軸245cm、短軸145cmの隅丸長方形で、主軸方位をN-58°-Eにとる。深さは53cmで断面形は逆台形状を呈し、底面は凹レンズ状をなす。土壌内は攪乱を受け、甕棺片と近世甕片が混在していた。甕棺(29)は胴部上半を打ち欠いた大型甕で、合口甕棺の上甕として用いられたもので、本来は甕棺墓であったろうと考えられる。

出土遺物 (Fig.23, PL.12)

甕形土器(29)は、胴部上半を打ち欠いた甕形土器で、底径13cm、現高38.2cm、打ち欠き部径53.2cmを測る。胴部は玉葱状を呈するが、本来は砲弾形をなすものであろう。打ち欠き部には「M」字凸帯が1条巡る。調整は凸帯がヨコナデのほかはナデ。内外面に煤様の黒色顔料が付着しており、全体に塗布されていたものであろう。胎土は砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は明赤橙褐色。

SK-03 (Fig.22)

調査区の北西部で検出した土壌で、ST-06のすぐ東に位置し、南側はST-05を切っている。平面形は長軸160cm、短軸143cmの隅丸方形を呈し、深さは15cm。壁面は緩やかに傾斜し、底面は平坦である。主軸方位はN-11°-Eにとる。

4). 近世墓 (SX)

近世墓は、調査区全域にわたって広く分布し、182基を検出した。旧状は中央部北側に1段高い墓所があったが、改葬時に削平されて墓壇の空白域をなし、この空間を弧状に囲むように南側に密に分布する。丘陵は南側斜面を残して三方が削平され切り立った崖になっているが、近世墓は近年まで墓碑があったため墓域は概ね原状を留めているものと思われる。

近世墓の棺材としては、(1). 甕棺66基、(2). 桶棺27基、(3). 土壙53基と(4). 火葬墓2基の4種があるが、土壙からは留め金具のついた板材片が出土し、人骨が臥位状態で検出されていることから寝棺と推定される。棺材の不明なものは墓壇の形状から(1)か(2)に含まれよう。このうち98基からは人骨が出土した。また、65基には「六道銭」とよばれる銭貨をはじめ数珠、煙管、毛抜き、紅皿、陶器、土師皿等が副葬されていた。六道銭を副葬するものは38例あり、『乾元重寶』、『元祐通寶』の渡来銭2例を除いてはいずれも『寛永通寶』である。

出土遺物 (Fig.24・25・26, PL.12)

近世甕 (30~33) 30はSX-02、31はSX-31、32はSX-44、33はSX-147の棺として用いられたものである。30は、素焼きで口径37.4cm、器高39.6cm。頸部は短く直口し、水平に外反した口縁部は上面に粘土紐を貼りつけて分厚くする。肩部に一對の貼り付け花文を配している。胎土は小砂粒を密に含み、焼成は良好。明赤褐色。31は、口径29.7~36.8cm、器高38.9cm。頸部にわずかに外反し、小さな口縁部は分厚く、内唇が強く張り出す。やや肩の張る胴部に大きな平底の底部がつく。肩部には3条の凹線が2段あり、その間に波状文を配する。胎土は緻密で、焼成は堅緻。淡黄茶色。32は、口径51cm、器高72.5cm。頸部はわずかに外反し、口縁部は内唇が分厚く張り出す。胴部は長胴でやや肩が張り、肩部に2条、下半に3条の凹線が巡る。胎土は緻密で、焼成は堅緻。外面は暗黄褐色、内面は暗褐色を呈するが、口縁部と肩部は釉薬を掻き取り赤褐色になる。33は、口径43.2cm、器高63.2cm。頸部は短く直口し、分厚い口縁部は小さく外反する。胴部長胴で、肩部には山形の波状文があり、その下には5条凹線が巡る。胎土は白色粒を含み、焼成は堅緻。外面は黄茶褐色、内面は茶褐色を呈し、釉薬の流しがけによる釉だれが目立つ。31~33の調整は叩き後にナデて叩き目を掻き消す。

土師器 (34~38) 口径8.9~9.5cm、底径6.3~6.9cm、器高1.4~1.7cmを測る。外底を除きすべてヨコナデ調整する。いずれも底部は糸切り底である。39~51・55~57は磁器である。

紅皿 (39~45) 39~44は口径4.3~4.6cm、器高1.1~1.5cm。外体部に型造りで菊弁を施す。45は口径6.4cm、器高1.3cmと比較的大型で、菊弁を部分的にナデ消して、線描きの花卉を描く。いずれも白色の緻密な胎土に、青味を帯びた白~灰白色不透明釉がかかる。

坏 (46・47) 染付の小坏である。46は全釉であるが、47は畳付の釉を削り取る。47の外底中央部には銘がみられる。

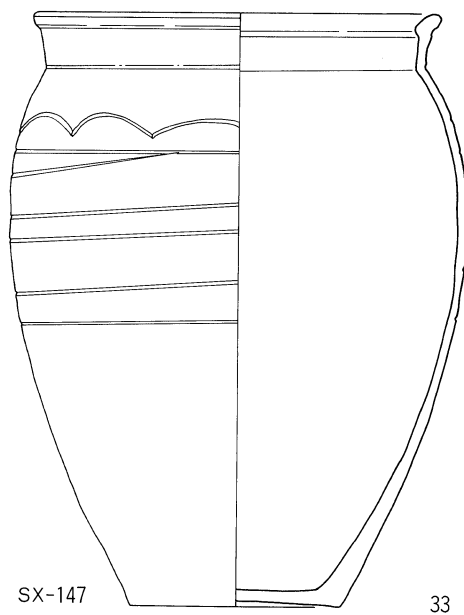
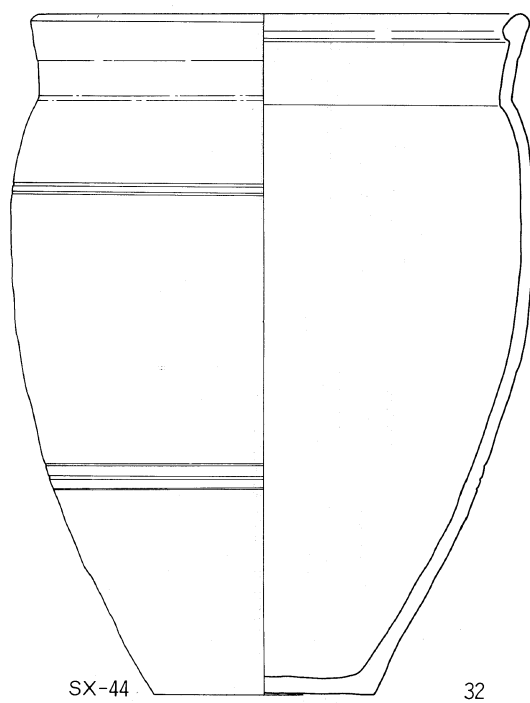
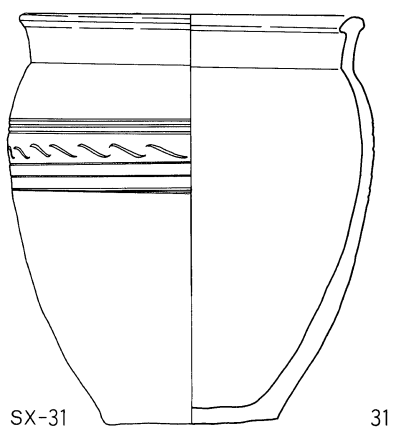
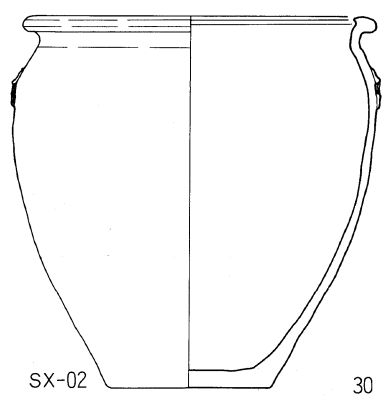


Fig. 24. 近世甕棺実測図 (1/8)

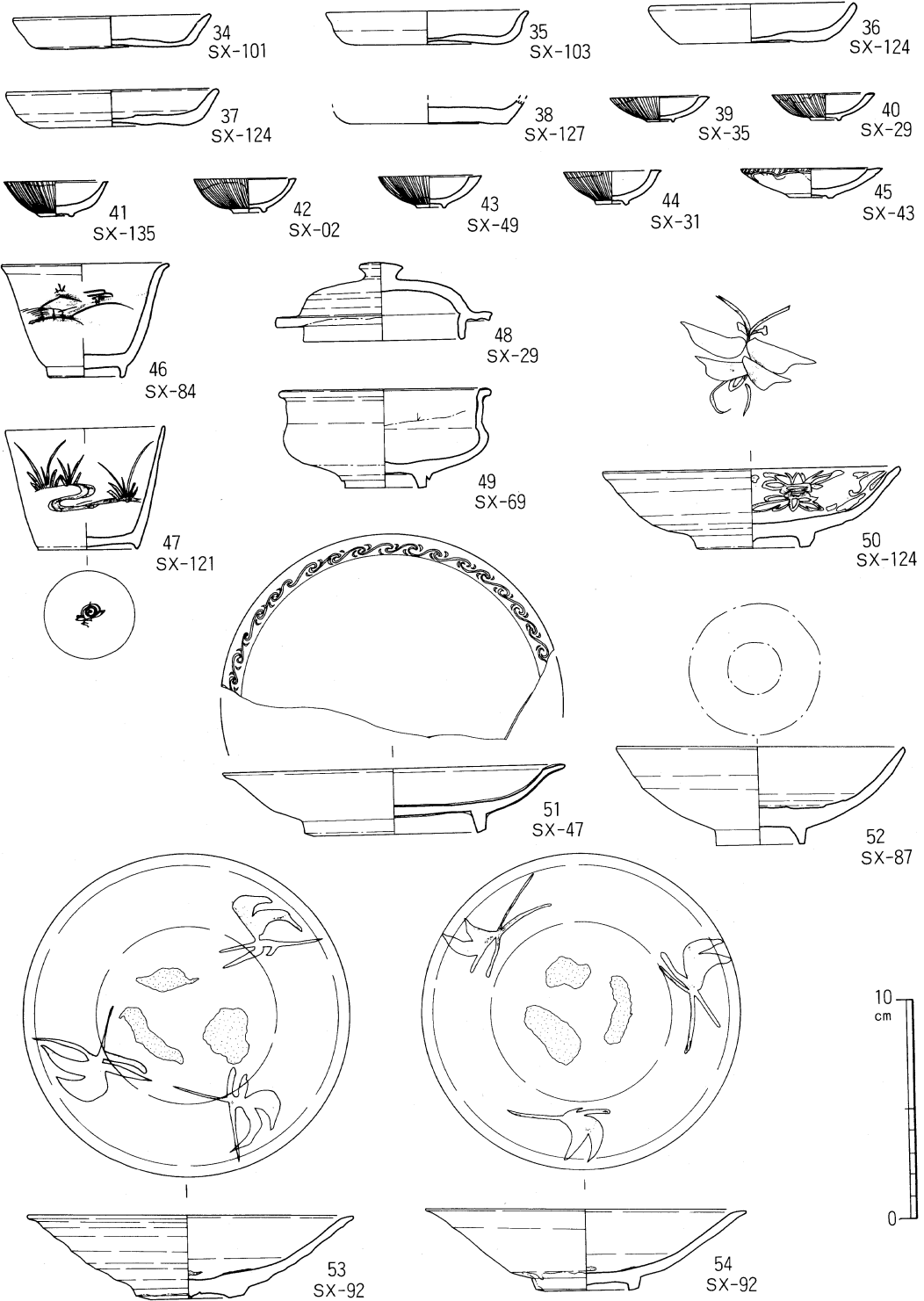


Fig. 25. 近世墓供献土器実測図(1) (1/3)

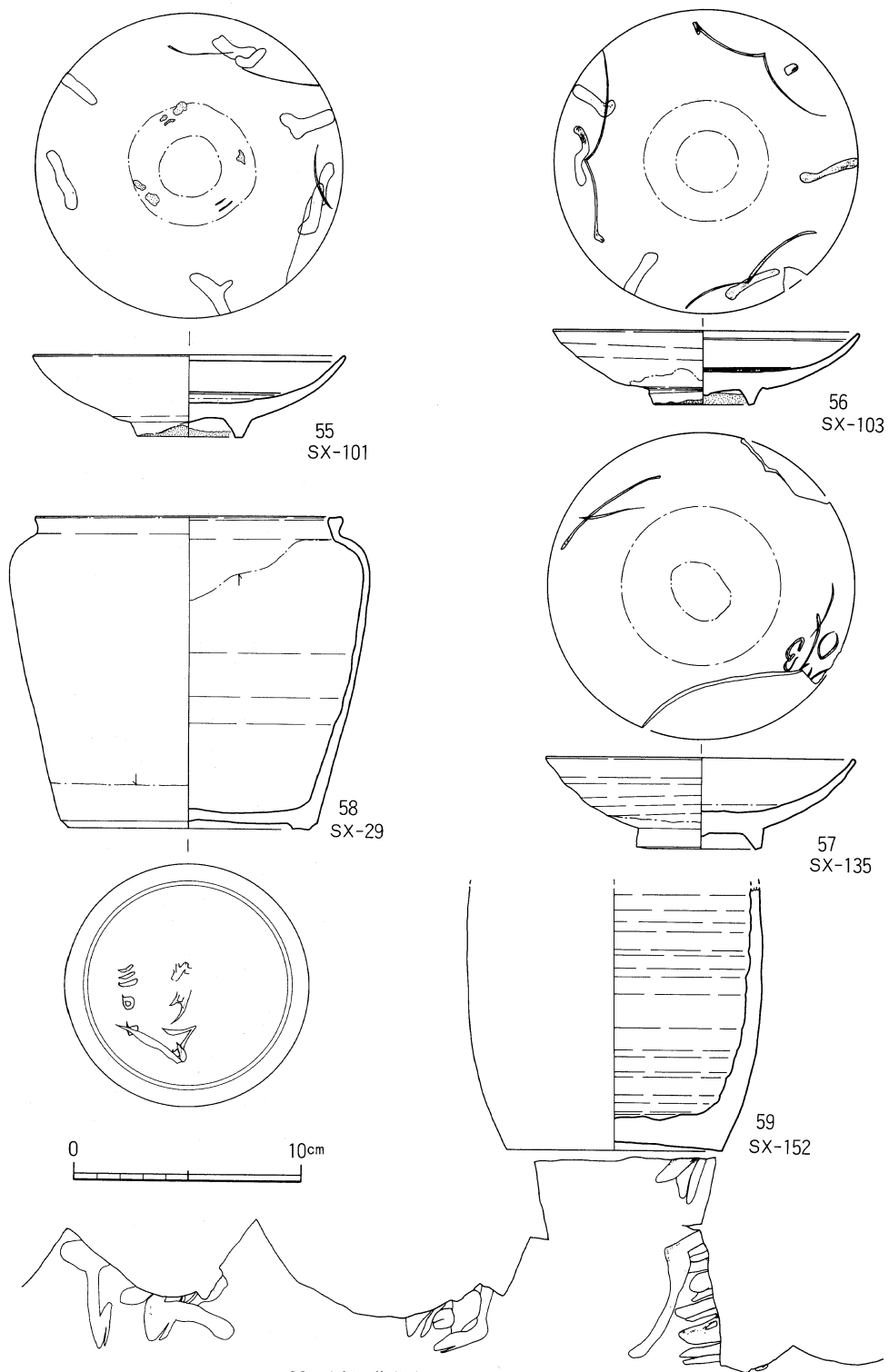


Fig. 26. 近世墓供献土器実測図(2) (1/3)

壺蓋 (48) 灰白色の緻密な胎土に灰オリーブ色の半透明釉がかかる。

香炉 (49) ベージュ色の胎土に灰緑色の不透明釉が厚めに施される。

皿 (50~57) 50・55~57は染付の高台付皿。50は内体部に花文を、見込みには蝶を描き、青みのある半透明釉がかかる。畳付の釉は削り取る。55~57の見込みは輪状に釉を削り取る。55・56の高台には目砂が付着する。51は口唇部に型造りの陽文を施す高台付皿で、灰白色の胎土に青みを帯びた灰白色の半透明釉が厚くかかる。畳付の釉は削り取る。52~54は陶器の高台皿で、52はうす茶色の緻密な胎土に黄灰色の不透明釉がかかり、畳付と見込みは釉を削り取る。53・54は唐津焼であろう。黒色の文様を3ヶ所に配し、見込みに3つの目跡が残る。

壺 (58・59) 58は灰ベージュ色の緻密な胎土で、灰白色の不透明釉がかかる。口唇部の釉は削り取る。口唇部内側から釉尻付近まで釉下に化粧土が認められ、外底には墨書がのこる。59は灰白色の不透明釉がかかる。外底は糸切りで、釉をふき取る。胴部に褐色の釉で文字を描く。

銅銭 (1~23) 銅銭は全部で200枚近く出土した。ほとんどが『寛永通寶』であったが、その中に、『乾元重寶』と『元祐通寶』の2枚の渡来銭が混じっていた。

以上の外に、色染付の皿、袍衣入れの金属性薬罐、数珠玉、煙管、毛抜き等が副葬されていた。数珠玉は、径6~7mmのガラス製で、コバルトブルーを呈し、1個は透明なガラスである。

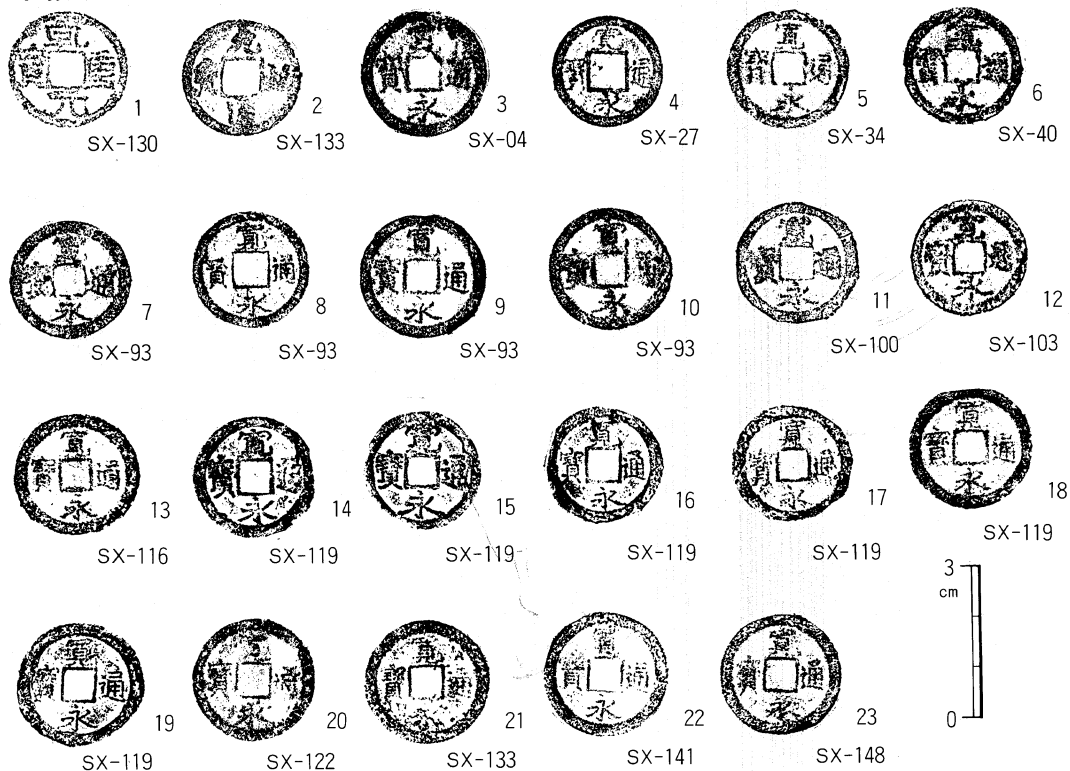


Fig. 27. 近世墓供献銅銭拓影 (2/3)

No.	平面形	法量 (m)	方位	主体部	人骨	副葬品
01	円形	0.95×0.9×0.71	N-27°-E	木桶	○	
02	円形	1.04×0.9×0.58	N-12°-E	甕		紅皿
03	円形	1.0(+⊙)×0.9×1.18	N-9°-E	甕	○南向き	寛永通寶(1)
04	円形	1.15×1.01×1.47	N-11°30'-E	甕	○北西向き	寛永通寶(2)
05	円形	1.2×1.15×1.03	N-11°30'-E	木桶	○西向き	
06	円形	0.95×0.9×1.11	N-11°-E	甕		
07	円形	1.1×0.85×1.75	N-79°-W	甕		薬罐(胞衣入れ)
08	円形	0.95×0.85×1.54	N-79°-W	石蓋つき甕	○西向き	
09	円形	0.8×0.75×0.58	N-79°-W	甕		
10	円形	0.6×0.6×0.6	N-11°-E	火葬墓	○	煙管詰口(1)
11	円形	1.04×0.98×1.08	N-13°-E	石蓋つき甕	○北東向き	
12	円形	0.59×0.55×0.22	N-11°-E	甕		
13	円形?	0.9×0.9×0.8	N-79°-W	甕		
14	円形?	0.9×0.9×0.8	N-79°-W	甕	○	
15	円形	0.9×0.8×0.34	N-11°-E	土壙	○	
16	円形	0.8×0.65×0.18	N-79°-W	土壙	○	煙管吸口(1) 布付着
17	円形	0.8×0.7×0.53	N-79°-W	甕		
18	円形	1.0×0.85×0.67	N-69°-E	木桶	○北東向き	
19	円形	0.75×0.6×0.28	N-11°-E	甕		寛永通寶(3)
20	円形	0.9×0.8×0.55	N-79°-W	甕		
21	円形	0.6×0.5×0.12	N-69°-E	甕		
22	楕円形	0.9×0.75×0.22	N-11°-E	甕		
23	円形	0.62×0.6×0.19	N-11°-E	甕		
24	円形	0.7×0.6×0.13	N-51°30'-W	甕	○	
25	楕円形	0.7×0.45×0.07	N-11°-E	甕		
26	円形	0.6×0.6×0.18	N-11°-E	甕		
27	不整形	0.95×0.4(+⊙)×0.28	N-79°-W	土壙	○	
28	円形	1.0×1.0×0.61	N-11°-E	土壙	○	
29	円形	0.9×0.85×1.17	N-79°-W	木桶	○西向き	寛永通寶(3) 紅皿(1) 陶器片(墨書)
30	円形	0.8×0.7×0.56	N-79°-W	甕	○	
31	円形	0.83×0.8×0.83	N-11°-E	甕	○	紅皿(1) ガラス
32	円形	0.8×0.8×0.9	N-11°-E	甕		寛永通寶(5) 数珠(60)
33	円形	0.7×0.7×0.28	N-11°-E	甕		
34	不明			甕		寛永通寶(2) 煙管吸口(1)
35	円形	0.3×0.28×0.1	N-11°-E	甕		紅皿(1)
36	隅丸方形	1.25×1.15×0.57	N-48°-W	甕		
37	不整形	1.05×0.8×0.11	N-11°-E	甕		
38	不整形	1.12×1.03×0.26	N-11°30'-E	甕		
39	隅丸方形	0.75×0.7×0.14	N-11°-E	甕	○	
40	楕円形	1.1×1.1(+⊙)×2.1	N-11°-E	木桶	○西向き	寛永通寶(4)
41	円形	1.3×1.1×1.2	N-48°-W	土壙		
42	不整円形	1.15×1.05×0.74	N-70°-E	甕	○	
43	円形	1.2×1.0×0.92	N-79°-W	甕		紅皿(1)
44	不整形	1.06×1.05×1.35	N-62°30'-E	甕	○	
45	円形	1.0×0.9×0.63	N-11°-E	甕		
46	円形	1.2×1.13×1.49	N-11°-E	火葬墓		
47	不整形	1.05×0.88×0.99	N-79°-W	土壙		近世皿(1)
48	円形	1.15×1.0×1.64	N-79°-W	木桶	○北向き	木棺留め金具(1)
49	円形	0.8×0.65×0.43	N-11°-E	甕	○	紅皿(1)
50	円形	0.8×0.65×0.53	N-79°-W	甕	○	煙管(1)
51	隅丸方形	1.1×0.8×0.52	N-79°-W	土壙	○	木棺留め金具(1)
52	不整形	1.0×0.7×0.86	N-79°-W	甕	○	
53	円形	0.9×0.75×0.22	N-58°-E	土壙	○	土器片
54	円形	1.04×1.02×0.9	N-11°-E	甕		煙管(2)
55	円形	1.04×0.98×1.25	N-64°-E	甕	○	
56	円形	0.9×0.9×1.23	N-11°-E	甕	○	
57	方形	0.95×0.9×0.43	N-79°-W	土壙	○	
58	円形	0.95×0.85×2.03	N-79°-W	甕	○	近世香炉(1)
59	不整円形	1.04×0.95×1.16	N-11°-E	石蓋つき甕	○	
60	円形	1.0×0.9×1.18	N-79°-W	木桶	○	
61	不整円形	1.1×0.95×1.55	N-11°-E	石蓋つき甕	○北向き	

Tab. 3. 近世墓(SX)一覽表(I)

No.	平面形	法量 (m)	方位	主体部	人骨	副葬品
62	不整円形	1.15×1.03×1.54	N-11°-E	甕	○大合葬	
63	円形	0.95×0.9×1.82	N-79°-W	甕	○	
64	円形	1.2×1.15×1.34	N-79°-W	甕	○南向き	
65	円形	0.92×0.85×0.4	N-41°-E	甕	○	
66	円形	0.93×0.8×0.93	N-29°-E	甕	○	
67	円形	0.8×0.7×0.43	N-79°-W	甕	○	
68	円形	1.0×0.9×0.62	N-79°-W	甕	○	
69	円形	1.1×1.0×1.08	N-11°-E	甕	○	寛永通寶 (1) 近世香炉 (1) 滑石片
70	隅丸方形	1.0×0.8×1.12	N-11°-E	土 壙		
71	円形	0.95×0.87×0.32	N-79°-W	甕	○	煙管 (2) 銅製品
72	隅丸長方形	1.41×0.7×0.29	N-79°-W	土 壙		
73	円形	1.0×0.9×0.52	N-11°-E	木 桶	○	
74	円形	1.0×0.85×1.11	N-11°-E	石蓋つき甕		
75	円形	0.65×0.63×0.14	N-79°-W	土 壙	○	
76	円形	0.63×0.55×0.09	N-79°-W	土 壙		
77	円形	1.05×0.95×0.34	N-11°-E	木 桶	○南向き	寛永通寶 (6) 近世甕?
78	円形	0.8×0.7×0.12	N-11°-E	土 壙		近世皿
79	不整円形	0.4×0.4×0.06	N-11°-E	甕	○	寛永通寶 (6)
80	円形	0.6×0.5×0.18	N-79°-W	甕		
81	円形	0.6×0.5×0.14	N-11°-E			
82	円形	0.65×0.6×0.15	N-11°-E	土 壙	○	
83	円形	0.62×0.6×0.13	N-11°-E	甕		
84	不整形	1.16×0.92×0.65	N-59°-E	土 壙	○	寛永通寶 (6) 釘 棺材 近世小環 (1)
85	隅丸方形	1.04×0.9×0.17	N-11°-E	土 壙		土師器
86	楕円形	1.57×1.08×0.64	N-59°-E	土 壙		近世皿
87	方形	1.3×1.05×0.53	N-53°-W	土 壙	○	寛永通寶 (6) 近世皿 (1)
88	不整形	1.14×0.94×0.28	N-83°-E	土 壙	○	毛抜き 銅板
89	円形	1.0×1.0×1.35	N-11°-E	木 桶	○	寛永通寶 (15+α)
90	円形	1.04×1.0×1.1	N-79°-W	木 桶	○東向き	寛永通寶 (2)
91	円形	1.02×0.9×0.84	N-79°-W	甕	○	
92	不整形	1.0×0.7×0.09	N-79°-W	土 壙		近世皿 (2)
93	円形	1.08×1.0×0.57	N-79°-W	土 壙	○	寛永通寶 (4)
94	円形	1.2×1.04×0.31	N-79°-W	甕	○	
95	円形	1.25×1.24×0.15	N-11°-E	土 壙		
96	不整形	1.55×1.17×0.49	N-79°-W	土壙		
97	円形	0.87×0.8×0.18	N-79°-W	石蓋つき甕	○東向き	
98	円形	0.9×0.8×0.18	N-79°-W	土 壙	○	寛永通寶 (3+α) 金具
99	円形	1.08×1.0×0.41	N-79°-W	土 壙	○	寛永通寶 (6. 木棺片付着)
100	円形	0.9×0.85×0.16	N-79°-W	土 壙	○	寛永通寶 (6)
101	不整形	1.33×0.95×0.5	N-11°-E	土 壙		近世皿 (1) 土師皿 (1)
102	不整形	1.12×0.96×0.3	N-11°-E	土 壙		
103	隅丸方形	0.98×0.85×0.17	N-11°-E	土 壙	○	寛永通寶 (6) 近世皿 (1) 土師皿 (1)
104	楕円形	0.83×0.65×0.42	N-51°-E	木 桶	○	寛永通寶 (5)
105	隅丸方形	1.3×1.2×0.37	N-11°-E	土 壙	○	人骨に銅付着
106	不整形	0.7(+α)×1.08×0.26	N-79°-W	土 壙	○	寛永通寶 (4)
107	不整形	1.75×1.12×0.3	N-73°-E	土 壙		
108	円形	0.95×0.9×0.6	N-11°-E	木 桶	○西向き	
109	円形	0.9×0.8×0.39	N-79°-W	甕		
110	不整形	1.9×1.35×0.49	N-55°-E	土 壙		
111	楕円形	1.59×1.15×0.19	N-79°-W	土 壙		
112	円形	1.05×1.02×1.0	N-11°-E	木 桶	○	
113	不整形	1.22×1.0×0.45	N-79°-W	土 壙		
114	円形	0.75×0.65×0.25	N-11°-E	甕	○	寛永通寶 (4) 鉄片布痕有り
115	円形	1.32×1.28×1.06	N-11°-E	木 桶	○	寛永通寶 (3)
116	円形	0.88×0.85×0.74	N-11°-E	木 桶	○西向き	寛永通寶 (6)
117	円形	0.85×0.8×0.75	N-11°-E	木 桶	○	
118	円形	0.95×0.93×0.62	N-11°-E	木 桶	○西向き	寛永通寶 (6)
119	円形	0.82×0.8×0.12	N-79°-W	土 壙		寛永通寶 (6)
120	不整形	0.65×0.5×0.08	N-62°30'-E	土 壙		寛永通寶 (5)
121	円形	0.8×0.8×0.75	N-79°-W	土 壙	骨がわずかに残る	寛永通寶 (1) 近世小環 (1)
122	不整形	1.41×1.1×0.19	N-69°30'-E	土 壙	○東向き	寛永通寶 (3) 木片 銅製品 鉄片

Tab. 4. 近世墓(SX)一覽表(2)

No.	平面形	法量 (m)	方位	主体部	人骨	副葬品
123	隅丸方形	1.5×0.85×0.54	N-69°30'-E	土 壙	○	
124	楕 円 形	1.18×0.81×0.19	N-79°-W	土 壙	○頭は北(顔は南西をむく)	近世皿 (1) 土師皿 (1)
125	円 形	0.88×0.85×0.55	N-11°-E	土 壙		
126	円 形	0.94×0.84×1.0	N-79°-W	木 桶	○南西向き	
127	円 形	0.8×0.76×2.61	N-79°-W	土 壙	○	近世皿 (1)
128	不 整 形	1.1×0.76×1.84	N-64°-E	土 壙	○	
129	円 形	1.03×1.0×1.73	N-11°-E	甕	○	
130	円 形	0.95×0.9×1.32	N-11°-E	土壙(木桶?)	○	乾元重寶 (1)
131	円 形	0.9×0.85×0.96	N-11°-E	木 桶	○	
132	隅丸方形	1.3×0.85×0.23	N-16°-W	土 壙	○	
133	楕 円 形	1.25×1.06×1.35	N-79°-W	木 桶	○	寛永通寶 (5) 元祐通寶 (1)
134	円 形	0.65×0.6×0.06	N-11°-E	土 壙	○	寛永通寶 (6) 木製品片
135	不 整 形	0.9×0.85×0.21	N-79°-W	土 壙	○	寛永通寶 (4) 紅皿 (1) 近世皿 (1)
136	円 形	0.9×0.85×0.81	N-79°-W	土 壙	○	
137	円 形	0.85×0.75×0.33	N-79°-W	甕	○	
138	不 整 形	1.1×1.07×1.27	N-79°-W	木 桶	○	
139	隅丸方形	1.05×1.0×0.34	N-79°-W	土 壙		
140	円 形	1.16×1.08×1.25	N-79°-W	木 桶	○	寛永通寶 (4) 鉄片
141	円 形	1.23×1.17×1.26	N-11°-E	木 桶	○	寛永通寶 (1)
142	円 形	1.0×0.97×1.09	N-11°-E	木 桶	○	寛永通寶 (3)
143	円 形	0.94×0.83×1.01	N-11°-E	甕	○	
144	円 形	1.2×1.2×0.95	N-11°-E	木 桶	○南向き	寛永通寶 (3)
145	円 形	1.0×0.95×0.7	N-79°-E	甕	○	
146	円 形	0.9×0.85×1.21	N-79°-W	石蓋つき甕	○北東向き	
147	円 形	1.0×1.0×1.02	N-11°-E	石蓋つき甕	○北東向き	
148	円 形	0.95×0.9×0.74	N-11°-E	木 桶	○	寛永通寶 (4) 鉄片 (布痕有)
149	方 形	1.0×0.6×1.02	N-11°-E	土 壙	○	
150	円 形			甕		
151	不 整 形	1.6×1.15×0.31	N-18°30'-W	土 壙		
152	不 整 形	1.92×1.45×0.44	N-48°-W	土 壙		近世皿 (1) 陶器 (1)
153	円 形	0.6×0.58×0.17	N-79°-W			
154	円 形	1.0×0.83×0.32	N-79°-W			
155	楕 円 形	0.72×0.47×0.14	N-11°-E			
156	不 整 形	0.7(+@)×1.0×0.5	N-79°-W			
157	楕 円 形	0.7×0.55×0.16	N-79°-W			
158	不 整 形	1.1×1.0×0.27	N-79°-W			
159	不 整 形	0.95×0.8×0.72	N-79°-W			
160	円 形	0.62×0.53×0.16	N-79°-W			
161	円 形	0.65×0.6×0.07	N-79°-W			
162	円 形	0.6×0.55×0.15	N-11°-E			
163	円 形	0.64×0.61×0.37	N-11°-E			
164	円 形	0.5×0.45×0.08	N-11°-E			
165	円 形	0.58×0.55×0.12	N-11°-E			
166	楕 円 形	1.17×0.8×0.09	N-11°-E			
167	楕 円 形	0.59×0.43×0.07	N-11°-E			
168	不 整 形	1.05×0.91×0.06	N-11°-E			
169	楕 円 形	0.96×0.79×0.14	N-79°-W			
170	円 形	0.5×0.49×0.05	N-11°-E			
171	隅丸方形	1.14×0.82×0.12	N-11°-E			
172	楕 円 形	0.86×0.43×0.13	N-18°30'-W			
173	円 形	0.55×0.55×0.09	N-11°-E			
174	楕 円 形	0.98×0.68×0.07	N-11°-E			
175	隅丸方形	1.51×1.18×0.13	N-79°-W			
176	隅丸方形	0.72×0.68×0.12	N-79°-W			
177	方 形	0.66×0.66×0.01	N-11°-E			
178	不 整 形	1.6×1.28×0.15	N-63°-E			
179	楕 円 形	0.98×0.65×0.09	N-73°-E			
180	不整円形	0.95×0.81×0.09	N-11°-E			
181	楕 円 形	0.76×0.56×0.11	N-81°-E			
182	円 形	0.8×0.68×0.18	N-11°-E			

Tab. 5. 近世墓(SX)一覽表(3)

3. 小結

上月隈遺跡は、甕棺墓と土壙墓によって構成される弥生時代の墳墓群と、江戸時代後期以降の近世墓群からなる共同墓地遺跡である。しかし、遺跡の現況は、近年の開削により旧状の $\frac{1}{4}$ ほどを残すのみで、遺跡の全容を伝えているとは云いがたい。

弥生時代の墳墓群は、甕棺墓21基、土壙墓6基よりなるが、ST-07・15等の遺存状況からすると丘陵の尾根筋は近世墓による削平が著しく、失われたものもあったと推定され、その数は現状の何割かを上回るものであったろう。

甕棺墓は、弥生時代中期中葉から後期初頭までであるが、中期後葉のものが主体となる。これを森編年案に従えば、汲田式期から桜馬場式期までとなる。ST-03が汲田式、ST-17・19が立岩式、ST-13が桜馬場式に比定されようが、汲田式と桜馬場式のもの各1基で、中期後葉の立岩式のものほとんどを占める。これからすれば、上月隈遺跡の甕棺墓群造営は、中期中葉の汲田期に開始され、やや間をおいた立岩期に盛行し、後期初頭の桜馬場期に終焉をむかえることになる。ただし、検出した甕棺墓群が、上月隈遺跡の甕棺墓群の全容を表しているのではなく、一般論的な甕棺墓の展開から言えば、須玖期に造墓活動が途絶するのではなく、中期中葉の汲田期から後期初頭の桜馬場期まで間断なく続いていたと考えるのが妥当なようである。

土壙墓は、2基ずつがほぼ等間隔に別れて分布し、3グループとして把握できよう。主軸方位を同じくする木棺墓と土壙墓の2群と主軸方位を直交させる1群とがある。土壙墓と甕棺墓の切り合いはST-13とSR-03の間であり、土壙墓が甕棺墓よりも古い。しかし、このST-13は、甕棺墓群中でもっとも新しい後期初頭のもので、もっとも古い中期中葉のST-03の間には時期差が大きく、土壙墓群が甕棺墓群に先行して造営されたとは即断しがたい。隣接する下月隈宮の後遺跡や宝満尾遺跡等の在り方から勘考すれば、甕棺墓群初現と並行するか、やや先行する中期中葉頃と考えて差しつかえあるまい。

また、この弥生時代の墳墓域は、昭和20年代には丘陵西端の崖面上に甕棺墓の露頭が観られたとの旧聞があり、昭和初期の旧地形と併せて復原すると、金隈遺跡や下月隈宮の後遺跡例のように独立丘陵の尾根筋全域に互って展開していたものと推定される。

一方、近世墓は、改葬によりほとんどの墓碑が紛失しているが、攪乱壙内より文政12年(1829)～明治4年(1871)の墓碑銘が出土し、副葬遺物を勘考すると江戸時代後期以降の造墓開始と考えることができよう。また、いわゆる「六道銭」と云われる銭貨を副葬したものが、38基ある。銭貨は2例を除いては「寛永通寶」で、15枚を副葬する1例を除いては1～6枚を副葬し、6枚のものが32%ともっとも多い。この六道銭には渡来銭を含む種々の銭貨が使われているため習俗や流通経済機構解明の好資料となり、今後は資料の増加と詳細な検討が望まれる。

「上月隈遺跡」1991 福岡市教育委員会
福岡市埋蔵文化財調査報告書第247集

福岡市上月隈遺跡出土人骨(弥生・近世)

中 橋 孝 博

九州大学医学部解剖学教室第2講座

福岡市上月隈遺跡出土人骨(弥生・近世)

中 橋 孝 博

九州大学医学部解剖学第2講座

はじめに

福岡市南部から太宰府に至る地域は、我が国最古の稲作農耕の痕跡を残す板付遺跡や、大量の銅鏡などを出土して奴国の王墓かと推定されている須玖岡本遺跡、あるいは100体を越す弥生人骨を出土した金隈遺跡など、特に弥生文化や弥生人についての考察を進める場合には、看過できない重要な遺跡の集中域として知られている。様々な考古学的知見とともに、当地の住人に関して、その過去から現在に至る資料、情報の蓄積は、単に地域的問題に留まらず、日本人の成立に関する様々な疑問を解く上でも重要な課題となろう。

1989年度の調査によって、この地域からまた新たに弥生、及び近世人骨が出土した。弥生人骨については既に多くの出土例があり、詳しい研究報告もなされているが、近世人骨の出土は今回が初めてである。とりわけ近年、旧博多市街区から大量の江戸時代人骨が出土し、その近世人としてはやや特異な形質の成因を巡って、都市生活との関係が一つの研究課題として指摘されている。今回の出土地のような当時の博多郊外にあたる地域の住人と博多住人との間にどういった形質上の差異があったのか、その比較結果は、いわゆる「都市効果」と言われる近年の急激な形態変化の要因を考察する上でも興味深い知見となろう。残念ながら弥生人骨は保存状態が悪くてその特徴を明らかにできなかったが、近世人については少数ながらほぼ全身骨が遺存しており、かなり詳しく検討することができたので、以下にその結果を報告する。

資料、方法

上月隈遺跡は、福岡市の南東部、板付遺跡や金隈遺跡にも近い、御笠川東岸の月隈丘陵上(博多区大字上月隈字山浦170-1)に見いだされた遺跡である。1989年秋から冬にかけて発掘調査が実施され、弥生時代の甕棺墓20基のほか、江戸時代後期の近世墓が200基近く検出された。当報告は、その発掘調査に伴って出土した弥生人骨7体と、近世人骨12体に関する研究結果である。

弥生人骨の保存状況は非常に悪く、その形質を明らかにできたのは四肢の一部に留まったが、近世人骨については、少数ながらほぼ全身にわたる所見が得られた。

計測は主に、Martin-Saller (1957)に従い、その他、Howells(1973)、鈴木(1963)、森本(1971)の方法に依った。また、性判定には、筆者らの保存不良骨に対する方法 (Nakahashi&Nagai, 1986；中橋、1988) を随時援用した。

結果

I、弥生時代人骨

弥生時代中期中葉から後期初頭にかけての甕棺20基が出土し、その内、7基に人骨遺残が見られた。表1にその出土人骨を一覧する。

番号	性	年齢	時代	抜歯	保存状態	備考
ST-04	♀	成人	中期末	?	▲	左乳様突起部のみ
05	♀	熟年	中期後葉	?	△	頭蓋・前腕・大腿骨の各小片
06	♀	成人	〃	?	△	大腿骨片
09	♀	熟年	中期末	?	△	頭蓋・上肢・左下肢骨
12	?	成人	〃	?	▲	頭小片のみ
14	?	成人	〃	?	▲	大腿骨小片のみ
19	(♂)	成人	〃	?	△	頭蓋、大腿骨片

▲ 一部のみ残存、△ 不良 (計測可能)

表1 上月隈遺跡出土弥生人骨

所属時代は甕棺の編年の考察からいずれも弥生時代中期後葉～末のものと考えられている。保存状況は残念ながら非常に悪い。特に頭蓋骨については、殆ど観察、計測ができなかったもので、以下に四肢骨の一部について得られた結果を記す。

弥生人下肢骨の計測値と比較結果を表2、3に示す。

まず男性 (ST-19) の大腿骨についてみると、当地域の弥生人男性としては骨幹がやや細いが、粗線の発達は良好で、その断面示数はかなり高値をとる。また、骨幹上部には少し扁平傾向が見られた。

		上月隈	北部九州 ¹⁾		山口 ¹⁾		大友 ²⁾		津雲 ³⁾		九州 ⁴⁾	
		(弥生) ST-19	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨												
1	最大長	—	60	430.9	37	434.4	15	420.1	11	415.2	59	406.5
2	自然位長	—	18	427.7	26	432.8	17	413.9	11	411.3	59	403.2
6	中央矢状径	29	162	29.7	72	29.1	41	28.6	20	28.9	59	26.5
7	中央横径	26	166	28.0	72	27.2	42	26.4	20	25.5	59	25.6
8	中央周	86	161	90.8	72	88.9	41	87.0	20	86.6	59	82.4
9	骨体上横径	33	115	32.6	74	32.7	38	31.6	19	30.4	59	29.4
10	骨体上矢状径	23	115	26.2	74	26.0	38	25.2	19	24.8	59	24.3
8/2	長厚示数	—	18	21.4	26	20.5	16	21.4	11	21.1	59	20.4
6/7	中央断面示数	111.5	162	106.4	72	107.6	41	108.6	20	113.2	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	69.7	115	80.5	74	80.0	39	80.1	19	81.7	58	82.8

1) 中橋・永井 (1989)、2) 松下 (1981)、3) 清野・平井 (1928)、4) 阿部 (1955)

表2 大腿骨計測値 (男性・左)

		上月隈 (弥生)		北部九州 (弥生)		山口 (弥生)		大友 (弥生)		津雲 (縄文)		九州 ¹⁾ (現代)		
		5	6	9	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨														
1	最大長	-	-	-	34	405.5	30	403.9	5	386.8	16	385.4	13	380.1
2	自然位長	-	-	-	11	403.0	26	399.5	4	378.3	16	379.9	13	375.9
6	中央矢状径	24	26	27	112	25.7	50	25.5	30	25.5	24	25.3	13	23.6
7	中央横径	24	23	25	112	26.3	50	26.2	30	25.2	24	24.1	13	23.2
8	中央周	74	77	80	111	81.5	50	80.9	29	80.4	24	77.8	13	74.2
9	骨体上横径	25	-	30	86	30.5	50	31.0	30	29.7	25	28.5	13	27.5
10	骨体上矢状径	22	-	22	86	23.2	50	23.0	30	22.7	25	22.0	13	21.3
8/2	長厚示数	-	-	-	11	20.8	26	20.2	4	20.3	15	20.6	13	19.8
6/7	中央断面示数	100	113	108	112	98.3	50	97.5	31	102.1	24	105.6	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	88	-	73.3	86	76.4	50	74.5	30	76.5	25	77.4	13	77.1
脛骨														
1	全長	-	-	-	20	324.3	20	326.8	3	313.0	10	317.5	14	301.0
1a	最大長	-	-	-	30	329.3	23	331.0	4	324.8	10	321.9	14	306.6
8	中央最大径	-	-	-	46	27.0	31	26.9	24	27.6	23	27.1	14	24.7
8a	栄養孔位最大径	-	-	32	97	30.8	42	30.5	19	30.4	21	30.5	14	28.1
9	中央横径	-	-	-	46	20.4	31	19.1	26	19.7	23	17.7	14	18.8
9a	栄養孔位横径	-	-	23	98	22.3	42	21.6	20	21.1	20	19.2	14	21.1
10	骨体周	-	-	-	46	74.5	30	72.6	23	75.3	23	72.7	14	70.1
10a	栄養孔位周	-	-	88	96	83.2	42	82.2	18	81.6	20	81.6	14	78.2
10b	最小周	-	-	73	82	68.6	44	67.5	24	68.3	17	67.1	14	63.6
9/8	中央断面示数	-	-	-	46	75.7	31	71.1	23	72.1	22	64.7	14	76.3
9a/8a	栄養孔位断面示数	-	-	71.9	97	72.4	42	71.2	18	70.4	21	63.0	14	74.9
10b/1	長厚示数	-	-	-	20	21.3	20	20.3	3	21.4	10	21.3	14	21.2

1) 鑄鍋 (1955)

表3 下肢骨計測値 (女性・左)

女性大腿骨もまた少し細く、男性同様、その断面示数がやや高くなる傾向を見せている。ただ、唯一計測値の得られた9号脛骨の周径はむしろ比較群を上回っていたが、その断面形状に扁平性は見られない。長径についてはいずれも不明である。

II、江戸時代人骨

弥生時代の遺構の発掘調査に付随して出土したものであり、墓壙数は確認されたものだけでも182基に達するが、先に改葬処置がなされていたため、人骨が回収されたのは、表4に示す12体に留まった。カメ、木桶、及び土壙墓中に埋葬されていたもので、埋葬施設の違いによって

番 号	性	年齢	保存状態	埋葬方法	埋葬方位・姿勢	六道銭	備	考
SX-03	♂	熟年	◎	カメ	南向き	○		
05	♂	熟年	○	木桶	西向き坐葬			
18	♂	熟年	○	木桶	北東向き	○		
31	?	小児(6才)	○	カメ	?			
51	♂	老年	△	土壙	西頭位、右側臥			
63	♂	熟年	◎	カメ	?			
79	♀	成年	○	カメ	北西向き坐葬	○		
103	♂	熟年	△	土壙	北頭位、右側臥	○		
104	♀	熟年	△	木桶	南西向き坐葬	○		
108	♂	熟年	○	木桶	西向き坐葬			
118	♂	熟年	○	木桶	西向き坐葬	○		
147	♂	熟~老	◎	カメ	西向き坐葬	○		

(◎:ほぼ完全、○:良好、△:不良)

表4 上月隈遺跡出土江戸後期人骨

当然、埋蔵姿勢にはかなりのばらつきが見られるが、北頭位や西方に顔、身体を向けた姿勢が比較的多い。保存状況は比較的良好で、ほぼ全身にわたる計測、観測が可能である。なお、性比が大きく男性、及び成人に偏っているが、これには改葬等の人為的要因が介在しており、本来の埋葬状況を示すものではない。

所属時代は供伴した墓石や六道銭を始めとした副葬品等に関する考察から、ほぼ江戸時代後期のものと考えられている。

2-1、頭蓋骨

計測、比較結果を表5、6、7に示す。また、現代西南日本人を基準とした偏差折線を図1に示す。

		男性			女性	
		N	Mean	S.D	N	Mean
1	頭蓋最大長	6	183.5	6.78	1	171
8	頭蓋最大幅	6	137.8	3.87	1	135
17	Ba-Br高	7	137.3	4.46	1	128
8/1	頭長幅示数	6	75.4	3.80	1	78.9
17/1	頭長高示数	6	75.6	1.95	1	74.8
17/8	頭幅高示数	6	100.3	5.20	1	94.8
5	頭蓋基底長	7	101.3	5.96	1	95
9	最小前頭幅	7	92.6	3.41	1	92
23	頭蓋水平周	6	522.0	11.42	1	499
24	横弧長	6	315.3	4.68	1	306
25	正中矢状弧長	6	374.3	12.94	—	—
40	顔長	6	98.7	7.06	1	96
43	上顔幅	7	103.9	2.73	1	100
44	両眼窩幅	7	96.6	3.10	1	93
45	頬骨弓幅	6	136.3	2.25	1	122
46	中顔幅	7	101.3	4.82	1	86
47	顔高	5	123.2	8.49	1	103
48	上顔高	6	72.3	4.32	1	63
47/45	顔示数 (K)	4	91.5	8.53	1	84.4
47/46	顔示数 (V)	5	124.0	11.35	1	119.8
48/45	上顔示数 (K)	5	53.9	3.70	1	51.6
48/46	上顔示数 (V)	6	71.6	4.88	1	73.3
51	眼窩幅 (左)	8	41.6	1.30	1	40
52	眼窩高 (左)	8	34.9	2.03	1	34
52/51	眼窩示数 (左)	7	83.6	5.47	1	85.0
54	鼻幅	7	26.1	1.07	1	23
55	鼻高	7	51.3	2.43	1	44
54/55	鼻示数	7	51.1	3.32	1	52.3
50	前眼窩間幅	7	18.2	1.38	2	18.2
F	鼻根横弧長	7	20.0	1.73	2	20.0
50/F	鼻根彎曲示数	7	91.0	5.23	2	91.0
57	鼻骨最小幅	7	8.3	1.05	2	7.0
72	全側面角	5	84.0	4.00	1	80
74	歯槽側面角	5	67.6	7.23	1	67
65	下顎頭間隔	4	133.5	4.12	—	—
66	下顎角幅	3	101.0	3.46	—	—
68	下顎骨長	5	69.6	5.18	1	67
69	オトガイ高	4	36.5	1.29	1	30
69(3)	下顎体厚 (左)	5	14.0	1.00	1	13
70	下顎枝高 (左)	3	62.0	4.58	1	54
71	下顎枝幅 (右)	4	34.3	2.22	1	33
79	下顎枝角	5	129.2	5.54	—	—
71/70	下顎枝示数	3	55.9	0.29	1	61.1

表5 上月隈遺跡出土江戸時代人骨の頭蓋計測値

		上月隈 (近世)		天福寺 ¹⁾ (近世)		桑島 ²⁾ (近世)		吉原 ³⁾ (近世)		湯島 ⁴⁾ (近世)		吉母 ⁵⁾ (中世)		西南日本 ⁶⁾ (現代)	
		N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	6	183.5	38	182.6	13	180.1	31	178.1	92	183.5	16	181.8	108	181.4
8	頭蓋最大幅	6	137.8	38	138.6	13	131.0	31	140.6	92	141.1	17	136.2	108	139.3
17	Ba-Br高	7	137.3	33	139.2	11	135.9	25	138.3	91	138.5	17	139.4	108	139.3
8/1	頭長幅示数	6	75.4	37	76.0	13	72.7	30	79.2	92	77.0	16	74.9	108	76.6
17/1	頭長高示数	6	75.6	33	76.2	11	75.5	24	78.0	91	75.6	16	76.8	108	76.9
17/8	頭幅高示数	6	100.3	33	100.8	11	104.6	24	98.8	91	98.2	17	102.5	108	100.1
45	頬骨弓幅	6	136.3	25	136.4	5	126.3	11	132.8	81	136.4	18	135.2	106	134.5
46	中顔幅	7	101.3	24	101.8	7	101.1	22	99.9	91	101.6	19	100.3	107	99.9
47	顔高	5	123.2	14	126.9	4	122.4	—	—	4	123.5	11	117.3	66	122.2
48	上顔高	6	72.3	18	74.5	7	70.5	12	68.4	65	71.8	16	69.8	92	71.8
47/45	顔示数 (K)	4	91.5	13	93.2	2	93.7	—	—	4	91.7	11	86.4	64	91.4
47/46	顔示数 (V)	5	124.0	13	123.9	3	115.8	—	—	—	—	11	116.5	65	122.2
48/45	上顔示数 (K)	5	53.9	17	54.4	5	55.4	6	51.4	56	53.0	16	51.7	90	53.5
48/46	上顔示数 (V)	6	71.6	17	73.1	7	70.2	10	67.7	64	70.9	16	69.8	91	71.8
51	眼窩幅 (左)	8	41.6	24	42.6	7	40.9	23	42.0	95	43.3	18	42.0	108	43.0
52	眼窩高 (左)	8	34.9	24	34.1	8	34.4	23	33.7	95	35.1	18	34.4	108	34.4
52/51	眼窩示数 (左)	7	83.6	23	80.9	6	83.6	23	80.1	95	81.6	18	82.1	108	80.2
54	鼻幅	7	26.1	24	26.5	8	25.9	23	26.7	93	25.1	17	26.0	108	25.9
55	鼻高	7	51.3	24	52.9	8	50.5	25	52.0	93	53.6	16	51.4	108	52.2
54/55	鼻示数	7	51.1	24	50.1	8	51.3	23	51.8	91	48.7	16	50.5	108	49.8
72	全側面角	5	84.0	16	83.2	7	80.4	9	80.9	71	85.1	15	82.5	92	83.8
74	齒槽側面角	5	67.6	16	67.0	8	64.5	9	68.8	71	68.4	14	65.2	107	70.7

1) 中橋 (1987)、2) 脇 (1970)、3) 欠田 (1959)、4) 河越 (1957)、森田・河越 (1960)、5) 中橋・永井 (1985)、6) 原田 (1954)

表6 主要頭蓋計測値の比較 (男性)

		上月隈 (近世)		天福寺 (近世)		桑島 (近世)		湯島 (近世)		吉原 (近世)		吉母浜 (中世)		西南日本 (現代)	
		79	104	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1	頭蓋最大長	171	—	38	174.7	4	172.6	60	173.2	13	169.5	26	176.4	42	172.8
8	頭蓋最大幅	135	—	38	133.5	4	128.5	60	136.8	16	136.3	26	132.0	42	133.8
17	Ba-Br高	128	—	35	132.7	4	132.0	59	134.1	10	132.8	25	133.0	42	131.5
8/1	頭長幅示数	78.9	—	38	76.5	4	74.4	60	79.0	13	81.1	26	74.9	42	77.5
17/1	頭長高示数	74.8	—	35	76.1	4	76.5	59	77.5	9	77.9	25	75.4	42	76.2
17/8	頭幅高示数	94.8	—	35	99.4	4	102.9	59	98.1	9	97.0	25	100.7	42	98.4
45	頬骨弓幅	122	—	30	126.5	—	—	44	125.9	—	—	26	128.3	42	124.3
46	中顔幅	86	—	25	95.5	2	91.6	54	95.1	—	—	27	98.6	42	93.6
47	顔高	103	—	15	115.9	2	117.7	3	119.0	—	—	18	111.5	10	113.0
48	上顔高	63	65	22	68.8	2	71.4	38	68.3	—	—	19	65.5	48	68.6
47/45	顔示数 (K)	84.4	—	15	91.1	—	—	—	—	—	—	18	86.3	10	90.5
47/46	顔示数 (V)	119.8	—	15	120.9	2	128.6	—	—	—	—	18	111.5	10	118.3
48/45	上顔示数 (K)	51.6	—	22	54.3	—	—	32	54.5	—	—	22	51.6	40	55.1
48/46	上顔示数 (V)	73.3	—	22	71.8	2	78.0	35	72.3	—	—	22	66.5	40	73.2
51	眼窩幅 (左)	40	—	30	40.5	2	39.8	54	41.7	9	39.8	25	41.1	42	40.7
52	眼窩高 (左)	34	—	30	34.3	2	34.7	54	35.3	9	33.0	25	33.9	42	34.0
52/51	眼窩示数 (左)	85.0	—	29	84.8	2	87.3	54	84.7	9	83.1	26	82.7	42	83.7
54	鼻幅	23	—	26	25.3	2	24.2	52	24.6	7	25.4	125	25.9	42	25.2
55	鼻高	44	—	28	49.9	2	49.9	52	50.4	7	48.3	125	48.6	42	48.7
54/55	鼻示数	52.3	—	26	51.0	2	48.8	50	49.2	7	53.2	125	53.5	42	51.9
72	全側面角	80	—	18	82.5	2	76.9	46	83.7	—	—	22	82.8	40	82.8
74	齒槽側面角	67	—	17	65.0	2	63.7	46	67.1	—	—	22	61.8	40	67.1

表7 主要頭蓋計測値の比較 (女性)

脳頭蓋：男性では著しい長頭傾向が見られる。平均値で見ると、頭長の大きさ、頭幅の狭さが目につき、その示数は75.4と、中頭型の下限に近い。但し個体別に見ると、6例中、長頭型に入る個体が4例存在する一方、中頭でも短頭型に近い個体(79.9, 79.8)が2例存在し、やや変異が大きい結果となっている。ともあれこの上月隈の長幅示数は、博多の天福寺近世人、

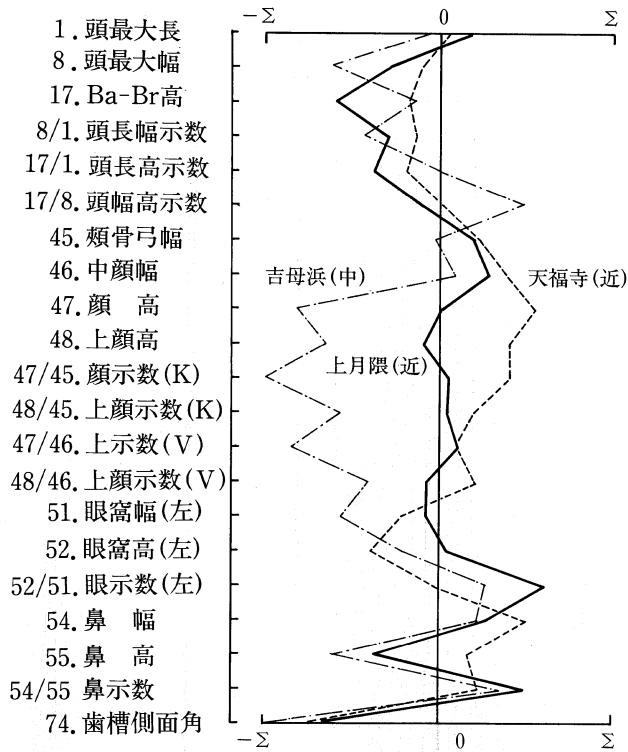


図1. 現代西南日本人からの偏差折線

及び当地の現代人、いずれよりも下回り、特に畿内の吉原江戸時代と大きな差を見せるが、熊本県の桑島江戸時代人ほどの強度の長頭ではない。

頭高は当地の近、現代人の平均をやや下回っているが、その差は小さい。長高、幅高示数はそれぞれ75.6、100.3で、高・尖頭型 (hypsikran, akrokran) に属し、当地の現代人や天福寺近世人とは比較的近い。

女性は1体のみであったが、頭長がかなり短いためにその長幅示数はやや高値をとる。

また、頭高は男性同様やや低く、頭幅が少し広いことも影響して、頭幅高示数 (94.8: 中頭型 metriokran) の小ささが目立つ。

顔面頭蓋: 男性では近世人らしく、かなりの高・狭顔傾向が認められる。顔幅のわりに顔面高径が大きく、例えばそのコールマンの顔、上顔示数はそれぞれ91.5, 53.9となって、吉母浜中世人よりは明らかに高く、現代人との比較でも遜色を見せない。ただ、博多の天福寺ほどの著しい高顔ではなく、その顔高、上顔高、及び示数値ともにやや低くなっている。眼窩だけはしかし上月隈の方が上回っており、その指数値は83.6で、比較群中、最高値をとる。鼻型には大差は見られないが、天福寺との目立った差異として鼻根部の著しい偏平性があげられ、その鼻根彎曲示数は91.0で、天福寺 (83.0) とは大きく隔たっている。

また、吉母浜中世人ほどではないが、かなりの歯槽性突顎も見られた。

下顎では下顎頭間幅 (133.5mm) の大きさが目立つが (現代西南日本人 123.7mm)、下顎角幅には差がなく、筋付着部の発達は強くない。下顎枝示数も比較的小さく、吉母浜等に較べるとやや華奢な外観を呈している。

女性 (表5、7) では顔面の高、幅径ともに著しく小さく、天福寺はもとより、各計測値は比較群の最低値をとるものが多い。鼻根部はやはり強い偏平性をもち、かなりの歯槽性突顎も確認できるが、全体的に小、低顔傾向が顕著で、サイズのにも男性との隔たりが大きい個体と言えよう。

2-2、四肢骨

上肢骨 (表8、9)

男性上肢骨について、まず長径は比較的例数の多い上腕骨でみる限りは天福寺を始めとする比較群と大差ないが、より以前の、例えば当地の弥生人 (金隈: 304.5mm) 等に較べると明らかに短い。上月隈近世人の上肢骨で目立つ点として、骨幹がかなり太く、頑丈な点を上げることができる。特に上腕骨では、その中央周が80mm近くに達する個体もあり、平均値も比較群の最高値となっている。また、三角筋粗面の発達も良好なため、断面示数がやや低値に傾いて偏平

		上月隈 (近世)			天福寺 (近世)		桑島 ¹⁾ (近世)		江戸 ²⁾ (近世)		吉母 (中世)		九州 ³⁾ (現代)	
		N	M	S.D	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨														
1	最大長	6	296.8	15.72	21	296.9	10	293.6	—	296.8	14	295.8	106	295.3
2	全長	3	288.0	22.91	19	293.3	10	293.0	—	292.8	14	291.6	106	290.6
5	中央最大径	8	24.3	1.91	22	22.9	14	20.8	—	22.7	20	22.6	106	21.9
6	中央最小径	8	18.1	1.46	22	17.7	14	15.9	—	17.7	20	17.6	106	16.9
7	骨体最小周	8	66.9	3.52	22	63.8	14	62.4	—	63.5	20	62.5	106	61.8
7a	中央周	8	69.6	4.10	22	66.5	14	67.0	—	69.4	20	66.1	106	63.7
6/5	骨体断面示数	8	74.9	5.32	22	77.6	14	76.5	—	78.3	20	78.1	106	79.1
7/1	長厚示数	6	22.5	2.42	16	21.3	10	21.6	—	21.4	14	21.4	106	20.9
橈骨														
1	最大長	4	226.8	15.26	23	228.5	—	—	—	224.2	17	228.0	64	219.9
2	機能長	2	201.0	2.83	23	212.2	—	—	—	210.8	16	213.6	64	208.2
3	最小周	6	45.3	4.18	23	42.2	—	—	—	41.6	20	41.9	63	40.1
4	骨体横径	7	18.3	1.60	23	17.5	—	—	—	16.6	20	16.9	63	16.0
4a	骨体中央横径	4	17.5	2.65	23	17.5	—	—	—	16.6	20	15.5	63	15.2
5	骨体矢状径	7	13.4	1.27	23	12.6	—	—	—	11.9	20	12.1	63	11.7
5a	骨体中央矢状径	4	13.3	1.50	22	12.6	—	—	—	12.0	20	11.9	63	11.9
3/2	長厚示数	2	23.9	3.18	21	19.8	—	—	—	19.8	16	19.8	61	20.4
5/4	骨体断面示数	7	73.5	4.75	23	72.0	—	—	—	71.8	20	71.6	60	71.4
5a/4a	中央断面示数	4	76.3	8.73	22	80.3	—	—	—	77.5	20	77.5	40	77.9
尺骨														
1	最大長	4	237.8	15.20	18	244.6	—	—	—	242.1	14	247.4	62	236.2
2	機能長	3	204.7	4.51	18	214.6	—	—	—	211.2	12	217.5	64	209.2
3	最小周	3	39.7	3.79	20	37.5	—	—	—	36.4	17	37.5	65	35.8
11	矢状径	7	13.9	1.07	24	13.1	—	—	—	12.8	19	12.8	63	12.8
12	横径	7	17.9	1.07	24	17.0	—	—	—	16.2	19	12.8	64	16.5
3/2	長厚示数	2	20.0	2.12	18	17.5	—	—	—	17.2	11	17.9	83	17.0
11/12	骨体断面示数	7	77.8	7.28	23	77.9	—	—	—	79.0	19	73.7	63	74.9

1) 立志 (1970)、2) 遠藤他 (1967)、3) 専頭 (1975)、溝口 (1957)

表8 下肢骨計測値 (男性)

		上月隈 (近世)		天福寺 (近世)		桑島 (近世)		江戸 (近世)		吉母 (中世)		九州 (現代)	
		SX-79	SX-104	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨													
1	最大長	—	—	19	273.7	6	268.6	—	269.7	19	270.0	36	271.7
2	全長	—	—	15	271.4	6	266.4	—	266.0	18	267.4	36	268.6
5	中央最大径	20	21	20	20.3	7	18.0	—	19.6	28	19.9	36	19.8
6	中央最小径	14	14	20	15.5	7	13.8	—	14.9	28	14.8	36	14.8
7	骨体最小周	56	58	21	56.0	7	55.3	—	54.1	28	54.1	36	54.8
7 a	中央周	58	61	20	59.3	7	57.9	—	56.9	28	57.3	36	56.9
6/5	骨体断面示数	70.0	66.7	20	75.9	7	76.7	—	76.6	28	74.1	36	75.3
7/1	長厚示数	—	—	17	20.7	6	20.7	—	20.1	19	20.0	36	20.2
橈骨													
1	最大長	—	—	12	197.9	—	—	—	199.8	18	206.0	12	199.9
2	機能長	—	—	11	183.5	—	—	—	188.9	18	193.1	12	187.0
3	最小周	36	—	16	35.7	—	—	—	34.5	27	34.6	12	34.7
4	骨体横径	16	15	16	15.3	—	—	—	14.4	27	15.1	12	14.5
4 a	骨体中央横径	—	—	14	14.0	—	—	—	13.5	27	13.4	12	13.5
5	骨体矢状径	10	11	16	10.3	—	—	—	9.8	27	10.1	12	9.7
5 a	骨体中央矢状径	—	—	14	10.2	—	—	—	10.0	27	10.1	12	9.7
3/2	長厚示数	—	—	11	19.4	—	—	—	18.3	18	17.9	11	18.1
5/4	骨体断面示数	62.5	73.3	15	67.4	—	—	—	68.4	27	67.3	10	68.3
5a/4a	中央断面示数	—	—	14	73.2	—	—	—	74.6	27	75.3	13	73.9
尺骨													
1	最大長	—	—	11	211.1	—	—	—	223.4	20	222.4	12	215.0
2	機能長	—	—	11	184.3	—	—	—	195.7	22	196.7	12	189.2
3	最小周	37	—	12	32.4	—	—	—	31.5	25	32.5	12	32.1
11	矢状径	11	12	17	11.2	—	—	—	10.5	28	10.8	12	10.9
12	横径	16	15	17	14.3	—	—	—	14.1	28	14.9	12	13.9
3/2	長厚示数	—	—	11	17.6	—	—	—	16.1	22	16.7	12	16.8
11/12	骨体断面示数	68.8	80.0	17	79.0	—	—	—	75.1	28	72.8	12	77.5

表9 上肢骨計測値 (女性)

傾向を見せている。前腕骨もまた、この頑丈な傾向を共有しているようだが、骨幹断面に比較群とは大差が見られない。

女性は例数が少なく、僅かに得られた2例の各計測値はかなりの差異を表していて、その特徴をつかみ難い。ただ、平均値でみる限りは概ね天福寺等の比較群にも近いようである。

下肢骨 (表10, 11)

男性下肢骨の長径は、上肢同様、概してやや短い。ただ、例数不足のためか大腿と下腿でやや異なり、例えば天福寺に較べて、大腿骨最大長では遜色ないが、下腿はいずれもより短い。また、骨幹はやはり太く頑丈な傾向を見せ、その幅、周径、さらに各長厚示数も、ほとんどが吉母浜を含めた比較群の平均を上回っている。一方、断面形状では、柱状性、扁平性はともに弱く、近世人的な特徴を窺わせているが、ただ、大腿骨の骨体上部にかなりの扁平性が見られ、その示数値は近、現代人よりは吉母浜中世人に近くなっている。

女性では2例の間にやはり大きな差異が見られ、一例は全体的に細小さが顕著だが、もう一例は逆に比較群を上回る太い骨体の持ち主となっている。ただ、いずれも断面形状にはさほどの変異は見られない。

		上月隈 (近世)			天福寺 (近世)		桑島 (近世)		江戸 (近世)		吉母 (中世)		九州 ¹⁾ (現代)	
		N	M	S.D	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨														
1	最大長	7	415.4	23.50	20	415.2	11	419.8	—	413.8	18	419.1	59	406.5
2	自然位長	3	416.0	12.17	18	410.0	11	416.7	—	410.3	15	418.1	59	403.2
6	中央矢状径	9	28.2	2.77	17	27.7	16	27.1	—	28.3	19	28.1	59	26.5
7	中央横径	9	28.7	1.66	17	26.9	16	25.2	—	27.4	19	27.7	59	25.6
8	中央周	9	89.1	4.83	17	85.4	14	84.0	—	87.2	19	87.8	59	82.4
9	骨体上横径	9	33.4	1.01	14	30.4	14	30.2	—	30.7	19	32.1	59	29.4
10	骨体上矢状径	9	25.2	1.79	14	26.3	14	23.3	—	27.8	19	24.1	59	24.3
8/2	長厚示数	3	22.2	1.99	13	20.5	11	20.3	—	21.3	14	21.2	59	20.4
6/7	中央断面示数	9	98.7	11.33	17	104.1	16	107.9	—	103.9	19	101.3	58	103.8
10/9	上骨体断面示数	9	75.4	5.00	14	86.7	14	77.3	—	91.2	19	76.1	58	82.8
胫骨														
1	全長	5	327.0	23.04	13	339.5	12	333.4	—	327.1	12	341.9	61	320.3
1a	最大長	6	333.0	21.28	16	340.1	12	339.5	—	331.2	11	348.0	60	326.9
8	中央最大径	7	30.3	3.95	14	29.4	16	27.5	—	28.9	20	29.6	61	27.8
8a	荣養孔位最大径	8	35.3	3.99	15	33.7	—	—	—	32.9	20	33.8	60	30.6
9	中央横径	7	22.4	1.51	14	21.9	17	20.4	—	21.6	20	21.6	61	21.1
9a	荣養孔位横径	8	25.3	1.49	15	24.1	—	—	—	23.7	20	24.0	61	23.7
10	骨体周	6	83.7	10.13	14	80.4	17	80.5	—	79.4	20	80.8	62	78.4
10a	荣養孔位周	9	93.3	9.26	15	91.3	17	89.7	—	89.3	20	90.8	61	88.9
10b	最小周	9	75.7	6.00	15	73.7	17	73.3	—	70.8	20	74.5	60	71.3
9/8	中央断面示数	7	74.8	7.98	14	74.8	17	74.2	—	74.9	20	73.0	61	76.1
9a/8a	荣養孔位断面示数	8	72.1	5.45	15	71.9	—	—	—	72.2	20	71.0	60	77.5
10b/1	長厚示数	5	23.2	3.74	8	21.3	12	22.5	—	21.7	12	22.0	60	22.4
腓骨														
1	最大長	5	327.8	16.80	12	335.3	5	332.6	—	327.2	10	335.0	58	322.9
2	中央最大径	7	14.3	1.98	13	14.3	15	14.5	—	15.3	17	16.1	59	14.5
3	中央最小径	7	11.3	1.80	13	10.8	15	10.7	—	11.0	18	10.8	59	10.0
4	中央周	7	42.3	5.12	13	40.5	15	44.4	—	43.4	17	44.8	59	41.5
4a	最小周	5	36.4	2.70	10	35.9	13	38.4	—	36.3	19	37.3	59	35.6
3/2	中央断面示数	7	79.1	6.83	13	75.5	15	74.2	—	72.1	17	68.0	59	69.5
4a/1	長厚示数	4	11.4	1.37	7	11.1	5	11.9	—	11.1	11	11.5	58	11.1

1) 阿部 (1955)、鑄鍋 (1955)

表10 下肢骨計測値 (男性)

		上月隈 (近世)		天福寺 (近世)		桑島 (近世)		江戸 (近世)		吉母 (中世)		九州 (現代)	
		SX-79	SX-104	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨													
1	最大長	(330)	—	18	380.6	7	397.7	—	377.9	25	378.0	13	380.1
2	自然位長	—	—	16	376.7	7	393.1	—	374.4	24	375.8	13	375.9
6	中央矢状径	22	24	21	23.6	7	24.5	—	24.8	28	23.3	13	23.6
7	中央横径	26	25	21	24.0	7	23.4	—	24.1	28	24.8	13	23.2
8	中央周	74	78	21	75.2	7	75.8	—	76.9	28	76.1	13	74.2
9	骨体上横径	28	30	17	27.7	7	26.9	—	26.5	28	29.1	13	27.5
10	骨体上矢状径	21	23	17	22.7	7	20.8	—	25.5	28	20.9	13	21.3
8/2	長厚示数	—	—	15	19.8	7	19.3	—	20.5	24	20.4	13	19.8
6/7	中央断面示数	84.6	96	21	98.7	7	104.6	—	103.1	28	94.5	13	102.0
10/9	上骨体断面示数	75.0	76.7	17	82.3	7	77.9	—	97.3	28	72.0	13	77.1
胫骨													
1	全長	275	—	15	301.8	5	319.0	—	301.5	16	309.2	14	301.0
1a	最大長	278	—	15	305.6	5	324.5	—	305.8	17	313.8	14	306.6
8	中央最大径	23	—	17	24.4	6	26.2	—	25.3	26	26.1	14	24.7
8a	荣養孔位最大径	26	30	19	27.8	—	—	—	28.8	25	29.7	14	28.1
9	中央横径	19	—	17	18.6	6	18.1	—	18.9	26	18.3	14	18.8
9a	荣養孔位横径	19	24	19	20.7	—	—	—	21.2	25	20.0	14	21.1
10	骨体周	66	—	17	67.5	6	74.9	—	70.0	26	70.3	14	70.1
10a	荣養孔位断面示数	71	84	19	76.5	6	81.8	—	78.1	25	78.3	14	78.2
10b	最小周	63	68	17	62.7	6	69.4	—	63.7	25	64.9	14	63.6
9/8	中央断面示数	82.6	—	17	76.9	6	69.6	—	72.4	26	70.4	14	76.3
9a/8a	荣養孔位断面示数	73.1	80.0	19	75.0	—	—	—	73.6	25	67.4	14	74.9
10b/1	長厚示数	22.7	—	14	21.2	5	22.0	—	21.1	16	20.6	14	21.2
腓骨													
1	最大長	—	—	6	300.0	4	315.2	—	296.1	13	304.7	14	300.6
2	中央最大径	14	14	11	12.8	5	13.2	—	12.8	23	13.7	14	12.9
3	中央最小径	9	10	11	9.2	5	8.9	—	9.4	23	9.7	14	8.6
4	中央周	39	38	11	36.6	5	42.1	—	37.3	22	39.2	14	36.8
4a	最小周	32	—	8	32.9	5	36.0	—	31.9	22	33.0	14	32.3
3/2	中央断面示数	64.3	71.4	11	71.9	4	67.5	—	73.9	23	71.3	14	32.3
4a/1	長厚示数	—	—	5	11.0	5	11.4	—	10.7	13	11.1	10	10.8

表11 下肢骨計測値 (女性)

	男 性		女 性	
	N	M	N	M
上月隈 (近)	8	158.9	1	137
天福寺 (近)	24	159.4	20	146.5
桑島 (近)	10	158.8	5	150.4
粒江 (近) ¹⁾	—	158.4	—	—
江戸 (近)	95	159.1	45	146.4
吉母浜 (中)	18	159.7	22	146.5
材木座 (中) ²⁾	10	159.7	3	146.9
金隈 (弥) ³⁾	17	162.7	17	151.3
西南日本 (現)	37	157.7	10	146.3

1) 池田 (1981)、2) 鈴木 (1956)、3) 中橋他 (1985)

表12 推定身長の比較

推定身長 (表12)

主に大腿骨最大長にPearsonの式を適用して推定身長を求めると、表12に示したように、男性は158.9cm、女性は137cm (但し1体) となる。1体のみの女性はともかくも、男性は当地の弥生人等よりは明らかに低く、他の近世、中世人と同様、比較的低身長の集団と言える。

総括・考察

1989年秋から冬にかけての発掘調査によって、福岡市南東部の上月隈遺跡から、弥生中期末所属の人骨7体と、江戸時代後期の人骨12体が出土した。残念ながら弥生人骨については、保存不良のためその形質の特徴は殆ど掴めなかったが、近世人については以下に概括されるような特徴が明らかとなった。

- ・男性ではかなりの個体変異はあるものの強い長頭傾向が見られた。
- ・男性の顔面にはかなりの高、狭顔傾向が見られるが、天福寺に較べるとその程度はやや弱い。
- ・鼻根部は著しく扁平である。
- ・男女ともかなり歯槽性突顎が強い。
- ・1体の女性頭蓋は全体的にサイズが小さく、顔面には小、低顔傾向が見られた。
- ・上、下肢ともに比較的短い、骨体は頑丈でかなり屈強な体躯の男性集団である。一方、女性は2体間で大差が見られるが、1体は著しく華奢である。
- ・男性上腕骨にやや扁平性が、大腿骨上部にもかなりの扁平性が見られるが、他の骨幹形状に柱状性や扁平性は認められない。
- ・身長は男性は158.9cmでやや低く、女性1体も137cmの著しい低身長であった。

以上の上月隈近世人の特徴は、全体的には地理的にも近い博多の天福寺江戸時代人や当地の現代人に近く、その意味ではかなり明確な地域性が見られるようである。例えば図2は頭蓋9項目を用いて上月隈近世人からのPenroseの形態距離を求めた結果であるが、上記のように天福寺、西南日本人、さらには山口県の吉母浜中世人といった、近在の集団とかなり近い形態の持ち主であることが示されている。しかし、こうした地域性のかなりの部分が、当地における中

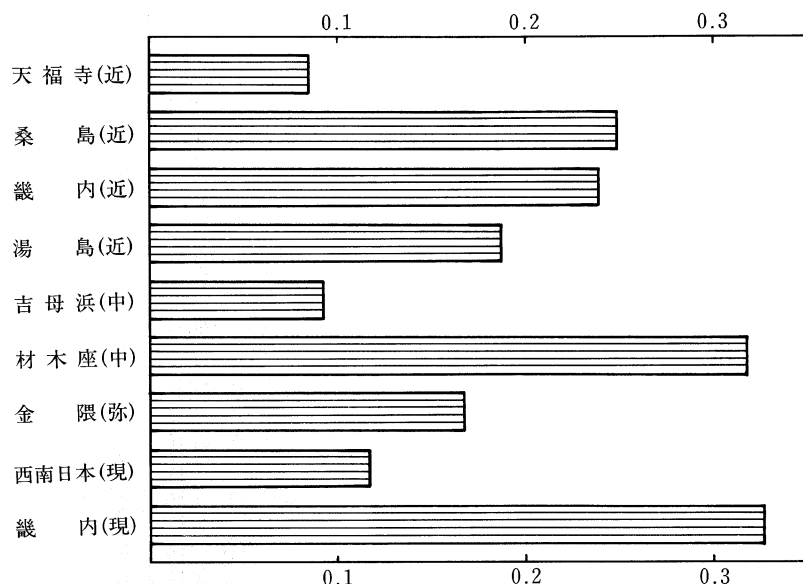


図2. 上月隈近世人からのペンロースの形態距離(頭蓋9項目・男性)

世以降の強い長頭性に負っており、顔面部だけを見るとまた異なった類似関係の見られることは既に別報で触れた(中橋、1987)。より強度の長頭の持ち主である桑島近世人とはその意味で類似した地域傾向を持つものと言えなくもなく、短頭に傾く畿内近世人等との隔たりとはその内容が異なることは注意すべきであろう。

また、この頭型に関して指摘しておきたいのは、現在まで長頭性が強く残っている当地域内でも、その遺跡によって、長頭の程度に差のある可能性が窺われる点である。つまり、中世人である吉母浜がより長頭であることには時代的変化の関与も考えられようが、同じ近世期においても、博多の近世人に較べてこの上月隈、あるいは熊本県の桑島の方が強度の長頭の持ち主であり、さらには福岡県南部の筑紫野市原田遺跡近世人(中橋、土肥、1990)もまた同傾向にあることが明らかとなっている。都市部の住人より非都市部在住民の方が概して長頭性が強いことは先に池田(1981)が指摘し、筆者もまた博多の天福寺近世人の報文(中橋、1987)の中で触れたことであるが、今回、上月隈遺跡から得られた資料もまた、そうした状況を一応は補強する結果となった。

また、同じ問題でもう一つ指摘しておきたいのは、上月隈は天福寺に較べてその高顔性の程度がやや弱そうだという点である。ちなみに図3は顔面部8項目を用いて主成分分析を行った結果である。この図の右上に行くほどサイズが大きく、高、狭顔傾向が強いことを示す訳だが、この中で上月隈は天福寺よりかなり下の、現代人集団に近く位置しており、いわばより下の吉母浜中世人と上位の天福寺近世人をつなぐ中継点になっている。こうした傾向は頭蓋9項目を用いて天福寺と吉母浜の各個体分布の中に上月隈を組み入れて分析した結果(図4)でも示さ

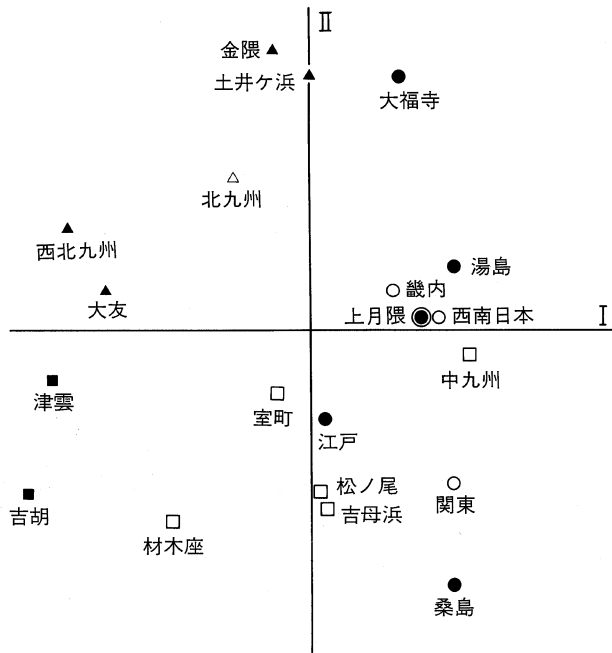


図3. 主成分分析(男性・顔面8項目)

(●近世、○現代、□中世、△古墳、▲弥生、■縄文)

れ、かなりのばらつきを見せるものの、天福寺、吉母浜両者の分布域のほぼ中間域に上月隈の各個体が分布している状況が見取れよう。

以上の結果からみて、今回、上月隈遺跡から出土した近世人は、先に天福寺で指摘したほどの高顔性は持たず、頭型もより長頭に傾き、さらには鼻根部も偏平なままであるといった、いわばより古い形質を各所に残した集団であったと行うことができよう。それはまた、天福寺近世人の形質に関連して、都市、非都市間の差異として指摘していた傾向（中橋、1987）とも一応は矛盾のない結果になっているようだが、ただ、上記のように当遺跡では例数が少ないこともあって変異が大きく、この程度の差にどれほど意味をもたせ得るのか、まだ疑問もない訳ではない。当面はさらに資料の追加、充実を図る必要があり、これ以上踏み込んだ考察は控えたいが、いずれにしろ、今後、博多やその周辺地域でさらに資料が追加されていけば、ヒトの形質とその居住環境との相関に関してより明確な考察が可能となることが期待されよう。

最後にもう一点、人骨形質の問題とは離れて、埋葬姿勢のことに触れておきたい。当遺跡では既に改葬によってかなり乱されていたため、確認できたのは少数に留まったが、その中でも、例えば座葬の場合は西方に顔、身体を向けた例が多いこと、横臥の場合は、概して北頭、右側臥で顔、身体はやはり西方に向ける傾向のあることが窺われた。先に博多の中世人等でも指摘したことであるが、博多ではこうした埋葬姿勢にかなり乱れがあり、一定しないのに対して、

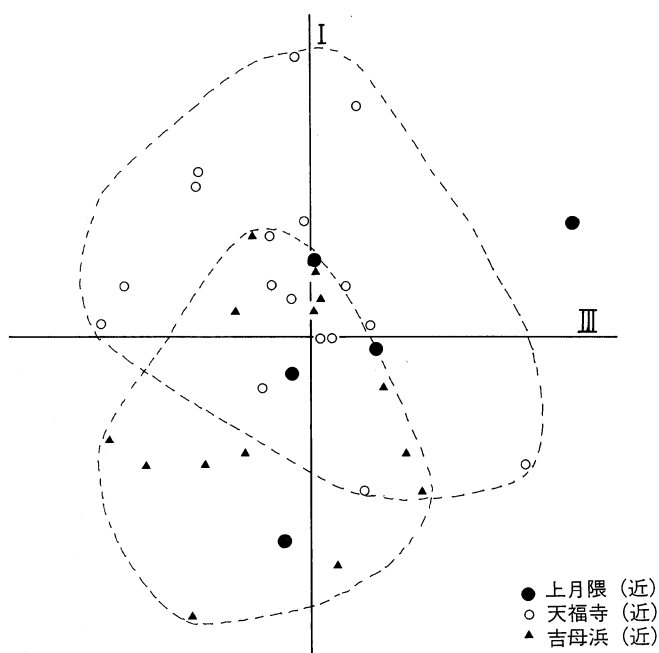


図4. 主成分分析(男性・頭蓋9項目)

筑紫野市の原田近世墓や熊本県の浄業寺、杉谷中世墓といった九州の遺跡のみならず、愛知、千葉、栃木各県の中世遺跡でも、北頭、右側臥屈葬、あるいは西向き座葬にかなりこだわった埋葬状況が報告されている。少しばらつきのある今回の上月隈の状況は、いわばその中間型と言うべきであろうか。ともあれこうした埋葬は、その方位からみて、仏教に関連した習俗であることは想像に難くないが、わが国でいつごろから、どこで始められ、古代社会においてどういう普及状況がみられたのか、まだまだ不明な点が多い。埋葬習俗に関連した一つの興味ある問題点として、識者による今後の検討と教示を期待したい。

文献

阿部英世 (1955) : 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」 人類学研究 2。

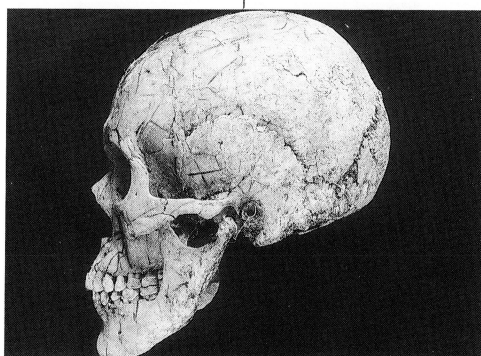
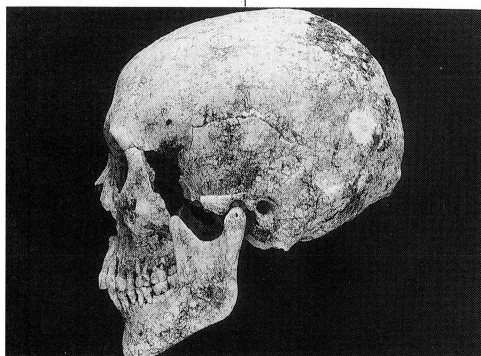
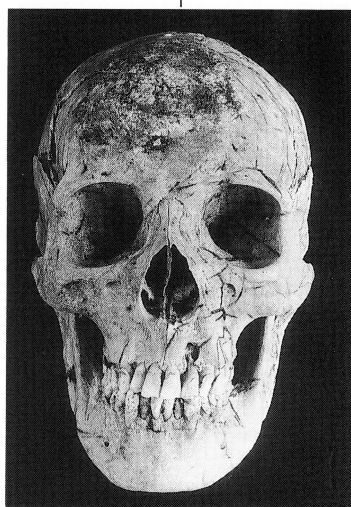
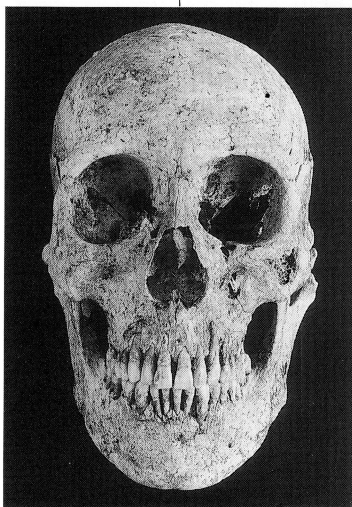
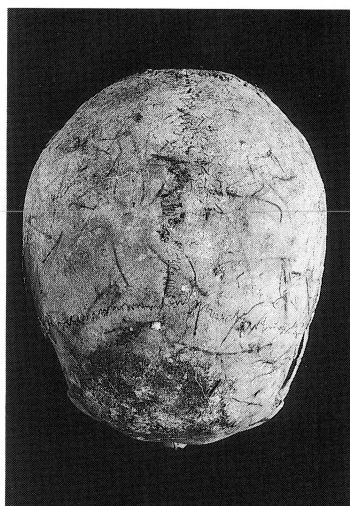
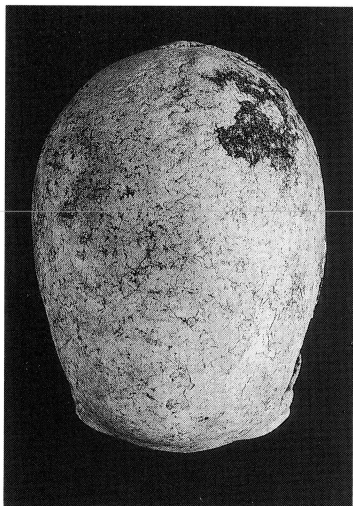
遠藤萬里・北條暉幸・木村賛 (1967) : 「四肢骨」 増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体 (鈴木、他、編)、東京大学出版会。

原田忠昭 (1954) : 「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」 人類学研究 1。

Howells, W.W. (1973) : "Cranial variation in Man" Pap. Peabody Mus. Archaeol. Ethnol., 67, Harvard Univ.

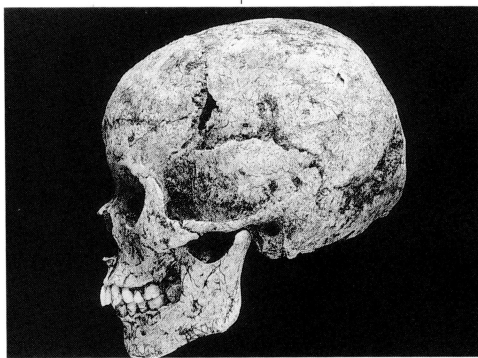
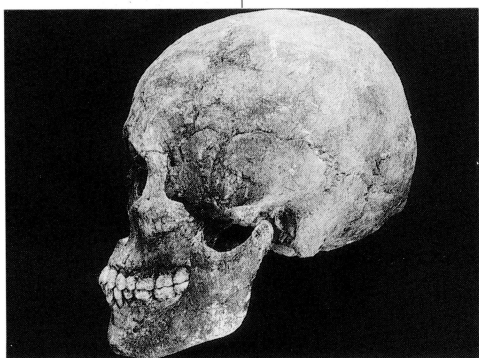
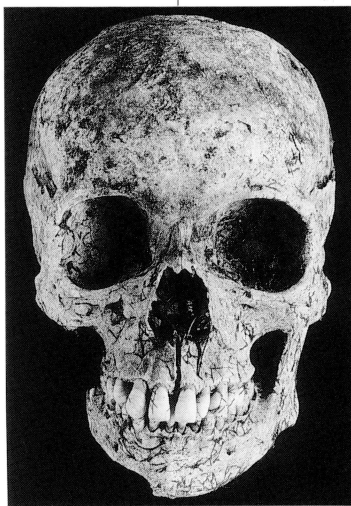
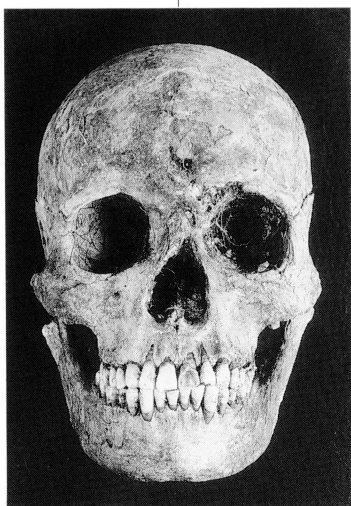
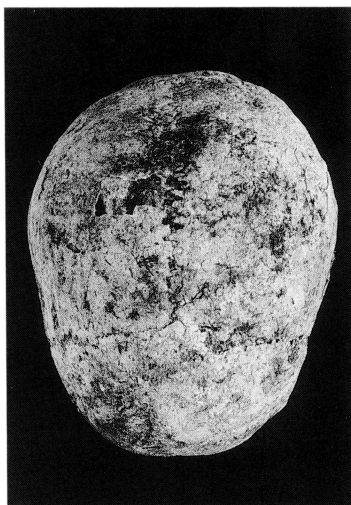
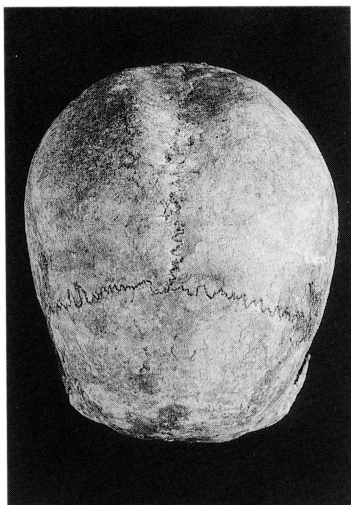
池田次郎 (1981) : 「異説 弥生人考」 季刊人類学 12-4。

- 鑄鍋勝登 (1955) : 「九州人下腿骨の研究」 人類学研究 2。
- 欠田早苗 (1959) : 「畿内人頭骨の人類学的研究」 人類学輯報 25。
- 河越逸行 (1957) : 「湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究」 慈恵会医大解剖業績 16。
- 清野謙次・平井隆 (1928) : 「津雲貝塚人骨の人類学的研究 第3部、上肢骨の研究、4部 下肢骨の研究」 人類学雑誌 43。
- 金高勸次 (1928) : 「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」 人類学雑誌 43。
- 松下孝幸 (1981) : 「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」 大友遺跡、佐賀県呼子町文化財調査報告書 1。
- Martin-Saller (1957) : "Lehrbuch der Anthropologie" Bd.1. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 溝口静男 (1957) : 「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」 人類学研究 4。
- 森田茂・河越逸行 (1960) : 「湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究補遺」 人類学雑誌 67。
- 森本岩太郎 (1971) : 「胫骨横断指数の算出をめぐる—Martin法への反省」 人類誌 79。
- Nakahashi, T. & M. Nagai (1986) : "Sex assessment of fragmentary skeletal remains." J. Anthropol. Soc. Nippon 94.
- 中橋孝博 (1987) : 「福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨」 人類学雑誌 95。
- 中橋孝博 (1988) : 「古人骨の性判定法」 日本民族・文化の生成 (永井昌文教授退官記念論文集)、六興出版。
- 中橋孝博・永井昌文 (1985) : 「山口県下関市吉母浜遺跡出土の弥生・中世人骨」 吉母浜遺跡、下関市教育委員会。
- 中橋孝博・永井昌文 (1989) : 「弥生人の形質」 弥生文化の研究1、雄山閣。
- 中橋孝博・土肥直美・永井昌文 (1985) : 「福岡市金隈遺跡出土の弥生時代人骨」 金隈遺跡、福岡市教育委員会。
- 中橋孝博・土肥直美 (1990) : 「福岡県筑紫野市原田遺跡出土の近世人骨」 (抄) 解剖学雑誌 65。
- 立志悟郎 (1970) : 「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人、上肢骨の人類学的研究、下肢骨の人類学的研究」 熊本医学会雑誌 40。
- 専頭時義 (1957) : 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」 人類学研究 4。
- 鈴木尚 (1956) : 「鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨」 岩波書店、東京。
- 鈴木尚 (1963) : 「日本人の骨」 岩波新書、477。
- 脇達也 (1970) : 「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代頭骨の研究」 熊本医学会雑誌 44。



S X - 03 (男・熟年)

S X - 18 (男・熟年)



S X - 63 (男・熟年)

S X - 79 (女・成年)